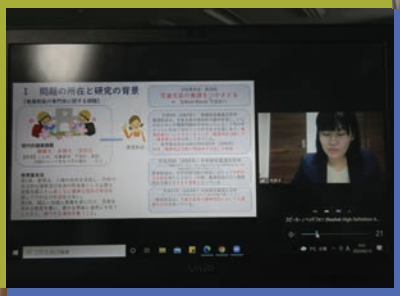
ISSN 2187-7319

愛知教育大学・静岡大学教育学研究科（後期３年博士課程）
共同教科開発学専攻　2021 年度報告書

ROAD

Annual Report 2021



2022 年 3 月第 10 号

国立大学法人　愛知教育大学
国立大学法人　静　岡　大　学

愛知教育大学大学院教育学研究科
静岡大学大学院教育学研究科
共同教科開発学専攻

2021 年度報告書

ROAD

Annual Report 2021

2021 年度
合同ガイダンス

2021 年 4 月 4 日（日）

2021 年度
最終試験（9 月修了生）

2021 年 7 月 18 日（日）

2021 年度
秋季学位記授与式

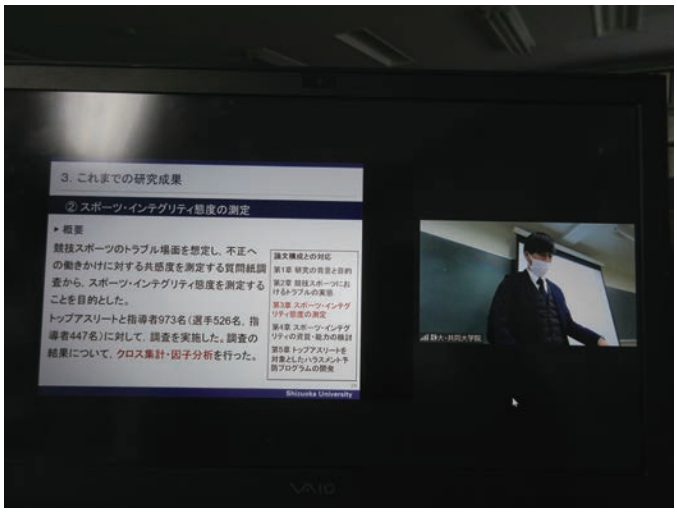
2021 年 9 月 10 日（金）

2021 年度
教科開発学セミナーⅡ

2022 年 2 月 12 日（土）

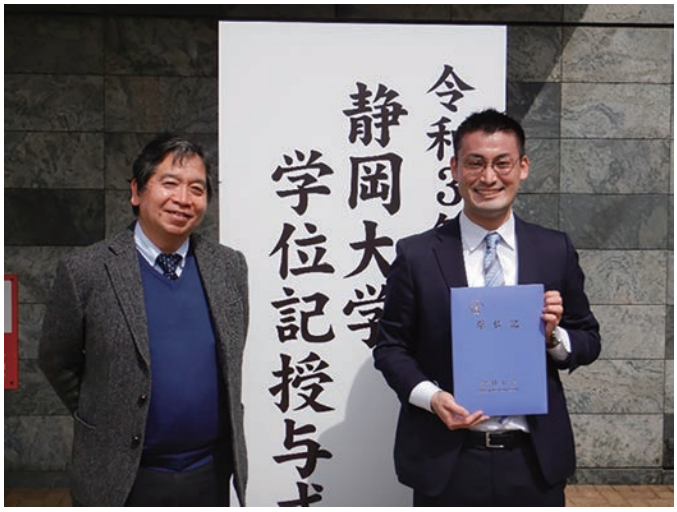
2021 年度
教科開発学セミナーⅠ

2022 年 2 月 13 日（日）



2021 年度
学位記伝達式

2022 年 3 月 23 日（水）



CONTENTS

目　次

巻頭言

Ⅰ．共同教科開発学専攻の概要　1

Ⅱ．共同教科開発学専攻連絡協議会議長年次報告　23

Ⅲ．学生の研究課題と指導体制　37

Ⅳ．学生の研究計画と研究活動　47

Ⅴ．修了生一覧と論文要旨　77

Ⅵ．教科開発学研究会　93

Ⅶ．教員の教育・研究活動　97

Ⅷ．諸資料　141

巻 頭 言

コロナ禍で拡大される教科「開発」学の価値

共同教科開発学専攻
議長 飯 島 康 之

コロナ禍に見舞われた２年間で、多くのことが失われ、多くの混乱が生まれました。二度と起きてほしくない。そう思います。一方で、それまでの日常を継続できない現実は、日常の背景にあるものの意識化と、「もしそれを変えるなら何が可能になるのか」という企画化と、試行や検証の機会も与えてくれました。

研究開発は、新しい可能性を提案しますが、その採用は、「それまでの平常の破棄」を意味します。社会の多くの場面において、「高性能、低価格、迅速化」などの訴求力は、新しいモノや仕組みへの新陳代謝の原動力になり、「既存のモノや仕組み」は自然淘汰の中でひっそりと消えていきます。

一方、教育の場ではそう簡単に、「それまでの平常」を破棄することはできません。「それまでの平常」が続いてきたことにはそれなりの理由があります。実績があります。新しいモノや仕組みに代替したときに発生する潜在的なリスクなどを考えると、そう簡単には変えることができません。ある意味で、それは当然のことです。当然のことではありますが、個人的には、「あまりに変わらない現実」を、この30年実感してきました。

私は図形教育の場において、「動的な探究」を実現したいと思い、Geometric Constructorというソフトを開発しました。初版は1989年です。ソフトだけあっても納得していただけるはずがない。いい授業が一番の訴求力のはずだ。そう思って、さまざまな先生方と授業開発を行いました。新たな教材から新たな授業を設計し、それを実現するためにソフトの改良や教材開発あるいは指導法の工夫など、一連のことをしました。結果そのものもそうですが、その一連の流れそのものがとても魅力的です。もちろん共同研究者の先生方に多くの負担を強いているに違いありませんが、先生方、生徒、私たちそれぞれがそれなりの充実感を感じて取り組んできました。

テクノロジーの進展は、そのときどきにおいて、さまざまな「壁」を消してくれました。モノによる教具の開発をソフトの開発に変えることによって、複製が飛躍的に楽になりました。郵便やFAXでのやりとりやフロッピィでの配布が、インターネット配信により劇的に変わりました。1995年のことです。共同研究者との議論は、メーリングリストによって日常的に行えるようになり、「学校の機器へのインストールの権限の問題」は、Java版の開発で部分的に乗り越えることができ、2010年のGC/html5の開発で、根本的に解消しました。

数学教育としては、「このソフト」の普及が重要なわけではありません。「このようなソフト」つまり、動的幾何ソフトといわれる種類のものによって、あるいは数学用ソフトによって、数学教育あるいは教育全体に対してどういう影響を及ぼしうるのかが問題です。世界的に見れば、萌芽期（1990年前後）に、cabriやGeometer's SkechPadなど複数の商業用ソフトが開発され、2000年にはシンデレラなどが開発され、そして現在は、フリーソフトのGeoGebraが最も「元気」です。

しかし、世界の数学教育の中で、ICT利用はかなりあたりまえの存在に変わりつつある中で、日本の数学教育でのICT利用はほとんど変わらないままなのです。あるいはいつまでたっても「非日常的な研究授業」のための道具のままなのです。「入試で使えないのだから、使わない」というような1990年頃に耳にした言葉をずっと耳にしてきました。そのような感覚は、2016年に附属

高校の校長を併任させていただき、さらに強まりました。さまざまな価値観も行動様式も、自分が高校生だった40年前とほとんど変わっていないのです。でも、世の中の価値観も行動様式も、モノも仕組みもかなり変わっているのに。その「変わらない／変われない教育の現実」って、なんなのだろうと。附属高校が問題ということではありません。高校での数学教育全体が変わっていないのです。実際、2年前、コロナ禍で休校措置が始まったとき、附属高校の先生方が、さまざまな形で新しい授業を提案し、協力しながら実現している姿を、元校長兼大学教員として拝見しました。その生き生きとした姿は、私にはとても輝いて見えました。

コロナ禍が教育現場に導いたものの一つは、「WiFiでネットワーク接続された一人一台の端末群」です。その導入は, 多くの混乱もリスクも多大な経費も伴います。まず「with コロナ」に方針や行動様式を変え、弱毒化に伴って、いずれは過去の日常に戻っていく。過去の日常に戻れたら「非常事態用のシステム」として仕舞いこんでおけばいい。何もなかったように、「元に戻ればいい」…のでしょうか。私は、もう「別の世界に変わってしまった。新しい時代になってしまった。」と思っています。これまでも累積的にたまってきた、さまざまな不合理を見直して、新しい前提の中での新しいモノや仕組みを再設計するチャンスだと思っています。

それを見据えていろいろな試行もしています。たとえば、私の学部・大学院での授業はすべて（３つのカメラで）録画し、その日のうちに編集・アーカイブし、次の日にはアクセスできるようにしています。現状においては、「コロナのリスクがあるので対面参加できない学生」用のオンデマンド素材として利用していますが、「すべての授業の様子が録画されている」ことによって、さまざまな利用可能性があることを実感したいのです。実際、そういう形で学校での授業の様子を自動的にアーカイブするためのハード・ソフトはかなり低価格化しています。おそらく数年後には、そのような授業アーカイブを活用するためのシステムも生まれてくるでしょう。さまざまな教授スキルを分析し、研修するための仕組みも開発できるでしょう。「一人一台のタブレットシステム」を活用している先生方の話をうかがうと、決してドリルなどの利用だけではないことを実感します。

たとえば、普段の取り組みを学校での学びに生かしてほしいと思っている企業はかなりあるようですが、学校での実践に参加するに際して、距離・時間・経費の壁が支障になることも多々あるようです。そのようなとき、リモート参加という形で実現しているケースもあるとのことです。障害のある人の障壁を軽減する上で、ちょっとしたアプリ(あるいは機能, たとえば、読み上げ機能)を使うだけで、かなり改善できることもあります。昭和的な画一性･標準性への指向から、多様性などにシフトチェンジをしていく上で、「少なくとも国内のすべての小中学校のインフラが変わった」ことは、新しい時代へ切り替わる入場券を購入したことを意味すると実感しています。それを非常事態のためのシステムとして仕舞い込むことは、時代に取り残されることにしかならないでしょう。

私のアイデアを具現化し、社会実装していく上で、長い時間も労力も必要でしたが、今回のインフラは、提案を実行し、共有していく上で、格段の可能性を持っています。それを生かすのか、生かさないのか、それが問われているともいえます。そう思ったとき、私たちの専攻に名称に入っている「開発」という言葉はすばらしいと、私は思うのです。国内にもさまざまな教育学研究科はあります。もちろん私たちだって、開発だけに取り組んでいるわけではありません。ただ、新しい時代に合わせた理論・実践等を「開発」し、提案し、そして社会を変えていく原動力になっていきたいと思うとき、「名は体を表す」と思うのです。

コロナ禍のようなことは二度と起きてほしくはありません。でも、起こってしまった今回のコロナ禍を、チャンスに変えていきたいし、その上で、名称の中の「開発」にこだわってみること。それは私たちの想いを束ねていく上での一つの手がかりになると思うのです。

Ⅰ．共同教科開発学専攻の概要

１．専攻の趣旨・目的

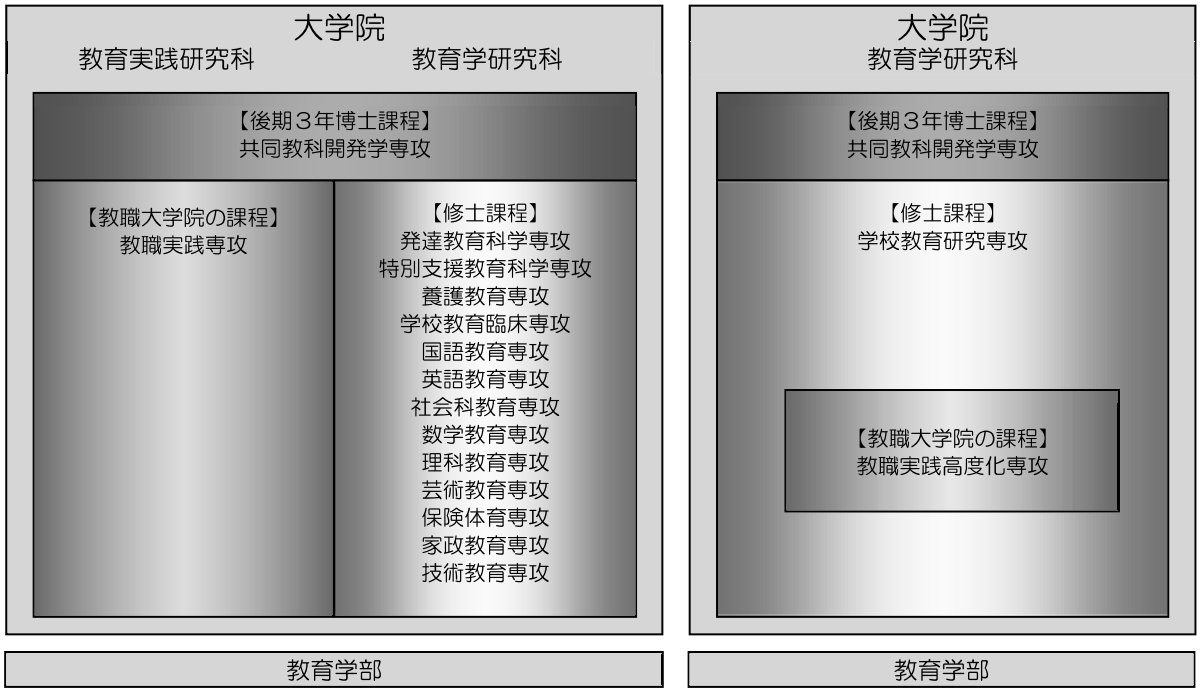
共同教科開発学専攻（以下「本共同専攻」という。）は，共同教育課程制度を活用し，愛知教育大学と静岡大学の教育学研究科に設置された，後期３年のみの博士課程です。

本共同専攻の設置は，教育を取り巻く社会状況や学校教育が抱える課題が複雑化し，学校教育現場の教員に高い資質能力が求められていく一方で，教員養成カリキュラムの目的性や科目の体系性の欠如等の課題が浮き彫りになってきていること，それに加え，中央教育審議会においても，教員の資質能力の向上のための教員養成システムにおける修士レベル化が検討されることとなり，これらに対応するための体系的な教員養成カリキュラムの編成及び専門科目の体系化，また，それを可能とする大学教員の養成が喫緊の課題となっていること，などが背景となっています。これらの課題に応えるため，愛知教育大学及び静岡大学教育学部は，国立の教員養成系大学学部としてこれまで取り組んできた実績を活かし，大学教員養成のための博士課程を設置しました。

専攻名称ともなっている「教科開発学」は，教科専門・教科教育・教職専門の枠を越えて，子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ，教科との関わりの中で学校教育が抱える複雑・多様化した諸課題に対応した研究を遂行していくため，教科専門と教科教育を融合・発展させた「教科学」と，教職専門を発展させた「教育環境学」とをあわせて体系化することを目指す新たな学問領域です。

本共同専攻は，「教科開発学」の究明を通じて，教科内容の構成原理等を明らかにしながら「教科学」と「教育環境学」の融合・体系化に熱意を持って取り組む大学教員を養成していくこと，また，「教科開発学」を専門とする大学教員を養成し，その教員が「教科開発学」に関する教育研究に基づいた教員養成カリキュラムを編成して学部，あるいは修士課程等で指導を行うことによって，優れた学校教育現場の教員を輩出するという教員養成系大学・学部ならではのサイクルを確立することを目指しています。

共同教科開発学専攻が置かれる環境



２．専攻の内容・特色

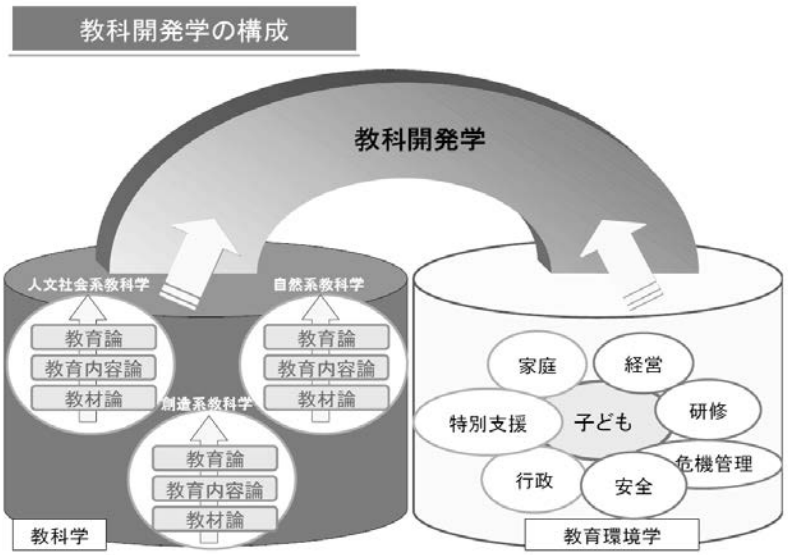
「教科開発学」は，教科専門・教科教育・教職専門の専門性の枠を越えて，子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ，教科との関わりの中で学校教育が抱える複雑・多様化した諸課題に対応した研究を遂行していくものです。「教科開発学」は，主に，教育環境に適した教育内容構成の研究（教科学），教科内容として構成されたものを実践するための教育環境の研究（教育環境学）から構成されます。教科専門と教科教育を融合・発展させた「教科学」と，教職専門を発展させた「教育環境学」が「教科開発学」を構成します。そして，本共同専攻は，「教科学」あるいは「教育環境学」のいずれかを基軸としつつ，もう一方の学問分野の研究を進めていくというところに特色があります。

専攻の分野として「教育環境学」，「教科学」（人文社会系教科学，自然系教科学，創造系教科学）という４つの分野を設置しています。

教科学研究のアプローチとして，教育論・教育内容論・教材論という３つの基本軸からのアプローチを行うことも本共同専攻のもう一つの特徴です。「教育論」は，児童生徒の発達のために，どのような教育目標のもとに，どのような内容をどのように教え（教師）・どのように学ぶか（学習者）を論じるもので，従来の「教科教育科目」で検討してきた目標論，指導論，学習過程論をも含みます。「教育内容論」は，それぞれの学術（学問・芸術）分野を基盤として持ちながら，その全体像から個々の学問分野の必須部分を抽出し，個々の専門分野がどのように関連しながら「教科」の内容がいかなるものから構成されているかを追究するものです。「教材論」は，教科が，それぞれの学術（学問・芸術）分野を基盤としながら構成されている教材の在り方を論究し，教材の開発をすることにより教科内容の構成あるいは教材配列等を実践的に考察・検証するものです。これらの３つのアプローチにより，３つの系を超えて教育論・教育内容論・教材論を集約し，教科内容構成を追究していきます。

教育関係等の仕事に従事しながら，入学して修学することができるよう，講義は，原則的に土曜日，日曜日に実施し，夏期や冬期における集中講義も導入するなど，時間割や学修プログラムを作成している点も本共同専攻の特色です。

（専攻名）		（分野）
共同教科開発学専攻	―	教育環境学
		人文社会系教科学
		自然系教科学
		創造系教科学



教育環境学分野

子どもたちが主体的に働きかけ，働きかけられる自然・社会・文化・日常生活等のあらゆる過程を子どもの発達の視座から教育環境を捉える学問。確かな学力・豊かな心・健やかな体の調和を重視して「生きる力」を育む場合，家庭，学校，地域，社会といった学校を取り巻く環境との関連を常に視野に入れておくことが重要です。「教育環境学」においては，従来の教職専門領域で扱ってきた内容を発展させ，子ども，学校，地域，社会を含めた幅広い学校教育を取り巻く多様な環境領域を体系的に研究し，教科の土台や基盤を追究します。

教科学分野

従来の教員養成カリキュラムでは，「教科」の学問的内容を「教科専門」，「教科」の指導法を「教科教育」として編成されていますが，両者の体系化はまだ進んでいません。そのため，教員養成における「教科」の研究を本格的に確立するために「教科学」を創設します。「教科学」は，従来の教科専門と教科教育を融合し，教科がどのような構成原理で成り立っているのか等を中心に教科内容の構成原理を探求するものです。教科を「人文社会系」，「自然系」，「創造系」という３つの分野に分類し，教科における学習内容の構成がいかなる原理からなっているか，その編成の仕方はどうあるべきか等を探究します。以下，３つの分野について紹介します。

① 人文社会系教科学分野

地域社会における言語，文学，歴史，文化，自然にかかわる人文社会的な課題に対して，自らが実際にかかわることにより主体的に考察を進め，地域に密着した教育方法や教材を作り上げていく必要があります。この分野では，誰かが集めた史資料（二次史資料）や既存の結論で考察を進めるのではなく，史資料読解やフィールドワーク（参加，体験，観察，インタビュー，収集など）により自らが積極的に対象にかかわることで得られた一次史資料や知見によって地域研究を進め，その研究成果をもとにした教科開発をめざします。具体的には，言語学，歴史学，地理学，民俗学の立場からアプローチして，それらの研究領域から得られた高度な地域研究の成果をふまえた教育論，教育内容の構成原理や教育方法，教材を開発します。

② 自然系教科学分野

社会が複雑化し，自然環境が変化し，従来の価値観が変わる中で，科学的リテラシー，数学的リテラシー(科学的, 数学的に思考するための基本となる能力) の育成が求められています。観察，仮説の立案（モデルの構築），検証（論理的説明，実証）などの活動を通して自然系教科における教育論，教科内容の構成原理や教育方法，教材を開発します。具体的には，(ア)地球環境という視点からみた新たな理数教育カリキュラムや日常生活及び先端科学技術とリンクした理数教育カリキュラムの構築，(イ)最先端の研究成果から様々なトピックの提案を「教科学」の立場から行い，情報教育・情報科学の知識を活用して，教材化及び必要なデジタルコンテンツ化を図る，(ウ)電子黒板やＰＤＡ端末などのＩＣＴ環境が整備された教室における教育内容・ 教育方法のあり方，あるいは学習集団の特性・行動パターンを反映しうる動的な教材を開発します。

③ 創造系教科学分野

音楽科・美術科・体育科・家庭科・技術科等では，子どもたちの潜在的能力や感性を引き出し，これらを育てる活動を支援する方法を組織的・系統的に開発していく必要があります。この分野において「生きていく上で基礎となる幅広い生活力や， 健康あるいは体力を備え，豊かな表現力を発揮できる人間の育成」を目指し，「生活力」，「身体力」，「表現力」を中心とした教育論，教科内容の構成原理や教育方法，教材を開発します。具体的には「生活力」の周辺領域として，異世代との共感力，自らの生活課題の発見，生活課題を解決する知識・技術，ものづくり教材開発，ものづくり教材の授業実践等があります。「身体力」の周辺領域として，保健情報の収集と分析，体育教師教育論，運動学習，運動に対する動機づけ等があります。「表現力」の周辺領域として，観賞とリテラシー，思考プロセスと表現技法，音楽と身体の動き，発想支援等があります。

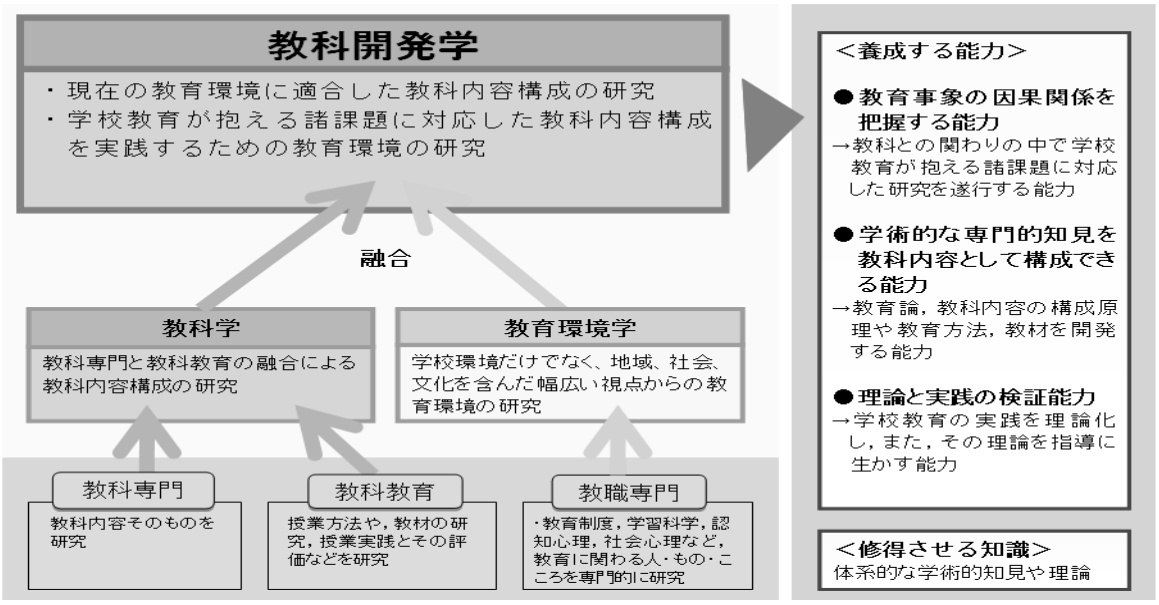
３．養成する人材像

本共同専攻は，「教科開発学」による教育研究を通して，子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ，教科との関わりの中で学校教育が抱える複雑･多様化した諸課題に対応した研究を遂行する能力（「教育事象の因果関係を把握する能力」）や，教育論，教科内容の構成原理や教育方法の研究，教材を開発する能力（「学術的な専門的知見を教科内容として構成できる能力」）といった学術的な専門的知見を教科内容として構成できる力を養成します。

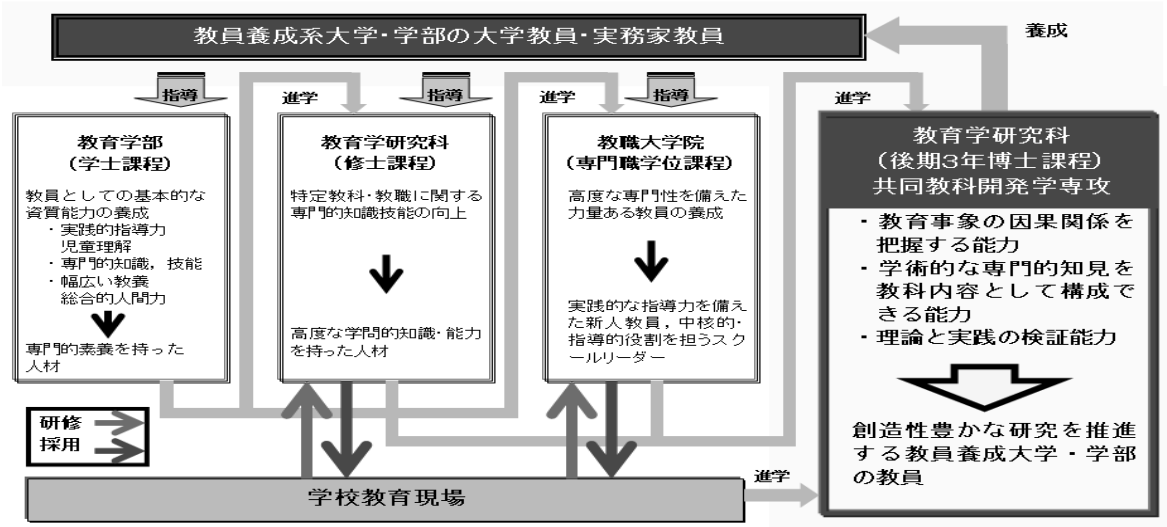
本共同専攻の入学者は，修士課程修了者，教職大学院修了者，教育現場を熟知した現職教員などを想定していますが，これらの多様な経験を持つ学生が交流することにより，学校教育の実践を理論化し，また，その理論を指導に生かす能力（「理論と実践の検証能力」）を身につけることもねらいとしています。

このような能力を身につけることによって，今日の学校教育が抱える諸課題に対応可能な現場教員を育てる教員養成系大学・学部の教員として，広く教育界に貢献する大学教員を養成します。

共同専攻の研究目標･養成する能力



共同専攻設置の目的



４．修了要件・学位

＜修了の要件＞

標準修業年限は３年ですが，特に優れた研究業績をあげた者にあっては修了年限の短縮も可能です。修了に必要な取得単位数は 20 単位以上とし，基礎科目は６単位以上，分野科目は 10 単位以上，応用科目は４単位以上です。なお，分野科目は選択科目から 10 単位以上を取得する必要がありますが，「教育環境学」の分野科目のうちから２単位及び教育環境学分野以外の３分野の選択科目のうちから２単位の計４単位は必ず履修します。

本共同専攻は，必要な研究指導を受けた上に，学位論文の審査及び論文の内容や専門分野に関する口述ないし筆記試験等に合格することを修了要件として課します。なお，学位論文の提出要件は，本共同専攻内の申し合わせに基づくものとします。

単位履修表

科目 / 専攻	基礎科目		分野科目				応用科目	合計
			教育環境学分野	人文社会系教科学分野	自然系教科学分野	創造系教科学分野		
	必修	選択	選択	選択	選択	選択	必修	
共同教科開発学専攻	３	３	１０				４	２０
合計	６		１０				４	２０

＜学位論文と学位の授与＞

学位論文は，本共同専攻の目標とするところに従い，「教科開発学」を主領域として「教育環境学」及び「教科学」にかかわる実証的な内容とするものとなります。

本共同専攻の課程を修了した者に対しては，愛知教育大学及び静岡大学から博士の学位を授与します。学位記には愛知教育大学及び静岡大学の大学名が記載されます。

博士の学位を授与するにあたって付記する専攻分野の名称は，「博士（教育学）」とします。

なお，学位を授与された方が，学位の名称を用いるときは，両大学名を付記するものとします。

「博士（教育学，愛知教育大学及び静岡大学）」

５．研究指導体制

本共同専攻における教育は，授業科目の履修と学位論文の作成に関する指導によって行います。学生の希望等を踏まえて決定した本籍を置く大学の研究指導教員を主指導教員とし，主指導教員は学位論文の指導のみならず，履修指導も行います。本共同専攻では，主指導教員の他に，両方の大学から少なくとも１名以上の副指導教員を配置し，３名以上の教員で指導します。このように共同大学院の特色を活かした指導体制を整え，様々な研究分野を包含する指導体制の充実を図ります。

本共同専攻の学生は，主指導教員の指導の下に科目の履修方針を決めます。講義は，履修登録に沿って履修します。入学時に合同オリエンテーション等を行い，主指導教員，副指導教員等と学生の信頼関係を作り，3年間共に学び，研究していく関係を構築するために両大学の教員と学生，あるいは学生同士が直接対面して密に交流する機会を設けます。

講義や研究指導に関して，遠隔教育システムを取り入れて，教員及び学生の大学間の移動に配慮しています。

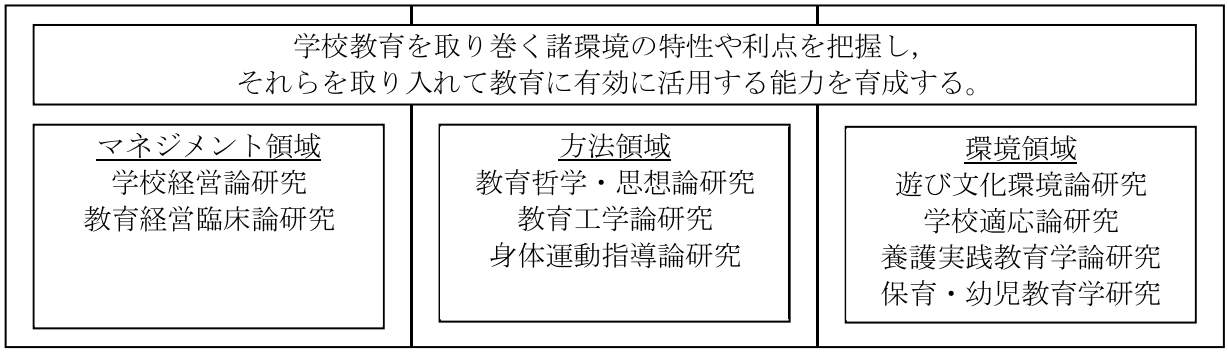
セミナー方式で開催する演習等においては，両大学で毎年交互に行います。

６．カリキュラム

本共同専攻の教育課程は，博士後期課程が担う科目群として「教科開発学」に関する「基礎科目」，各分野の専門的な「分野科目」，各分野の総合的な「応用科目」の３つの科目で構成されています。

基礎科目の「教科開発学原論（２単位）」では，「教科開発学」の原理的諸課題や「教科開発学」の研究方法論を習得し，「教科開発学実践論（１単位）」では，大学教員としての教育実践力，教員ＦＤ等，実践的諸課題を探究します。これら２科目は，必修です。その他も含めて基礎科目群からは，必修科目の２科目３単位を含め選択科目のうちから３単位，計６単位以上を選定して履修します。

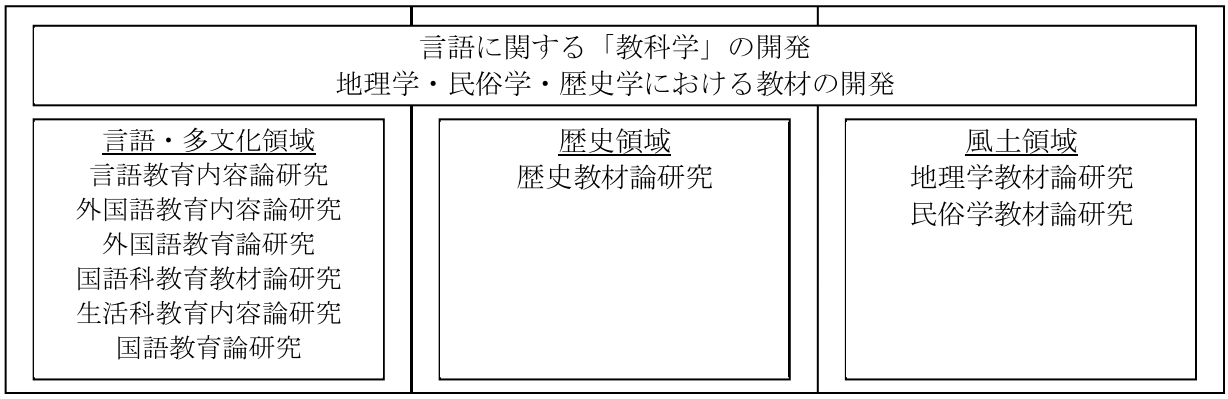
分野科目は，「教育環境学」と「教科学」の先進的かつ多様な知見を習得するとともに各教員の研究活動に基づく最先端の科目を「教科開発学」の分野科目として開講します。教育環境学分野ではマネジメント領域，教育方法領域，環境領域から科目を構成し，学校を取り巻く諸環境や利点を把握し，これらの知見を教科の開発研究に活用することを追究します。



教育環境学分野における分野科目

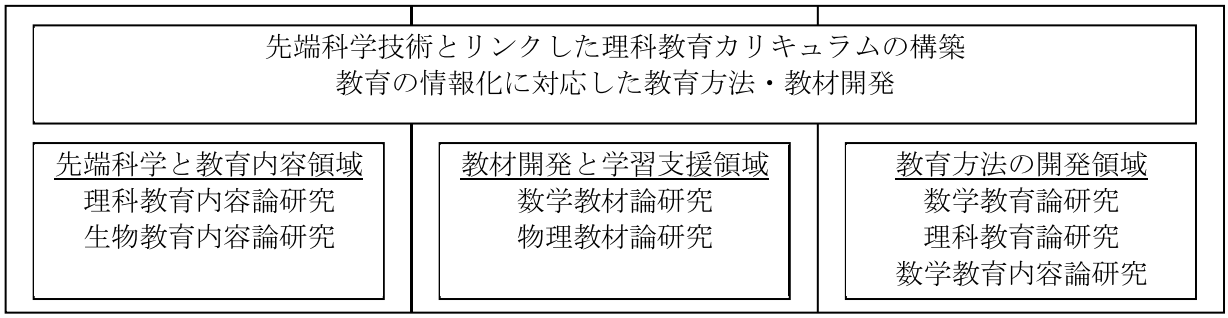
「教科学」は，「人文社会系」，「自然系」，「創造系」という三つの分野に分類し，「教育論」，「教育内容論」，「教材論」の三つの基本軸から科目を構成します。「教科学」では，教科内容を構成する学問の構築をめざし，教科のあり方・枠組そのものを検討し，人文社会系教科学，自然系教科学，創造系教科学の各分野の先端的な知識を修得します。

人文社会系教科学分野では，言語・多文化領域，歴史領域，風土領域から科目を構成し，教育方法・教材開発を行います。



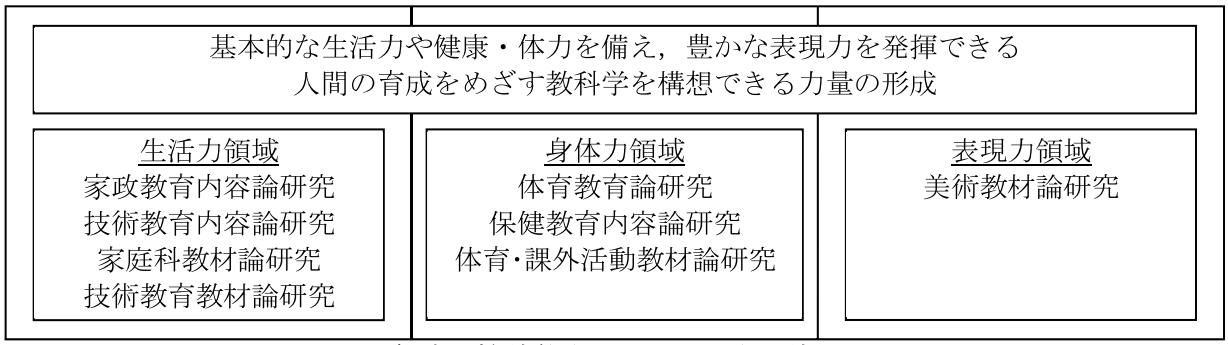
人文社会系教科学分野における分野科目

自然系教科学では，先端科学と教科内容領域，教材開発と学習支援領域，教育方法の開発領域から科目を構成し，先端科学技術と関連した自然系教科のカリキュラムを構築し，教育の情報化に対応した教育方法・教材開発を行います。



自然系教科学分野における分野科目

創造系教科学分野では，生活力領域，身体力領域，表現力領域から科目を構成し，基礎的な生活力や健康・体力を備え，豊かな表現力を発揮できるような教育方法・教材開発を行います。



創造系教科学分野における分野科目

なお，分野科目は選択科目から 10 単位以上を取得する必要があるが，「教育環境学」の分野科目のうちから２単位及び教育環境学分野以外の３分野の選択科目のうちから２単位の計４単位は必ず履修します。

応用科目では，全教員と全学生が一堂に会し，（1）教員がそれぞれの研究課題を提示し，学生と討議する，（2）学生自身が，「教科開発学とは何か」，「その研究方法論と課題」について問いながら自己の研究課題を追究し，その成果をまとめて発表します。「教科開発学セミナーⅠ（２単位）」と「教科開発学セミナーⅡ（２単位）」は，必修です。応用科目群では，必修科目の２科目４単位以上を選定して履修します。

開設予定授業科目・担当教員及び講義開講場所等（２０２１年度）

科目区分		授業科目	単位数	担当教員	愛知教育大学キャンパス（刈谷市）	静岡大学キャンパス（静岡市）
専攻基礎科目	必修科目	教科開発学原論	2	石川　恭 野平　慎二 中野　真志 梅田　恭子 坂口　京子 村上　陽子 郡司　賀透 村山　功	○	○
		教科開発学実践論	1	稲葉　みどり 竹川　慎哉 寺本　圭輔 野崎　浩成 杉山　康司 紅林　秀治 鎌塚　優子	○	○
	選択科目	文化資源活用論	1	伊藤　貴啓 丹藤　博文	○	
		科学技術活用論	1	稲毛　正彦 飯島　康之 小谷　健司 大鹿　聖公	○	
		教育評価実証方法論	1	石田　靖彦 鈴木　裕子	○	
		教育プログラム開発論	1	塩田　真吾 中村　美智太郎		○
		表現・鑑賞論	1	伊藤　文彦 長谷川　慎		○
		教育フィールド調査論	1	村越　真 郡司　賀透		○
		教育プレゼンテーション論	1	白畑　知彦 小南　陽亮		○

専攻分野科目	教育環境学分野	遊び文化環境論研究	2	石川　恭	○	
		学校適応論研究	2	石田　靖彦	○	
		教育哲学・思想論研究	2	野平　慎二	○	
		保育・幼児教育学研究	2	新井　美保子	○	
		教育方法・内容論研究	2	竹川　慎哉	○	
		教授学習論研究	2	野崎　浩成	○	

専攻分野科目	教育環境学分野	幼児教育・保育内容論研究	2	鈴木　裕子	○	
		ＩＣＴ教育研究	2	梅田　恭子	○	
		学校危機管理論研究	2	村越　　真		○
		教育工学論研究	2	村山　　功		○
		養護実践教育学論研究	2	鎌塚　優子		
		特別支援教育学研究	2	香野　　毅		
		情報教育学研究	2	塩田　真吾		
	人文社会系教科学分野	言語教育内容論研究	2	稲葉　みどり	○	
		第二言語教育論研究	2	田口　達也		
		社会科教育論研究	2	近藤　裕幸		
		倫理教材論研究	2	宮村　悠介		
		民俗学教材論研究	2	野地　恒有		
		地理学教材論研究	2	伊藤　貴啓	○	
		国語科教育教材論研究	2	丹藤　博文	○	
		国語教育内容論研究	2	奥田　浩司		
		生活科教育内容論研究	2	中野　真志	○	
		外国語教育論研究	2	白畑　知彦		○
		歴史教材論研究	2	黒川　みどり		○
		国語教育論研究	2	坂口　京子		○
	自然系教科学分野	数学教材論研究	2	飯島　康之	○	
		物理教材論研究	2	岩山　　勉		
		理科教育内容論研究	2	稲毛　正彦	○	
		数学教育内容論研究	2	小谷　健司	○	
		理科教材開発論研究	2	大鹿　聖公	○	
		数学教育論研究	2	熊倉　啓之		○
		生物教育内容論研究	2	小南　陽亮		○
		理科教育論研究	2	郡司　賀透		○
	創造系教科学分野	保健科教育論研究	2	山田　浩平		
		保健体育内容論研究	2	寺本　圭輔	○	
		体育教材開発論研究	2	鈴木　英樹		
		美術教材論研究	2	伊藤　文彦		○
		体育教育論研究	2	新保　　淳		○
		技術教育内容論研究	2	松永　泰弘		
		技術教育教材論研究	2	紅林　秀治		○
		体育･課外活動教材論研究	2	杉山　康司		○
		家庭科教材論研究	2	村上　陽子		○

専攻応用科目	必修	教科開発学セミナーⅠ	2	全教員	○	○
		教科開発学セミナーⅡ	2	全教員	○	○
	選択	教科開発学セミナーⅢ	2	全教員	○	○

７．教員一覧

（　愛知教育大学　）

分野	氏名	職名・学位	現在の主たる研究テーマ
教育環境学	石川　　恭	教授 博士（教育学）	遊び文化環境論 教育社会論 余暇教育論 遊戯文化論 生涯スポーツ論 子どもと遊び論
	野平　慎二	教授 博士（教育学）	教育哲学 教育思想史 物語論的人間形成論 美的人間形成論 システム理論と教育 道徳教育論
	石田　靖彦	准教授 博士（心理学）	教育・社会心理学 学校・学級への適応過程 関係の親密化 自己評価維持機制
	竹川　慎哉	准教授 博士（教育学）	教育方法学 教育課程論 批判的リテラシー教育 授業研究
	鈴木　裕子	教授 博士（学校教育学）	身体教育学 子ども学
	野崎　浩成	教授 博士（工学）	情報教育 日本語教育 認知科学
	梅田　恭子	准教授 博士（学術）	教育工学
人文社会系教科学	野地　恒有	教授 博士（文学）	社会科教育内容論 日本民俗論 近現代庶民生活史論 歴史民俗博物館論 博物館教育論 フィールドワーク調査論 郷土研究方法論
	稲葉　みどり	教授 博士（学術）	英語科教育論 英語科教育方法論 英語教授法 異文化理解教育 日本語教授法 日本語教育実践研究 留学生教育 第一言語習得及び第二言語習得

人文社会系教科学	伊藤　貴啓	教授 博士（理学）	地理学教材論 農業地理論 経済地理論 地誌論 教師の力量形成と地域教材開発 農業地域の自立的発展とその条件 ﾖｰﾛｯﾊﾟ国境地帯の空間動態 ﾖｰﾛｯﾊﾟにおけるﾙｰﾗﾙﾂｰﾘｽﾞﾑと農村の持続的発展
	中野　真志	教授 博士（文学）	生活科教育論 総合的な学習の理論と実践 社会科教育論 カリキュラム論 教育方法論 ジョン・デューイの教育論
	丹藤　博文	教授 博士（教育学）	言語教育方法論 文芸批評理論 文学教育論 文学教材研究論 国語科授業方法論 物語理論研究
	田口　達也	准教授 Ph.D. in English	第二言語教育論研究 応用言語学 言語教育心理学
	近藤　裕幸	教授 博士（学術）	社会科教育論研究 社会科教育 地理教育
	宮村　悠介	講師 博士（文学）	倫理教材論研究 倫理学 倫理思想史
	奥田　浩司	教授 博士（文学）	国語科教育内容論研究 日本近現代文学 日本文化学

自然系教科学	岩山　　勉	教授 博士（理学）	理科教材開発論 理科（物理）教育論 理科におけるものづくり教育 先端科学技術の活用と還元 自然エネルギー利用技術 半導体光物性 ビーム（イオン、レーザー）物性
	稲毛　正彦	教授 理学博士	理科教育内容論 環境科学による教科開発 無機化学 錯体化学 生物無機化学
	飯島　康之	教授 教育学修士	数学教育論 教材開発論 学習環境開発論 コンテンツ開発論 授業研究 図形指導 数学的問題解決
	小谷　健司	教授 博士（理学）	数学教材開発 常微分方程式論
	大鹿　聖公	教授 博士（学術）	理科教育 生物教育 環境教育
創造系教科学	寺本　圭輔	准教授 博士（人間環境学）	運動生理学 身体組成 発育発達 水泳
	山田 浩平	准教授 博士（スポーツ健康科学）	保健科教育論研究 身体科学 体育科内容学
	鈴木 英樹	教授 博士（スポーツ科学）	体育教材開発論研究 身体科学 体育科内容学

（　静岡大学　）

分野	氏名	職名・学位	現在の主たる研究テーマ
教育環境学	村越　真	教授 博士（心理学）	学校の危機管理 空間認知と地図理解の認知過程 自然体験活動のリスクマネージメント リスク認知 安全教育
	村山　功	教授 教育学修士	認知心理学 理科教育 情報教育 ＩＣＴ 校内研修 授業研究
	鎌塚 優子	教授 博士（教育学）	養護教諭の実践に関わる教育 健康相談論 学校保健学 特別な教育的支援を要する子どもの健康教育 養護教諭養成教育
	香野　毅	教授 博士（心理学）	特別支援教育からだを窓口とした援助 障害領域における心理支援動作法 子育て支援
	塩田　真吾	准教授 博士（学術）	情報教育ＩＣＴ キャリア教育遠隔教育
	中村 美智太郎	准教授 博士（学術）	教育哲学 教育思想 道徳教育 情報倫理 キャリア教育
人文社会系教科学	黒川みどり	教授 博士（文学）	日本近現代史 日本近現代思想史 歴史教育 近代日本のマイノリティ 近代日本のアジア認識
	白畑 知彦	教授 博士（文学）	第二言語としての英語習得研究 第二言語としての日本語習得研究 外国語としての英語教授法 外国語学習論 児童英語教育論 教室における第二言語習得 外国語学習評価論 英語教育課程論

人文社会系教科学	坂口　京子	教授 博士（教育学）	国語・国語科（言語教育）カリキュラム論 国語科目的・目標論 国語科授業研究 国語科教材開発論 国語科教師教育 戦後国語教育史
自然系教科学	小南　陽亮	教授 理学博士	生物多様性教育のための教材開発 生態系教育内容論 生態系における生物種間相互作用 里山における生物多様性の保全 生物の共存メカニズム 生物群集の動態 絶滅危惧種の保全 植物の繁殖戦略
	熊倉　啓之	教授 理学修士	算数教育論 数学教育論 算数・数学教育課程論 算数・数学授業研究 算数・数学教材開発論 算数・数学教育の目的論 小・中・高接続カリキュラム論 数学教育の国際比較研究
	郡司　賀透	准教授 博士（教育学）	理科カリキュラム論 理科カリキュラム史研究 理科教材論 理科教育内容選択論 理科授業研究
創造系教科学	新保　淳	教授 博士（教育学）	身体教育論 授業研究論 教員養成論 教師教育論 理論と実践の関係 スポーツ科学論 体育哲学
	松永　泰弘	教授 博士（工学）	熱弾性論 材料強度学 機能性材料応用開発 ものづくり教材開発 ものづくり教材の授業実践 動くおもちゃのデザインとメカニズム 地域におけるものづくり交流 ものづくり教室の評価基準

	伊藤 文彦	教授 学術修士	美術教育論 デザイン教育論 デザインリテラシー教育論 デザインプロセス論 鑑賞方法 発想支援方法 コミュニケーションデザイン論
	紅林 秀治	教授 博士（学校教育学）	技術教育論 技術教育教材開発 設計を主体とした技術教育 システム概念の形成過程
	杉山 康司	教授 博士（スポーツ健康科学）	身体運動学 体力科学 体育・スポーツ科学 発育発達の科学 加齢と健康科学 スポーツ指導論
	村上 陽子	教授 博士（学術）	食文化 食品・料理色彩学 食品物性学 調理学 家庭科におけるものづくり教育 教科連携
	長谷川　慎	准教授 修士（音楽）	音楽教育学 日本音楽 地歌箏曲演奏

８．教育方法

１　教育・研究指導

大学院の教育は，専攻に応じて教育上必要なものとして開設する授業科目の履修及び博士論文の作成等に対する指導によって行われます。

(1) 主指導教員

学位論文及び修学その他学生生活上の指導・助言を行うため，専攻に属する専任教員（大学院設置基準第９条に定める教員）のうちから主指導教員を定めます。主指導教員は，入学試験の出願に際して出された第１希望，または第２希望の教員であり，合格発表の際に通知された教員です。

(2) 副指導教員等の届

主指導教員とは別に，専攻に属する専任教員の中から，２名以上の副指導教員と，研究上の必要性に応じて指導補佐教員を定め，研究指導を受けます。副指導教員については，各大学から１名以上を選ぶものとします。学生は，原則として，授業開始日（合同ガイダンス実施日）から１０日以内に，主指導教員の助言を得て副指導教員および指導補佐教員を選び，所定の様式による「副指導教員等申請書」により，研究科長あてに提出しなければなりません。

(3) 副指導教員等の決定

研究科長は，学生から提出のあった副指導教員等申請書に基づき，共同専攻連絡協議会の議を経て，それぞれの副指導教員および指導補佐教員を決定します。

2 単 位

各授業科目の単位数は，授業内及び授業外を合わせて，４５時間の学修をもって１単位とします。多くの授業が，１時限（１コマ）を２時間（実際は９０分）として，１６回（定期試験を含む）で２単位としているのは，１時限の教室内の授業に対して，２時限分の教室外での事前学習及び事後学習（以下「自習学習」という。）を行って２単位という意味です（８回では１単位となります）。

3 授 業

(1) 学 期（授業期間）

学期を前期（４月１日～９月３０日），後期（１０月１日～翌年３月３１日）の２学期に区分し，さらに，開講する授業の日程によって，前期をおおよそA週（４月から５月），B週（６月から７月），C週（７月から８月），後期をD週（１０月），E週（１１月から１月），F週（１月から２月）に分けて授業を実施します。

●詳細については，「時間割および授業カレンダー」を参照してください。

(2) 授業方法

授業の方法は，講義，演習のいずれかにより行います。

(3) 授業時間

授業は，原則として土曜日と日曜日の各５時限（計10時限）で実施します。

◎ 授業時間（土曜日および日曜日）

時　　限	授業開始 ・ 終了時刻
１ 時 限	９：００ ～ １０：３０
２ 時 限	１０：４０ ～ １２：１０
３ 時 限	１３：００ ～ １４：３０
４ 時 限	１４：４０ ～ １６：１０
５ 時 限	１６：２０ ～ １７：５０

(4) 履修方法

学生は，原則として土曜日と日曜日に愛知教育大学・静岡大学の両キャンパスで開講される授業及び夏季・冬季の休業等の長期休業期間に集中講義で開講される授業を履修します。また，これらの他に浜松等で開講される授業もあります。

4 履修登録

(1) 履修手続き

学生は，主指導教員と相談の上，授業開始日（合同ガイダンス実施日）から１０日以内に，その年度に履修しようとする全ての授業科目を愛知教育大学では教務課，静岡大学では教育学部学務係に提出します。その際，前期の履修科目については４月中に開講される科目を除き，４月末までに各事務に届け出れば変更は可能です。後期の履修科目については，９月末までに各事務に変更を届け出てください。それぞれの届け出期限以降の変更は，原則として認められません。なお，いずれの変更も主指導教員と相談の上，その許可を得て届け出をしてください。

(2) 講義室（集合場所）
講義等の初回の集合場所は，原則として本籍を置く大学の共同大学院講義室とします。ただし，掲示や合同ガイダンス等により指示ある場合には，指定場所へ集合してください。

5　成績および単位について

(1) 成績の評価は，筆記試験，口答試問，報告書等（以下「筆記試験等」）により行います。

(2) 成績評価のための条件
成績の評価には，その授業時間の３分の２以上の出席を必要とします。

(3) 成績評価の基準
成績の評価は，その授業の構成単位をＳ秀・Ａ優・Ｂ良・Ｃ可又はＤ不可の評語にて判定し，Ｃ可以上を合格，Ｄ不可は不合格とし，合格した単位は取り消すことができません。ただし，下記の単位は認定しません。

① 合格した授業科目を再度受講して修得した単位
② その他，定められた履修方法以外の方法により修得した単位

成績評価の基準

評価		評価基準（１００点満点の場合）	
Ｓ	秀	９０点以上	合　格
Ａ	優	８０点～８９点	
Ｂ	良	７０点～７９点	
Ｃ	可	６０点～６９点	
Ｄ	不可	０～５９点	不合格

(4) 単位の授与
本学は，履修登録した授業科目の授業を履修し，当該授業の筆記試験等に合格した学生に対し，所定の単位を授与します。

(5) 再・追試験
○ 再試験は行いません。
○ 追試験は，病気・災害等の特別の事情がある場合，愛知教育大学では教務課，静岡大学では教育学部学務係に願い出ることによって許可されることがあります。この願い出については，指導教員を通じて提出します。

(6) 不正行為
○ 筆記試験等で不正と認められる行為があったときは，当該科目を不合格とします。
○ 不正行為の内容によっては，その学期に修得したすべての単位を削除します。場合によっては，学則の規定により処分します。

6　学位論文の提出
学位論文及び学位授与は，指導教員の指導を受けて作成し，大学院研究科の審査を受けなければなりません。その詳細については，別途，お知らせします。

7　長期履修学生制度について
この制度は，原則として，職業を有している方や，育児・介護等の事由により通常期間で

の就学が困難であると認められる方の大学院での進学環境を改善するためのものです。
現在のところ，両大学での取り扱いが異なるため，その詳細は，別途お知らせします。

８　修学上の注意事項

○　休学や退学の手続き等は，必要に応じて，各大学で指導を受けて下さい。
○　気象警報発令時・交通機関運休時・東海地震注意情報発令時等における休講の取扱いについては，両大学で異なるので，別途お知らせします。
○　両大学で利用できる情報ネットサービスの内容については，大学ごとに，別途お知らせします。

愛知教育大学と静岡大学の共同教科開発学専攻連絡協議会規程

２０１１年１２月１４日
規　程　第　１４２　号

（目的）

第１条　この規程は，愛知教育大学学則（２００４年学則第１号）第２５条第３項及び静岡大学大学院規則（昭和３９年４月２７日）第５条に定める共同教科開発学専攻（以下「共同専攻」という。）に係る教育，研究等に関する重要な事項を協議し，円滑な管理運営を行うため設置する共同教科開発学専攻連絡協議会（以下「連絡協議会」という。）の組織及び運営に関し，必要な事項を定める。

（連絡協議会）

第２条　連絡協議会は，次の各号に掲げる委員で組織する。

(1) 愛知教育大学及び静岡大学（以下「構成大学」という。）の共同専攻の専任教員

(2) 構成大学の研究科長が特に必要と認めた者若干名

２　連絡協議会に議長を置き，連絡協議会の業務を掌理する。

３　議長は，連絡協議会を招集し，その議長となる。

４　議長の任期は，１年とし，委員の互選により選出し，構成大学間で隔年交代とする。

５　連絡協議会に副議長を置き，副議長は，議長を補佐し，議長に事故があるときは，その職務を代行する。

６　副議長の任期は，１年とし，議長が所属する大学と異なる大学の委員のうちから委員の互選により選出する。

（協議事項）

第３条　連絡協議会は，共同専攻に係る次の各号に掲げる事項を協議する。

(1) 構成大学において開設する授業科目及びこれに係る教員の配置などカリキュラムの編成及び実施に関する基本的事項

(2) 研究指導教員の選定に関する事項

(3) 入学者選抜の方針及び実施計画に関する事項

(4) 学生の身分取扱及び厚生補導に関する事項

(5) 成績評価の方針に関する事項

(6) 学位審査委員会の設置に関する事項

(7) 学位の授与及び課程修了の認定に関する事項

(8) 教育研究活動等の状況の評価に関する事項

(9) 予算に関する事項

(10)　広報に関する事項

(11)　自己点検・評価に関する事項

(12)　ＦＤ推進に関する事項

(13)　共同専攻の設置に関する協定書の改正及び廃止並びに運用に関する事項

(14)　その他構成大学が必要と認めた事項

２　協議内容は，構成大学の教授会若しくは研究科委員会又は教育研究評議会（以下「会議等」という。）に報告し，必要に応じて承認を得るものとする。
３　前項の承認を得るものについては，同項の会議等の議を経て，連絡協議会が別に定める。
（専門委員会）
第４条　連絡協議会の円滑な運営を図るため，連絡協議会の下に次の各号に掲げる専門委員会を置く。
(1) 運営委員会
(2) 学務委員会
(3) 入試委員会
(4) 学位審査委員会
(5) 教員人事選考委員会
(6) 紀要編集委員会
(7) その他連絡協議会が必要と認めた委員会
２　専門委員会に関する事項は，別に定める。
（議事及び運営）
第５条　連絡協議会は，構成委員の３分の２以上の出席をもって成立する。ただし，次の各号に掲げる者は，構成委員の総数に算入しない。
(1) 休職又は停職中の者
(2) 育児休業中の者
(3) ３０日以上にわたる連続した休暇を取得中の者
２　連絡協議会の議事は，出席委員の過半数の賛成をもって決し，可否同数の場合は議長が決する。ただし、連絡協議会が特に重要と認めた事項については、出席委員の３分の２以上の賛成により決する。
３　連絡協議会が必要と認めたときは，委員以外の者の出席を求め，その意見を聴くことができる。
４　この規程に定めるもののほか，連絡協議会の議事及び運営について必要な事項は，連絡協議会が定める。
（事務局）
第６条　この規程に定める事務を取り扱うために事務局を置く。
２　事務局は，愛知教育大学事務局及び静岡大学教育学部事務部が担当する。

附　則
この規程は，２０１２年４月１日から施行する。
附　則（２０１４年規程第３９号）
この規程は，２０１４年１２月１７日から施行する。
附　則（２０１５年規程第５８号）
この規程は，２０１５年６月３日から施行する。

Ⅱ．共同教科開発学専攻連絡協議会議長年次報告

教科開発学連絡協議会　議長年次報告

１．入学試験及び入学者について

2022年度入学試験は、2021年11月６日（土）に静岡大学を会場に実施されました。合格発表は11月16日（金）に行い、８名（愛教大籍４名、静大籍４名）の合格者をだすことができました。

なお、2023年度入学試験は2022年11月５日(土)、合格発表は11月15日(月)を予定しています。

２．2021年度合同ガイダンスについて

本年度は、2021年４月４日（日）愛教大籍の新入生は愛知教育大学教育未来３階、静岡大学籍の新入生は静岡大学教育学部Ｇ棟２０２に集合しテレビ会議システムを用いて１３時からガイダンスを実施しました。また、１４時からは全学年を対象に、Zoomにて実施しました。

３．2021年度教科開発学研究会および教科開発学セミナーⅠ、Ⅱ、Ⅲについて

教科開発学研究会は、2021年８月21日（土）に、Zoomによるオンライン方式で開催されました。研究発表６件、講演会、修了予定者による発表を含む有意義な場となりました

教科開発学セミナーⅠ、Ⅱは2022年２月12、13日（土・日）の２日間にわたって、愛教大籍はオンライン、静大籍は対面（一部オンライン）のハイフレックス型で開催されました。セミナーⅠは１年生が、セミナーⅡは２年生が対象で、それまでに自身が研究してきた成果を報告します。１、２年生や全教員が参加して、朝から夕方まで各報告に対して活発な議論が展開されました。

ミナーⅢは、2022年８月22日（日）にZoomによるオンライン方式で開催されました。これは、博士論文の概要の準備ができ、提出が目前の３年生が対象で、その報告をもとに、全教員が参加し議論や助言を行い、博士論文提出に向けた最終準備を行う場でもあります。他の学生や今後提出する予定の学生の聴講も多数ありました。

４．共同教科開発学専攻連絡協議会等

基本的に、毎月１回、全教員が集まり専攻連絡協議会が開催されます。この会議は愛教大と静大の全教員による会議のため、テレビ会議システムを使用して実施されています。この会議のために、各大学では専攻会議というものを開催し、連絡協議会で審議する議題について、それぞれの大学の意見を集約します。

５．共同教科開発学専攻指導体制

それぞれの大学に在籍する学生に対し、主指導教員１名の他に、複数名の副指導教員、指導補佐教員が指導にあたります。そして、副指導教員の中には、必ず他方の大学の教員が少なくとも１名加わることになっています。様々に異なる研究領域を専門とする教員が指導に加わることで、院生が近視眼的思考に陥らないように努めています。このような指導体制は本専攻の特色の一つでもあります。

６．その他

論文審査会（最終試験）が2021年７月１８日（日）と2022年１月23日（日）に愛知教育大学及び静岡大学とでZoomを用いて行われました。審査会は公開で実施され、計５名が臨み、博士論文に対して忌憚のない問に対し、明確な回答が行われました。その結果、今年度は５名の合格が連絡協議会で認められました。

愛知教育大学大学院・静岡大学大学院　教育学研究科共同教科開発学専攻（後期3年のみの博士課程）

入学試験実施状況

愛知教育大学

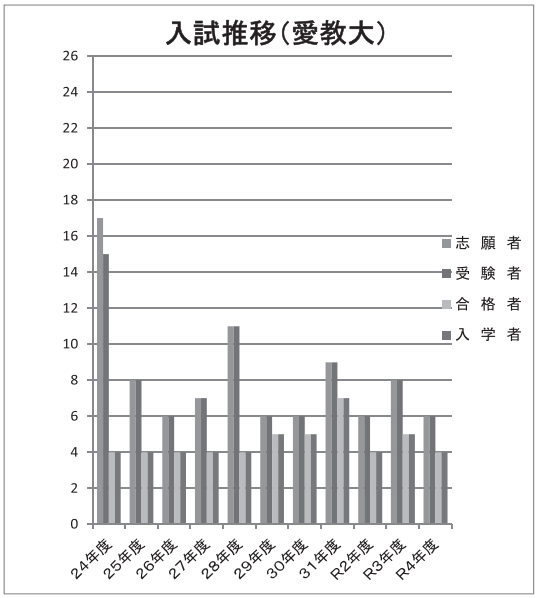
区分／年度	定員	志願者			受験者			合格者			入学者			合格率
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
24年度	4	8	9	17	7	8	15	1	3	4	1	3	4	26.67%
25年度	4	4	4	8	4	4	8	1	3	4	1	3	4	50.00%
26年度	4	3	3	6	3	3	6	3	1	4	3	1	4	66.67%
27年度	4	3	4	7	3	4	7	1	3	4	1	3	4	57.14%
28年度	4	5	6	11	5	6	11	3	1	4	3	1	4	36.36%
29年度	4	3	3	6	3	3	6	3	2	5	3	2	5	83.33%
30年度	4	5	1	6	5	1	6	5	0	5	5	0	5	83.33%
31年度	4	5	4	9	5	4	9	4	3	7	4	3	7	77.78%
R2年度	4	6	0	6	6	0	6	4	0	4	4	0	4	66.67%
R3年度	4	4	4	8	4	4	8	2	3	5	2	3	5	62.50%
R4年度	4	6	0	6	6	0	6	4	0	4	4	0	4	66.67%

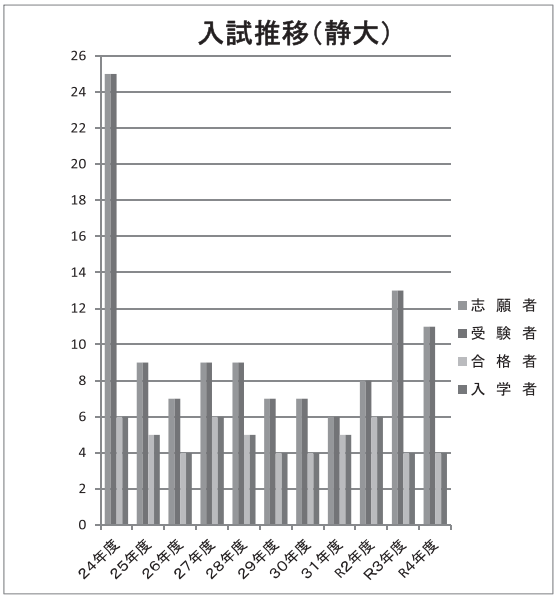
静岡大学

区分／年度	定員	志願者			受験者			合格者			入学者			合格率
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
24年度	4	21	4	25	21	4	25	5	1	6	5	1	6	24.00%
25年度	4	8	1	9	8	1	9	4	1	5	4	1	5	55.56%
26年度	4	5	2	7	5	2	7	3	1	4	3	1	4	57.14%
27年度	4	5	4	9	5	4	9	4	2	6	4	2	6	66.67%
28年度	4	5	4	9	5	4	9	2	3	5	2	3	5	55.56%
29年度	4	4	3	7	4	3	7	3	1	4	3	1	4	57.14%
30年度	4	4	3	7	4	3	7	3	1	4	3	1	4	57.14%
31年度	4	5	1	6	5	1	6	4	1	5	4	1	5	83.33%
R2年度	4	5	3	8	5	3	8	3	3	6	3	3	6	75.00%
R3年度	4	12	1	13	12	1	13	4	0	4	4	0	4	30.77%
R4年度	4	10	1	11	10	1	11	4	0	4	4	0	4	36.36%

合計

区分／年度	定員	志願者			受験者			合格者			入学者			合格率
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
24年度	8	29	13	42	28	12	40	6	4	10	6	4	10	25.00%
25年度	8	12	5	17	12	5	17	5	4	9	5	4	9	52.94%
26年度	8	8	5	13	8	5	13	6	2	8	6	2	8	61.54%
27年度	8	8	8	16	8	8	16	5	5	10	5	5	10	62.50%
28年度	8	10	10	20	10	10	20	5	4	9	5	4	9	45.00%
29年度	8	7	6	13	7	6	13	6	3	9	6	3	9	69.23%
30年度	8	9	4	13	9	4	13	8	1	9	8	1	9	69.23%
31年度	8	10	5	15	10	5	15	8	4	12	8	4	12	80.00%
R2年度	8	11	3	14	11	3	14	7	3	10	7	3	10	71.43%
R3年度	8	16	5	21	16	5	21	6	3	9	6	3	9	42.86%
R4年度	8	16	1	17	16	1	17	8	0	8	8	0	8	47.06%





令和３年度合同ガイダンス

日　時　令和３年４月４日（日）１３時００分～１７時００分
　　新入生受付開始１２時３０分～

場　所　愛知教育大学に籍を置く新入生
　　愛知教育大学教育未来館３階　多目的ホール（愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢１）
　　静岡大学に籍を置く新入生
　　静岡大学教育学部　Ｇ２０２（静岡県静岡市駿河区大谷８３６）
　　※両大学をテレビ会議システムを介して行います。

内　容
　新入生向け　１３時００分～１４時００分　多目的ホール・Ｇ２０２
　出席者　正副議長、事務職員
　［プログラム］
　　１　挨拶（正副議長）
　　２　出席者自己紹介　※所属・氏名のみ
　　３　専攻の概要（議長）
　　４　教育方法について（議長）
　　５　副指導教員の申請について（議長）
　　６　研究紀要について（議長）
　　７　履修登録、各大学での手続、学生生活及び図書館利用等について（事務職員）

　全学年対象　１４時００分～　Ｚｏｏｍでの開催
　出席者　新入生は、新入生向けガイダンスを行った会場にて、Ｚｏｏｍ画面をスクリーンに投影したものの視聴により参加します。
　　正副議長以外の共同教科開発学専攻教員全員 任意の場所にてＺｏｏｍ参加
　　２年生以上の在学者全員 任意の場所にてＺｏｏｍ参加
　［プログラム］
　　１　挨拶（議長）
　　２　出席者自己紹介
　　院生は、１～２分で自己紹介を行う
　　教員は、１～２分でご自分の授業内容について順番に説明いただく。
　　授業紹介は、必修科目を中心に、それ以外の科目は、なるべく簡単に紹介し、個々の日程調整などは、直接授業担当者とメールなどで行うよう伝える。
　　３　ハラスメント防止啓発の講話　（静岡大学鎌塚優子教員）

愛知教育大学大学院・静岡大学大学院共同教科開発学専攻

２０２１年度教科開発学セミナーⅢ（合同セミナーⅢ）開催要項

日　　時：2021 年 8 月 22 日（日）
実 施 方 法:オンライン （詳細は後日連絡）
出席予定者：2021 年度履修登録者
　　共同専攻専任教員
　　発表者以外の当専攻学生（聴講のみ全学年対象）

〇教科開発学セミナー（Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ）の概要

本教科開発学セミナーは，院生が教科開発学とは何かを問いながら，それまでに研究してきた成果を，他の院生ならびに全教員の前で口頭発表する場である。他分野の教員も加わり，異なる専門性の観点から研究成果について論評する授業形態は，本専攻の特色の１つである。このセミナーでの研究発表の積み重ねが，博士論文となって実を結ぶことが期待される。さらに，「教科開発学という学問領域とは何か」について，全員で議論することにより，教員と院生の共通理解を深めて行く。

〇教科開発学セミナーⅢの概要（シラバスより）

博士論文の目次構成を確定し，博士論文の草稿を基に，その内容を発表する。
※３年生対象の選択科目であるが，学位論文を提出する年度に履修することが望ましい。

〇セミナーⅢの前後の研究指導

セミナーⅢは，事前および事後の研究指導の時間を含めて，１科目２単位として認定している。

学生は，事前に主指導教員や他の指導教員による個別の研究指導を受けて，発表内容を検討しておくとともに，事後はセミナーⅢの参加者の意見や議論を踏まえて，指導教員の指導の下に博士論文完成に向けて検討することが必要である。

〇発表の概要

・１演題，発表 25 分，質疑応答 25 分の計 50 分とする。
・１会場で実施する
・座長は，副指導教員のうち学生が籍を置かない側の教員が担当する。

〇発表要旨の事前提出

PDF 形式の発表要旨を，令和３年年８月 19 日（木）までに以下「提出先」宛にメールで提出する。発表要旨は A4 サイズで６枚以内（原稿作成要領は別紙のとおり）とすること。
提出先：静岡大学教育学部学務係　小澤　宛　ozawa.masumi@shizuoka.ac.jp

〇当日のスケジュール 進行：学務委員

１　開会の挨拶 共同専攻連絡協議会 議長
２　発表 １０本（8 時 50 分～14 時 50 分）
３　全体の講評 共同専攻連絡協議会 副議長（15 時 00 分～）

2021年　8月22日（日）セミナーⅢ　プログラム

会場１　全体挨拶　白畑先生　8:50

会場１ 会場責任者　紅林

1. 教育環境学 30940005　望月　大　　9:00-9:50
　（主）村越　真　（副）伊藤貴啓（座長）
2. 教育環境学 30040003　山元　薫　　10:00-10:50
　（主）香野　毅　（副）中野　真志（座長）
3. 創造系教科学　30840002 河合　紳和　　11:-1150
　（主）新保　淳　（副）伊藤貴啓（座長）
4. 創造系教科学 219D006　澤田育子　　13:00-1350
　（主）飯島 康之　（副）紅林秀治（座長）
5. 創造系教科学 30940001　青木麟太郎　　14:00-14:50
　（主）紅林秀治　（副）飯島康之（座長）
6. 創造系教科学 30840004　橋詰　ゆり　　15:00-15:50
　（主）杉山　康司　（副）野地　恒有（座長）

会場２　会場責任者　竹川

1. 人文社会系教科学　30840005　中山　敬司　　9:00-9:50
　（主）黒川みどり　（副）野地　恒有（座長）
2. 人文社会系教科学 216D001　中川　右也　　10:00-10:50
　（主）稲葉みどり　（副）村越　真（座長）
3. 人文社会系教科学　30640002　大西　洋　　11:00-11:50
　（主）黒川みどり　（副）野地　恒有（座長）
4. 人文社会系教科学"　219D004　中村仁志　　13:00-1350
　（主）中野真志　（副）白畑　知彦（座長）
5. 人文社会系教科学 30740004　箱﨑　雄子　　14:00-14:50
　（主）白畑　知　（副）伊藤　貴啓（座長）

会場１　終了挨拶　飯島先生　16：00

愛知教育大学大学院・静岡大学大学院共同教科開発学専攻

令和３年度教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ（合同セミナーⅠ・Ⅱ）開催要項

日　　時：令和４年２月 12 日（土）９時 30 分～16 時 05 分　セミナーⅡ
　　令和４年２月 13 日（日）９時 00 分～15 時 25 分　セミナーⅠ
場　　所：Zoom 及び静岡大学教育学部 G 棟 202
出席予定者：セミナーⅠ受講生９名(愛教大４名，静大５名)
　　セミナーⅡ受講生８名(愛教大４名，静大４名)
　　共同専攻専任教員，発表者以外の当専攻学生（聴講のみ全学年対象）

○教科開発学セミナー（Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ）の概要

本教科開発学セミナーは，院生が教科開発学とは何かを問いながら，それまでに研究してきた成果を，他の院生ならびに全教員の前で口頭発表する場である。他分野の教員も加わり，異なる専門性の観点から研究成果について論評する授業形態は，本専攻の特色の１つである。このセミナーでの研究発表の積み重ねが，博士論文となって実を結ぶことが期待される。さらに，「教科開発学という学問領域とは何か」について，全員で議論することにより，教員と院生の共通理解を深めて行く。

○教科開発学セミナーⅠ・Ⅱの位置付け

セミナーⅠは博士論文の構想発表会，セミナーⅡは博士論文の中間発表会と位置付けられている。

○発表の概要

・１演題につき，以下のとおりとする。
　セミナーⅠ：発表 15 分，質疑応答 15 分　　計 30 分
　セミナーⅡ：発表 20 分，質疑応答 20 分　　計 40 分
・２会場で実施する。
・座長は，副指導教員のうち学生が籍を置かない側の教員が担当する。

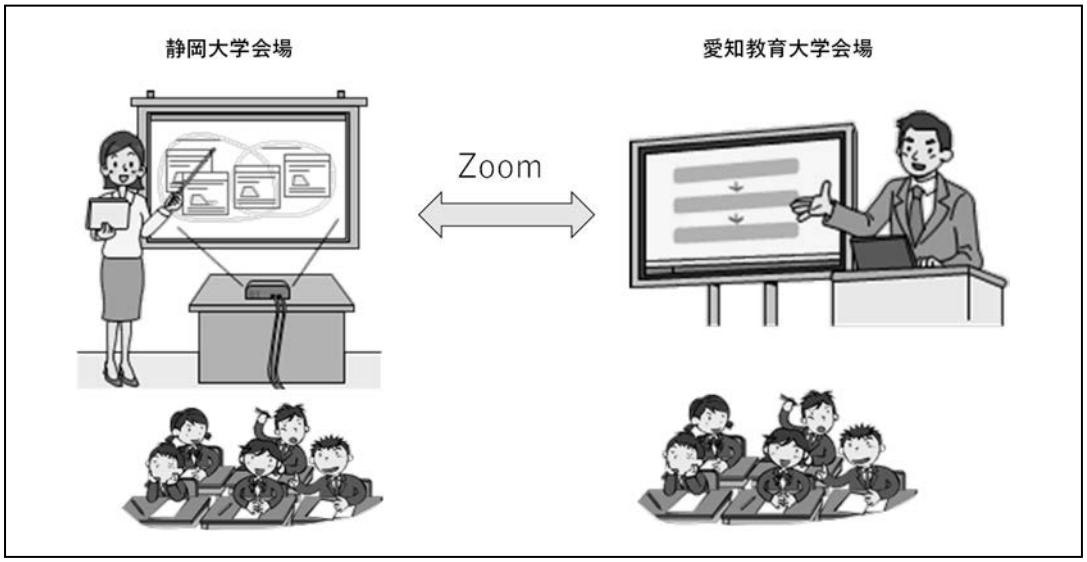
○当日のスケジュール　進行：学務委員

【2/12 土）　セミナーⅡ】
１　開会の挨拶　共同専攻連絡協議会　議長（9 時 00 分～9 時 05 分）
２　発表　（9 時 05 分～15 時 55 分）
３　講評　共同専攻連絡協議会　副議長（15 時 45 分～16 時 05 分）

【2/13（日）　セミナーⅠ】
１　挨拶　共同専攻連絡協議会　議長（9 時 00 分～9 時 05 分）
２　発表　（9 時 05 分～15 時 15 分）
３　全体の講評　共同専攻連絡協議会　副議長（15 時 25 分～15 時 25 分）

2月12日（土）セミナーⅡ　プログラム案

8：30からズームに入室可能（ズームは静岡大学で準備）



9：00～9：05　開会挨拶　連絡協議会議長　白畑　知彦

進行：竹川　慎哉（愛知教育大学）

（1）　9:05～9:45 発表者：西野 雄一郎（愛知教育大学） 指導教員：中野 真志
題目：J.L.メリアムのミズーリ大学附属初等学校におけるカリキュラム実践に関する研究
司会：白畑 知彦

（2）　9:50～10:30 発表者：行田 臣（愛知教育大学） 指導教員：中野 真志
題目：戦後新教育期における愛知県三河地域の教育－実験学校に着目して－
司会：坂口 京子

（3）　10:35～11:15 発表者：胡 石帆（愛知教育大学） 指導教員：飯島 康之
題目：Scratch 学習辞書を活用した初心者向けプログラミング教育
司会：紅林 秀治

（4）　11:20～12:00 発表者：露木 隆（愛知教育大学） 指導教員：岩山 勉
題目：電磁気学分野の概念形成を促す教材開発とその実践
司会：郡司 賀透

12:00～13:00 休憩

(5)　13:00～13:40 発表者：山元 薫（静岡大学） 指導教員：香野　毅
題目：知的障害教育における授業力を高めるツールの開発
司会：中野 真志

(6)　13:45～14:25 発表者：岡村 明夢（静岡大学） 指導教員：白畑 知彦
題目：日本語を母語とする英語学習者の動詞の下位範疇化の習得
司会：石川 恭

(7)　14:30～15:10 発表者：高根 信吾（静岡大学） 指導教員：新保 淳
題目：バレーボールにおけるシチュエーショントレーニングを導入した学習プログラム
司会：石川 恭

(8)　15:15～15:55 発表者：古田 このみ（静岡大学） 指導教員：松永 泰弘
題目：受動歩行模型を用いた幼稚園から大学を対象とした教育プログラムの開発
司会：野地 恒有

15:55～16:05 講評 連絡協議会副議長：飯島康之

2月13日（日）セミナーⅠ

8:30 から　Zoom に入室できます。

9：00～9：05　開会挨拶　連絡協議会議長　白畑　知彦

進行：紅林秀治（静岡大学）

(1)　9：05～9：35　発表者：安永太地（静岡大学）指導教員：村越　真
題目：
司会：石川　恭

(2)　9：40～10：10　発表者：三宅　昂子（静岡大学）指導教員：村山　功
題目：
司会：野平慎二

(3)　10：15 ～10：45　発表者：安藤久美子（愛知教育大学）指導教員：野平慎二
題目：
司会：香野　毅

(4)　10：50～11：20　発表者：河内照治（愛知教育大学）指導教員：野平慎二
題目：
司会：坂口京子

(5)　11：25～11：55　発表者：柴田萌子（愛知教育大学）指導教員：野平慎二
題目：
司会：村山　功

11：55～13：00　休憩

(6)　13：00～13：30　発表者：室伏春樹（静岡大学）指導教員：紅林秀治
題目：
司会：飯島康之

(7)　13：35～14：05　発表者：菊本智之（静岡大学）指導教員：新保　淳
題目：
司会：野地恒有

(8)　14：10～14：40　発表者：大矢知佳（愛知教育大学）指導教員：伊藤貴啓
題目：
司会：杉山康司

(9)　14：45～15：15　発表者：小柳津和博（静岡大学）指導教員：香野　毅
題目：
司会：石田靖彦

15：15～15：25　講評 連絡協議会副議長：飯島　康之

２０２１年度共同教科開発学専攻　連絡協議会等　開催日

	専攻会議（静大） 【教授会後～】 G103	専攻会議（愛教大）17:00～ 未来館3A講義室	合同連絡協議会 【16:45～】
４月	4/8(木)	4/12(月)	4/15(木)
５月	5/13(木)	5/17(月)	5/20(木)
６月	6/10(木)	6/14(月)	6/17(木)
７月	7/8(木)	7/26(月)	7/29(木)
８月			
９月	9/9(木)	9/13(月)	9/16(木)
１０月	10/14(木)	10/18(月)	10/21(木)
１１月	11/11(木)	11/15(月)	11/18(木)
１２月	12/9(木)	12/13(月)	12/16(木)
１月	1/13(木)	1/17(月)	1/20(木)
２月	2/10(木)	12/14(水)	2/17(木)
３月	3/4(金)	3/14(月)	3/16(水)

R3年度愛知教育大学・静岡大学共同教科開発学専攻　各委員会委員名簿

委員会名	静岡大学			愛知教育大学		
	分野	R3	氏名	分野	R3	氏名
運営委員会	教育環境学		村越　真	人文社会系教科学		野地　恒有
	教育環境学		村山　功	自然系教科学	◎	飯島　康之
	教育環境学		香野　毅	教育環境学	○	石川　恭
	人文社会系教科学	◎	白畑　知彦	教育環境学		竹川 慎哉
	人文社会系教科学		黒川　みどり	教育環境学		石田　靖彦
	自然系教科学	○	熊倉　啓之	人文社会系教科学		丹藤　博文
	自然系教科学		小南　陽亮	人文社会系教科学		中野　真志
	自然系教科学		郡司 賀透	人文社会系教科学		伊藤　貴啓
	創造系教科学		新保　淳			
	創造系教科学		松永 泰弘			
	創造系教科学		紅林　秀治			
	創造系教科学		村上 陽子			
学務委員会	教育環境学	○	村越　真	教育環境学	◎	竹川 慎哉
	教育環境学		村山　功	教育環境学	○	野平　慎二
	教育環境学		香野　毅	教育環境学		野崎 浩成
	人文社会系教科学		坂口　京子			
	自然系教科学		熊倉　啓之			
	創造系教科学	◎	紅林　秀治			
入試委員会	教育環境学		鎌塚　優子	教育環境学	◎	石田 靖彦
	教育環境学		中村 美智太郎	自然系教科学	○	小谷 健司
	人文社会系教科学		白畑　知彦	人文社会系教科学		稲葉　みどり
	自然系教科学	◎	郡司 賀透			
	創造系教科学	○	新保　淳			
	創造系教科学		松永 泰弘			
学位審査委員会	教育環境学	◎	村越　真	人文社会系教科学	◎	丹藤　博文
	人文社会系教科学		黒川　みどり	人文社会系教科学	○	伊藤　貴啓
	自然系教科学	○	小南　陽亮	教育環境学		梅田 恭子
紀要編集委員会	創造系教科学	◎	村上 陽子	自然系教科学	◎	稲毛　正彦
	創造系教科学	○	杉山 康司	人文社会系教科学	○	中野 真志
				教育環境学		鈴木 裕子
				創造系教科学		寺本 圭輔
教員人事委員会	教育環境学		村越　真	人文社会系教科学	◎	伊藤　貴啓
	教育環境学		村山　功	自然系教科学	○	飯島　康之
	教育環境学		香野　毅	自然系教科学		大鹿 聖公
	人文社会系教科学		白畑　知彦			
	人文社会系教科学		黒川　みどり			
	自然系教科学		熊倉　啓之			
	自然系教科学		小南　陽亮			
	自然系教科学		郡司 賀透			
	創造系教科学		新保　淳			
	創造系教科学		松永 泰弘			
	創造系教科学		紅林　秀治			
	創造系教科学		村上 陽子			

＊　◎は委員長，○は副委員長

＊　将来構想，カリキュラム改革等の対応は，運営委員会が行う。

Ⅲ．学生の研究課題と指導体制

平成24年度入学生　共同教科開発学専攻　指導体制

（愛知教育大学に籍を置く学生）

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員（主査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
人文社会系教科学	212D001	大島　光代	おおしま　みつよ	稲葉みどり	古田　真司	村越　　真			発達障害児の国語科指導に効果的な教材開発の研究
自然系教科学	212D002	大西　俊弘	おおにし　としひろ	岩山　　勉	稲毛　正彦	熊倉　啓之	飯島　康之	丹沢　哲郎	テクノロジー利用を前提とした高等学校数学科のカリキュラム開発

平成25年度入学生　共同教科開発学専攻　指導体制

（静岡大学に籍を置く学生）

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員（主査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	指導補佐教員	研究主題
創造系教科学	30340004	齋藤　　昇	さいとう　のぼる	新保　　淳	村越　　真	野地　恒有			「言葉と音楽とのつながり」に着目した、声による表現学習の研究

（愛知教育大学に籍を置く学生）

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員（主査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	指導補佐教員	研究主題
創造系教科学	213D002	名倉　一美	なぐら　かずみ	古田　真司	石川　　恭	村越　　真			幼稚園の「人間関係」領域における発達障害児の支援に関する研究

平成26年度入学生　共同教科開発学専攻　指導体制

（静岡大学に籍を置く学生）

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員（主査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	指導補佐教員	研究主題
人文社会系教科学	30440001	石川　芳恵	いしかわ　よしえ	白畑　知彦	村越　　真	稲葉みどり	野地　恒有		英語学習における語彙の指導方法
創造系教科学	30440003	大村　基将	おおむら　もとまさ	紅林　秀治	小南　陽亮	岩山　　勉		松永　泰弘	プログラミング初学者に対し、プログラミング教育を行う上での初学者が学ぶべきソフトウェア設計要素および開発プロセスの検討・評価

（愛知教育大学に籍を置く学生）

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員（主査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	指導補佐教員	研究主題
自然系教科学	214D001	大西　英夫	おおにし　ひでお	稲毛　正彦	古田　真司	村山　　功	飯島　康之		聴覚障害児の化学概念修得プログラムの開発とその効果に関する研究（仮）
自然系教科学	214D004	小池　嘉志	こいけ　よしゆき	稲毛　正彦	岩山　　勉	熊倉　啓之	飯島　康之		算数科における創造性を育てる指導法の研究

平成27年度入学生　共同教科開発学専攻　指導体制

（静岡大学に籍を置く学生）

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員（主査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	指導補佐教員	研究主題
自然系教科学	30540003	佐藤　一	さとう　はじめ	熊倉　啓之	小南　陽亮	岩山　勉			飯島　康之	高等学校数学科における「経済数学」リテラシー
教育環境学	30540004	杉山　元洋	すぎやま　もとひろ	村山　功	村越　真	中野　真志				科学的概念の理解における学習者の問いの意義
人文社会系教科学	30540005	田村　知子	たむら　ともこ	白畑　知彦	新保　淳	黒川みどり	野地　恒有	倉本　哲男		日本語を母語とする学習者のための語彙指導と習得
教育環境学	30540006	二見　隆亮	ふたみ　たかあき	村越　真	新保　淳	野地　恒有				生き方教育としての走教育の研究

（愛知教育大学に籍を置く学生）

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員（主査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	指導補佐教員	研究主題
人文社会系教科学	215D002	小原亜紀子	おはら　あきこ	稲葉みどり	伊藤　貴啓	小川　裕子				日本語教師養成プログラムにおけるティーチングポートフォリオの有効性の検証
創造系教科学	215D003	内田　智子	うちだ　ともこ	野地　恒有	石川　恭	新保　淳				幼児期における体力・運動能力向上につながる運動指導に関する研究

平成28年度入学生　共同教科開発学専攻　指導体制

（静岡大学に籍を置く学生）

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員（主査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
人文社会系教科学	30640002	大西　　洋	おおにし　ひろし	黒川みどり	白畑　知彦	野地　恒有	伊藤　貴啓		旧徳川幕府から明治政府への条約改正に関する継承性 ―社会科教材開発における単元の核の社会的事象設定についての一考察―
創造系教科学	30640003	室　　雅子	むろ　まさこ	小川　裕子	村山　　功	石川　　恭			生活力育成のための家庭科のあり方
人文社会系教科学	30640004	渡邉　明彦	わたなべ　あきひこ	黒川みどり	白畑　知彦	野地　恒有			日本近現代における歴史教育の成立と教員養成に関する研究
教育環境学	30640005	渡邊　千佳	わたなべ　ちか	村山　　功	村越　　真	倉本　哲男			「楽しい授業，わかる授業」の実現をめざす校内研修ファシリテーターの育成

（愛知教育大学に籍を置く学生）

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員（主査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
人文社会系教科学	216D001	中川　右也	なかがわ　ゆうや	稲葉みどり	野地　恒有	村越　　真			句動詞修得における認知言語学的アプローチ
人文社会系教科学	216D002	渡辺　芳朗	わたなべ　よしろう	稲葉みどり	伊藤　貴啓	村越　　真			新たな英語教育の実現のための教師養成支援システムの構築
教育環境学	216D003	久米　泰輔	くめ　たいすけ	石川　　恭	古田　真司	村越　　真	石田　靖彦		父親の子育てと家庭関与が児童の心理，学習行動そして学校適応度に及ぼす影響
創造系教科学	216D004	森　　慶恵	もり　よしえ	古田　真司	石川　　恭	小川　裕子			学校における健康情報リテラシー育成の理論と方法に関する研究

平成29年度入学生　共同教科開発学専攻　指導体制

（静岡大学に籍を置く学生）

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員（主査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	30740001	磯﨑　雄三	いそざき　ゆうぞう	村越　　真	村山　　功	伊藤　貴啓				社会科地理的分野における読図を通しての思考力育成の手立て
人文社会系教科学	30740002	下田　　実	しもだ　みのる	黒川みどり	新保　　淳	丹藤　博文			坂口　京子	「個」を「場」に導く指導に関する研究
創造系教科学	30740003	西ヶ谷浩史	にしがや　ひろふみ	紅林　秀治	新保　　淳	飯島　康之	小川　裕子			設計を中心にした授業過程の研究
人文社会系教科学	30740004	箱﨑　雄子	はこざき　ゆうこ	白畑　知彦	村越　　真	伊藤　貴啓	村山　　功	新保　　淳		小学校英語教育における音声指導―超文節素的音声現象の習得を目指して―

（愛知教育大学に籍を置く学生）

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員（主査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	217D001	馬場　洸志	ばば　たけし	倉本　哲男	中野　真志	村山　　功			石田　靖彦	サービス・ラーニングによる大学生の価値観の変容（仮）
人文社会系教科学	217D002	市川　裕理	いちかわ　ゆり	稲葉みどり	倉本　哲男	白畑　知彦				英語授業におけるLearning Communityの構築に関する研究
人文社会系教科学	217D003	神谷　裕子	かみや　ひろこ	中野　真志	野地　恒有	小川　裕子				幼保小接続期カリキュラムに関する研究
人文社会系教科学	217D004	永井　弘人	ながい　ひろひと	野地　恒有	伊藤　貴啓	黒川みどり				民俗学（民芸・工芸）を中心とした特別支援教育における教材開発
創造系教科学	217D005	田中　滉至	たなか　こうじ	古田　真司	倉本　哲男	小川　裕子				単元「健康の社会的決定要因」の開発に関する研究

平成30年度入学生　共同教科開発学専攻　指導体制

（静岡大学に籍を置く学生）

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員（主査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
自然系教科学	30840001	荒谷　航平	あらや　こうへい	小南　陽亮	丹沢　哲郎	岩山　　勉	郡司　賀透		米国の科学カリキュラムにおける科学技術社会論的内容の変遷―物理学分野に着目して―
創造系教科学	30840002	河合　紳和	かわい　のぶかず	新保　　淳	紅林　秀治	伊藤　貴啓			音楽表現の補助装置としての身体運動 音楽的ニュアンスを伝達する指揮のメカニズムについて
人文社会系教科学	30840003	児玉　恵太	こだま　けいた	白畑　知彦	黒川みどり	野地　恒有			文学教材の読解を通しての語い指導
創造系教科学	30840004	谷川　ゆり	たにがわ　ゆり	新保　　淳	紅林　秀治	野地　恒有	杉山　康司		運動習慣や生まれ月による体力差および性差を考慮した体育授業についての研究
人文社会系教科学	30840005	中山　敬司	なかやま　けいじ	黒川みどり	白畑　知彦	野地　恒有	伊藤　貴啓		静岡県小笠地域における被差別部落の研究―井上良一を事例に―
教育環境学	30840006	満下　健太	みつした　けんた	村越　　真	村山　　功	古田　真司	鎌塚　優子		学校のリスク認知から見る学校の安全の在り方の研究
創造系教科学	30840007	百瀬　容美子	ももせ　ゆみこ	新保　　淳	村越　　真	野地　恒有			視覚障害児童・生徒の運動学習に寄与するイメージ生成指導法の開発

（愛知教育大学に籍を置く学生）

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員（主査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
創造系教科学	218D001	酒井　達哉	さかい　たつや	石川　　恭	古田　真司	村越　　真			体育授業場面においての教示「勇気づけ」に関する研究
人文社会系教科学	218D002	加藤　　智	かとう　さとし	中野　真志	倉本　哲男	小川　裕子	坂口　京子		米国におけるサービス・ラーニングの理論と実践に関する研究
人文社会系教科学	218D003	檜垣　栄慈	ひがき　えいじ	野地　恒有	稲葉みどり	白畑　知彦			聴覚障害児の作文力に関する言語発達心理学的研究
自然系教科学	218D004	新鶴田道也	しんつるた　みちや	岩山　　勉	稲毛　正彦	熊倉　啓之			先端科学技術を活用した授業の開発―電子黒板による次代の理科授業を創造する―
自然系教科学	218D005	マム　チャンセン	まむ　ちゃんせん	岩山　　勉	稲毛　正彦	小南　陽亮			カンボジアの生物教育における物理的アプローチによる新規教材の開発

平成31年度入学生　共同教科開発学専攻　指導体制

（静岡大学に籍を置く学生）

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員（主査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
創造系教科学	30940001	青木　麟太郎	あおき　りんたろう	紅林　秀治	飯島　康之	飯島　康之	郡司　賀透		簡易趣旨動作分析システムを用いた手指の巧緻性に関する研究
創造系教科学	30940002	黒須　雅弘	くろす　まさひろ	新保　　淳	石川　　恭				学校体育の短距離走における指導方法の開発に関する研究
自然系教科学	30940003	塩澤　友樹	しおざわ　ゆうき	熊倉　啓之	村山　　功	飯島　康之			学校数学における標本抽出の概念形成の促進に関する研究
人文社会系教科学	30940004	島﨑　治子	しまざき　はるこ	白畑　知彦	野地　恒有	村山　　功			大学英語リーディング授業において読解力を高める指導方法の検証
教育環境学	30940005	望月　　大	もちづき　だい	村越　　真	伊藤　貴啓		杉山　康司		社会科地理的分野の豪雨災害に関する防災授業の開発

（愛知教育大学に籍を置く学生）

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員（主査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	219D001	片岡　佑衣	かたおか　ゆい	石川　　恭	倉本　哲男	新保　　淳			幼児期における調整力の発達と体力向上に向けた運動遊びプログラムの開発
教育環境学	219D002	杉山　　立	すぎやま　りゅう	倉本　哲男	高橋　美由紀	村越　　真			教育目標の共有に関する 研究 MBB論を用いたカリキュラムマネジメント論の構想と実践
人文社会系教科学	219D004	中村　仁志	なかむら　ひとし	中野　真志	野地　恒有	白畑　知彦			デューイ実験学校の歴史科教育論の構造とその形成基盤に関する研究
自然系教科学	219D005	大久保　博和	おおくぼ　ひろかず	岩山　　勉	稲毛　正彦	郡司　賀透			カンボジアの教科書との比較から探る科学的思考力を高める実験教材の開発 ―物理力学分野を中心として―
創造系教科学	219D006	澤田　育子	さわだ　いくこ	古田　真司	飯島　康之	紅林　秀治			少人数の合唱で、遠くまで響く声を生み出す方法
創造系教科学	219D007	武市　裕子	たけいち　ゆうこ	古田　真司	野平　慎二	村越　　真			子どもの心身の変化を視覚化する養護教諭のアセスメントツールの開発

令和2年度入学生　共同教科開発学専攻　指導体制

（静岡大学に籍を置く学生）

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員（主査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	3004001	筒井　昌博	つつい　まさひろ	村山　功					校内研修の学校文化が維持されていく条件
教育環境学	30040002	三宅　昂子	みやけ　たかこ	村山　功	鎌塚　優子	野平　慎二	村越　真		養護教諭のキャリアステージ別の養護診断プロセスにおける思考の相違点およびプログラム開発
教育環境学	30040003	山元　薫	やまもと　かおる	香野　毅	村山　功	中野　真志			知的障害教育における授業力を高めるツールの開発
人文社会系教科学	30040004	岡村　明夢	おかむら　ひろむ	白畑　知彦		石川　恭			日本語を母語とする英語学習者の動詞の下位範疇化の習得
創造系教科学	30040005	高根　信吾	たかね　しんご	新保　淳	杉山　康司	石川　恭			バレーボールにおけるシチュエーショントレーニングを導入した学習プログラムの開発とその学習効果
創造系教科学	30040006	古田　このみ	ふるた　このみ	松永　泰弘	村越　慎	野地　恒有			受動歩行模型を用いた幼稚園から大学を対象とした教育プログラムの開発

（愛知教育大学に籍を置く学生）

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員（主査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
人文社会系教科学	220D001	西野　雄一郎	にしの　ゆういちろう	中野　真志	野平　慎二	白畑　知彦			ユニウス・ラストロップ・メリアムのミズーリ大学附属初等学校におけるカリキュラム開発に関する研究
人文社会系教科学	220D002	行田　臣	ゆくた　じん	中野　真志	野地　恒有	坂口　京子			戦後新教育期における愛知県三河地域の教育 －実験学校に着目して－
自然系教科学	220D003	胡　石帆	こ　せきはん	飯島　康之	小谷　健司	紅林　秀治			小学校でのプログラミング教育におけるプログラミング的思考能力の測定と授業方法の影響
自然系教科学	220D004	露木　隆	つゆき　たかし	岩山　勉	稲毛　正彦	郡司　賀透			自己調整学習を促す物理教材の開発と実践に関する研究

令和３年度入学生　共同教科開発学専攻　指導体制

（静岡大学に籍を置く学生）

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員（主査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	30140001	小柳津　和博	おやいづ　かずひろ	香野　毅	鎌塚　優子	石田　靖彦			重症心身障害児との関わり合いを促すインクルージブ自己評価表」の開発
教育環境学	30140002	安永　太地	やすなが　たいち	村越　真	新保　淳	石川　恭	塩田　真吾		行動変容を目指したｽﾎﾟｰﾂ・ｲﾝﾃｸﾞﾘﾃｨ教育のカリキュラム開発と評価 ートップアスリート指導者から運動部活動の外部指導者まで
創造系教科学	30140003	室伏　春樹	むろふし　はるき	紅林　秀治	村越　真	飯島　康之			プロジェクトマネジメントに基づいた技術教育の研究
創造系教科学	30140004	菊本　智之	きくもと　ともゆき	新保　淳	杉山　康司	野地　恒有			中学校保健体育科における「武道」領域の授業者の資質向上を視野に入れた「かた」学習プログラムの開発

（愛知教育大学に籍を置く学生）

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員（主査）	副指導教員（副査）	副指導教員（副査）	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	221D001	安藤　久美子	あんどう　くみこ	野平　慎二	石田　靖彦	香野　毅			発達障害のある子どもを持つ保護者が小学校就学時に抱える不安とその支援について
教育環境学	221D002	河内　照治	かわち　しょうじ	野平　慎二	丹藤　博文	坂口　京子	竹川　慎		石田和男における「わかる」の概念について
教育環境学	221D003	柴田　萌子	しばた　もえこ	野平　慎二	飯島　康之	村山　功			高等教育における女子大学の機能と構造
人文社会系教科学	221D004	梅田　裕介	うめだ　ゆうすけ	中野　真志	岩山　勉	郡司　賀透			自然遊び・科学遊びを通じた幼児の思考力育成プログラムの開発

Ⅳ．学生の研究計画と研究活動

安　藤　久美子

（学籍：愛知教育大学）

○研究テーマ
　就学移行時の発達障害児の支援－保護者と学校の連携と協働－
○研究ポイント
　発達障害のある子の義務教育の開始つまり就学移行という時期を迎え，保護者はどのような不安を抱え，学校はどのように子を支援していくのか，その連携と協働の在り方を検討し、学校生活の適応に導く支援方略の構築を目的とする。
○キーワード
　特別支援教育、就学移行時、発達障害児支援、保護者と学校の連携と協働

1　博士論文の計画

博士論文の構成として、以下のように計画している。

(1) 就学移行期に関する先行研究について、文献レビューを行い、最近の研究の動向を踏まえながら、県有テーマを絞り込んでいく、文献レビューについては、愛知教育大学の紀要に論文投稿を行う。

(2) 特別支援学校や特別支援学校に子どもが就学した保護者（両親）に質問紙調査①渡辺･菊池（2020a）の就学移行期の親の心理的特徴尺度②ECBI日本語版アイバーグ子どもの行動評価尺度（2016）③BDI－Ⅱベック抑うつ質問票もしくはPOMS２日本語版短縮版（2015）の3種類もしくは2種類を実施する。

(3) 担任に子ども１人につき①SESBI－R日本語版サッターアイバーグ児童生徒の行動評価尺度（2020）を実施する。

(4) 保護者のECBIと担任のSESBI-Rの比較から，「両親間のとらえ方の相違」「両親と教師のとらえ方の相違」を分析しつつ、就学移行時のデータおよび進学移行時のデータを増やしていく。

(5) 得られたデータを分析し、有効な支援の方略について考察する。

2　本年度の研究活動

・先行研究の文献レビューについて、愛知教育大学紀要に投稿する。
・半構造化面接時のインタビュー内容について検討を行う。
・質問紙の検査バッテリーについて検討する。

河　内　照　治

（学籍：愛知教育大学）

○研究テーマ
　石田和男の生活綴方教育実践における「わかる」とその意義の研究
○研究ポイント
　石田和男の生活綴方教育実践における「わかる」とは、子どもの五感を重視した「生活の実感」からスタートし、科学的認識にまで発展させていくことを目指している。
　すなわち「感性的認識」と「科学的認識」との間に障壁を設けていないことが特徴である。この石田の実践は、どこまでも「子どもの主体性」を重視した実戦であり、現代の教育のなかで、最も求められている実践であると共に、子どもの認識形成に結びついている実践であることを明らかにする。
○キーワード
　ありのまま　生活実感　主体性　わかる　学級集団づくり

1　博士論文の計画

博士論文の計画として、以下のように考えている。

まず第一に、石田の生活綴方とは、生活のありのままを、書き言葉で書き綴ることを通して、自我の意識的形成を図っていく教育方法であることを明らかにする。第２に、石田「ありのまま」について論究する。ありのままに対象をみるについては、さまざまな捉え方がある。石田和男のありのままに対する捉え方は、対象を写真で撮ったようにではなく、その子どもの人格を通してのありのままであることを明らかにする。第3に、石田の「生活実感」について明らかにする。この生活実感に対する捉え方が、石田独特の生活綴方教育実践を生み出していったことを、子どもの生活綴方を引用しながら検証していく。第４に、石田の「わかる」について論究する。石田の「わかる」は、「生活実感」を「感性的認識」として「科学的認識」の下位におかなかった、障壁を設けなかったことを論証していく。第５に、石田の教育実践は、「保護者・地域との連携」を重視したことから生まれてきたものであることを明らかにする。

2　本年度の研究活動

日本教育方法学会第57回大会で発表した。「石田和男の生活綴方における生活概念とその意義」（2021年）

柴　田　萌　子

（学籍：愛知教育大学）

○研究テーマ
　女子高等教育の機能と構造
○研究ポイント
　現在、大学の大衆化に伴い女性の進学率は増加し続け、男女差はほぼないと言える中で、女子大学の学校数は減少傾向に、また全大学に占める割合は低下傾向にある。日本の女子大学を取り巻く環境は年々厳しくなっており、特に2000年代以降は、受験生の「女子大離れ」に代表される女子大不要論が盛んに謳われている。このような現状の中で女子大学はどのような役割を担っているのか、その存在意義が問われる状況にある。本研究では女子大学の役割や人材輩出機能を規定していると考えられる構造的な特質は何かを検討することを目的とする。
○キーワード
　女子大学、高等教育、機能と構造

1　博士論文の計画

本研究では女子大学の役割や人材輩出機能に影響を与えていると考えられる構造的な特質は何かを検討することを目的とする。戦後、法律や制度の改革により、女子高等教育における基盤が整い、女性が高等教育を受ける機会は拡大していった。その中で女子大学は機会拡大の受け皿としての役割を果たしていた。一時は女子大学の学校数は拡大していたが、現在はその数も縮小傾向にある。このような流れの中で女子大学は共学大学にはない独自の役割・人材輩出機能をどのように果たしてきたのか。役割を規定するものとして、社会的需要があるが、需要に対する供給過程としては、社会的需要の役割に対して組織的な対応がなされ、役割が決められる。女子大学はその過程で独自の対応をしてきたのではないかと考えらえる。そこで、下記の内容について研究を進める。

【研究①】女子大学の歴史的構造と組織変容に関する研究

旧制の女子教育機関から新制大学制度下での女子大学における社会背景や要請によってどのような変遷を遂げてきたのかを量的変化や学部設置や学修内容の質的変化とともに高等教育全体の中での女子大学として整理する。

【研究②】女子大学の運営とその基盤に関する研究

女子大を維持する法人経営などの側面で女子大学の固有の特質を明らかにする。

【研究③】女子大学のカリキュラムと出口に関する研究

組織的構造と運営の上に敷かれるカリキュラムにおける教育内容を調査する。カリキュラムについて、主にカリキュラムの目的、対象、内容、開発、教授法および結果･評価（学位）といった側面から解釈する。

2　本年度の研究活動

これまでの研究をもとに、博士論文における研究課題の再検討や日本の女子大学が掲げる理念の収集整理と歴史整理を行った。

大　矢　知　佳

（学籍：愛知教育大学）

○研究テーマ
　就学前後における脳神経活動に着目した運動遊びの効果の検討
○研究ポイント
　発達段階の特徴より幼児期・児童期は神経型の発達が著しいことから基本的な動きや多様な動きを獲得するために適した時期である。運動や運動遊びの効果をエビデンスに基づき示すため、生理学的指標を用いて検討することとした。客観的指標からその効果を示すことで、体育の授業といった限られた時間の中でより効果的なプログラム開発につながると考える。
○キーワード
　脳神経活動、運動遊び、多様な動き、筋間コヒーレンス、筋電図

1　博士論文の計画

1）ヒトの動きの獲得と脳神経機能の発達から運動の遊びの意義を示す

　身体を動かす情報や指令は神経細胞によって伝達されている。子どもは神経型の発達が著しい時期とされており、基礎的な動きの獲得に適した時期である。文献研究よりヒトの動きの獲得の構造と子どもの脳・神経機能の発達と動きの獲得のメカニズムを整理し、運動遊びの意義について生理学的視点から示す。

2）歩行中における脳と筋の神経活動の同調性を検討する

　脳において、感覚器官からの情報と運動司令の情報の統合性より身体の動きの調整をしている。この調整を脳と筋の間の神経活動における同調性から評価するコヒーレンス法が示されている。近年では筋電図のみ（筋電図間）のコヒーレンスによって評価が可能であることが示されており、無線の筋電機器を使用することで運動遊び中の脳神経活動を示すことができるのではないかと考える。 まず、歩行課題における筋間コヒーレンスについて検討し、単一歩行、二重課題歩行における脳神経活動について検討する。

3）運動遊び中の脳と神経活動の同調性から運動刺激の効果を検討する

　運動遊び中の脳・神経活動を評価することで、身体をコントロールする運動制御機能の視点から運動遊びの効果を検討する。「走」の動作に着目し、「通常の単一走」「競争における走」「障害物を伴った走」、伝承遊びのひとつである「鬼ごっこ（陣取り）」と比較検討し、遊びの要素の有無によって変化が生じるのか検討する。

2　本年度の研究活動

　本年度は文献調査より、測定部位、運動課題、認知課題、分析方法について検討し、予備実験を複数回実施して研究方法の検討を行った。今後は、本実験の測定内容について成人を対象に実施して測定方法の精査を行い、その結果を踏まえて幼児を対象として測定を進めていく予定である。

西　野　雄一郎

（学籍：愛知教育大学）

○研究テーマ
　J.L.メリアムのミズーリ大学附属初等学校におけるカリキュラム開発に関する研究
○研究ポイント
　メリアムのミズーリ大学附属初等学校におけるカリキュラム開発を、それが行われた背景や同時代の教育者の影響を踏まえて明らかにすることを目的とする。また、それによって当時の教育改革の実態解明の一助とする。
○キーワード
　メリアム、進歩主義教育、カリキュラム開発、アメリカ、生活科、総合的な学習の時間

1　博士論文の計画

2021年度は第１に、メリアムの理論構築の過程についての解明を課題として取り組んできた。社会的・産業的な発展を遂げてきた20世紀初頭のアメリカ社会において、メリアムは、学校教育を近代化・合理化する意図をもっていた。しかし、その方法としては、時間的経済的な浪費を削減したり、完全な大人への準備のための教育方法を模索したりするのではなかった。メリアムは「大人の見地」から準備された子どもに理解が容易でない従来の教科を脇に置き、「今日における最も適切な適応が、明日の適応に最も適している」とし、現時点の生活を豊かにするための生活の直接研究を重視した。

第２に、メリアムのミズーリ学校におけるカリキュラム開発の解明を課題として取り組んできた。メリアムがカリキュラムに位置付けた「観察」は、「今日における適応」を、低学年のうちはより身近なものと行い、年を重ねるにつれて、より広範囲のものと行う領域だった。一方、「物語」は子どもと大人の余暇をより有意義に過ごすことができるようになるために設置された領域だった。この二つの領域は相互に補完し合うときがあった。「物語」は、長期間に及ぶ「観察」における主体的な生活研究を阻害することなく、余暇読書を通して「観察」と相互補完する形で幅広い知識や教養を獲得し得るものだった。

第３に、D.ラヴィッチによる批判の克服を課題として研究に取り組んだ。ミズーリ学校は決してラヴィッチのいうような「自発性と無計画性を美徳と考えている」、「子どもの気まぐれに追従しすぎる進歩主義教育者」の学校ではなく、社会的な必要性から「物語」を設置したり、多種多様な種類の本を生活の中の余暇読書で読む態度を涵養するために実施計画を立てたりする学校だった。

2　本年度の研究活動

「社会的効率主義とJ.L.メリアムの関係性」第32回日本カリキュラム学会（琉球大学WEB大会）
「J.L.メリアムによる伝統的カリキュラム批判に関する検討―バグリーの形式陶冶に関する見解との比較を通して―」日本生活科・総合的学習学会全国大会第30回静岡（富士山）大会
「J.L.メリアムのカリキュラム実践へのデューイの影響」日本デューイ学会第64回研究大会
「J.L.メリアムによるミズーリ大学附属初等学校におけるカリキュラム開発 ―教科「物語」に着目して―」『アメリカ教育研究』第32号
「J.L.メリアムによるミズーリ大学附属初等学校におけるカリキュラム実践―教科「手仕事」に着目して―」『愛知教育大学教育実践センター紀要』第７号

胡　　石　帆

（学籍：愛知教育大学）

○研究テーマ
　Scratchを利用したプログラミング初期教育補助ツールの開発
○研究ポイント
　①　Scratch把握度合いの分析；
　②　学習過程中､機能的なブロックの組み合わせを提示することによるプログラミング出来る幅を広げる；
　③　発想の実現の手伝い、問題解決の方により専念できる。
○キーワード
　Scratch，プログラミング，学習補助ツール，アイデアの実現、モジュール化

1　博士論文の計画

本研究は本研究はScratch学習者の発想を実現するための支援と多教科の総合的授業設計を行うことを目的として､伝統的なプログラミング開発方法を参考して､よく使用される機能をモジュール化して､補助教材を開発。計画は今年度中博士論文の完成と論文の投稿。

論文構成：

序章
第１章　Scratch関連する先行研究
第２章　Scratch
第３章　補助ツールの開発目的と着目点
第４章　補助ツールの実践使用状況報告
第５章　アンケートの結果分析と考察
第６章　補助ツールの改良案の提出と今後の課題

2　本年度の研究活動

・2021年３月の授業実践結果統計と分析。
・Scratchを利用したプログラミング教育実例の収集と分析。
・開発ツールの作成。
・投稿用授業実践論文の執筆。

露　木　　隆

（学籍：愛知教育大学）

○研究テーマ
　電磁気学分野の概念形成を促す授業の開発
○研究ポイント
　本研究では、高等学校の電気と磁気の分野において科学的概念の形成を促す教材及び指導プログラムを開発し、その実践を通して効果の検証を行うことを目的とする。
○キーワード
　電磁気学、素朴概念、電気抵抗、科学的概念、導電性粘土

1　博士論文の計画

(1) 高等学校理科の電気抵抗に関する概念形成を促す授業の開発

高等学校物理の「電気と磁気」単元の電気抵抗に関する素朴概念の抽出を行い、その修正を行うための教材及び指導プログラムを検討し、実践した。最初に、電気抵抗の形状と抵抗値に関する学習前の概念調査から、多くの生徒が「電気抵抗の体積が大きいほど抵抗値も大きくなる」「電気抵抗の長さが長いほど抵抗値は大きくなり、断面積には依存しない」といった素朴概念を持つことが明らかになった。これらの素朴概念を修正し、科学概念を形成するため、本研究では導電性があり、抵抗率と形状を自由に変えることのできる導電性粘土を自作し、実験に用いた。実験を通して素朴概念と科学概念の矛盾点を明確化するとともに､実験後のグループ討議を通して素朴概念の獲得要因を明確化し、さらに既有の知識の中で科学概念の説明方法を考えることで電気抵抗に関する素朴概念の修正や科学概念の形成が行われた。実験群と統制群の事前、事後及び遅延調査の結果から、導電性粘土を用いた指導プログラムにより、電気抵抗に関する素朴概念が修正され、科学概念が形成されるとともに、形成された科学概念が保持されることも確認できた。今後は、合成抵抗や電力、ホイートストンブリッジ等の電気抵抗に関する概念形成への導電性粘土の応用の可能性について検討する。

(2) 中学校理科の電気抵抗の概念形成過程に関する事例研究

中学校２年生「電流と回路」単元の電気抵抗に関する科学的概念の形成を行うための指導プログラムを実践する中で、電気抵抗に関する概念形成がいつ、どのように行われるかについて概念調査と発話記録をもとに、概念変化とメタ認知の関連に関する６要素を用いて分析を行った。電気抵抗の基本的概念については、抵抗器を接続した回路の電流値を観察することで形成された。また、抵抗の形状と抵抗値に関する科学的概念の形成については、事前調査において素朴概念がモニタリングされ、実験により科学的概念と素朴概念との矛盾点や共通点を明確にすることで概念形成が進み、実験後のグループ討議によって概念が精緻化され、さらに、説明を受けることで、既有の知識や概念と科学的概念が接続し、概念理解が深化・拡大することで、自信と実感を伴った科学的概念が形成されることが分かった。今後は、小学生を対象とした電気抵抗の概念形成を促す指導プログラムを開発し、実践したいと考えている。

2　本年度の研究活動

「電気抵抗に関する概念形成を促す授業の開発」について理科教育学会に投稿し査読対応中

加　藤　　智

（学籍：愛知教育大学）

○研究テーマ
　非認知的スキルの育成に資する「サービス・ラーニング型」総合的な学習の時間に関する研究
○研究ポイント
　近年国際的に注目を集めている「非認知的スキル（non-cognitive skills）」の育成に資する総合的な学習の時間の在り方について，理論的かつ実証的に明らかにし，総合的な学習の時間一層の充実と発展につなげる。
○キーワード
　非認知的スキル、総合的な学習の時間、サービス・ラーニング

1　博士論文の計画

2021年度は、「サービス・ラーニング型」総合的な学習の時間が育成する非認知的スキルに関する質問紙調査の分析を行うとともに、非認知的スキルと認知的なスキル・能力の関係性について明らかにする研究を行った。また、近年注目を集めている社会性と情動の学習（Social Emotional Learning, SEL）に関する資料収集を行い、総合的な学習の時間におけるSELの可能性について考察した。

2　本年度の研究活動

（1）論文

加藤智（2022）「新学習指導要領における総合的な学習の時間が育成する資質・能力－認知的能力・非認知的能力の視点からの考察－」愛知淑徳大学文学部『愛知淑徳大学論集－文学部篇－』第47号

加藤智（2022）「生活科で育成される資質･能力と学習評価に関する一考察」愛知淑徳大学教育学会『学び舎－教職課程研究－』第17号

加藤智･吉見果純（2022）「総合的な学習の時間のコーディネーターの成果と課題－仙台市における「生活・総合コーディネーター」のサポートを受けた教師へのインタビュー調査をもとに－」愛知淑徳大学教職・司書・学芸員教育センター『教志会研究年報』第８号

（2）学会発表

加藤智（2021）「総合的な学習の時間が育成するコーピングスキルに関する一考察」日本生活科・総合的学習教育学会第30回全国大会（オンライン）

加藤智（2021）「総合的な学習の時間が育成する非認知的スキルと教科の学力との関係に関する一考察」日本教科教育学会第47回全国大会（オンライン）

（3）その他

加藤智（2021）「総合的な学習の時間の改訂の要点「目標の改善」のポイント」生活科教育研究会『生活科の探究』研究大会号 No.123

加藤智（2022）「高等学校総合的な探究の時間における学習指導と学習評価の工夫改善」文部科学省教育課程課『中等教育資料』３月号

新鶴田　道　也

（学籍：愛知教育大学）

○研究テーマ
　理科物理分野における電気に関する教材及び指導法の開発
○研究ポイント
　カーボン・ナノチューブ・ペーパー（CNP）を用いた視覚的理解が可能な新規教材開発とその応用
○キーワード
　教材開発、電気抵抗、カーボン・ナノチューブ・ペーパー、中学校理科、高等学校物理、理数探究

1　博士論文の計画

理科物理分野において、電気に関する教材と指導法の開発を行っている。具体的には、カーボン・ナノチューブ・ペーパーを用いた視覚的理解が可能な新規教材開発とその応用可能性の検討である。カーボン・ナノチューブ・ペーパーは形状加工が容易で、形状変化の視覚的理解が可能である。電気抵抗の学習において教材化することで、電気抵抗値の形状依存性を視覚的に理解できる定量的な実験が、授業時間内で実施可能となる。本年度は中学校及び高等学校において実践した結果を分析し、研究成果をまとめた。

中学校理科「電流とその利用」単元において本指導法を実施することで、現在は発展的内容として扱われている「電気抵抗値の形状依存性」に関して、実験活動を伴って理解させることが可能であり、電気抵抗の基本的な概念形成や合成抵抗の理解を促すことが示唆された。

2　本年度の研究活動

(1) 論文

・新鶴田道也，大久保博和，岩山勉（2022）：電気抵抗の視覚的提示で合成抵抗の理解を促す授業の構想と実践－中学校理科「電流とその利用」単元におけるCNP抵抗器の活用－，教科開発学論集，第10号，47-56.
・新鶴田道也，大久保博和，岩山勉（2021）：カーボン・ナノチューブ・ペーパーを用いた電気抵抗の探究的学習，物理教育，69(3), 145-150.
・新鶴田道也，大久保博和，岩山勉（2022）：中学校理科における電気抵抗の形状依存性の導入に向けての検討－抵抗体の形状を２次元的に変化させた電気抵抗値の測定実験の評価から－，科学教育研究，46(2),（印刷中）.

(2) 学会発表

・新鶴田道也，荒谷航平，郡司賀透（2021）：アメリカ初等化学教育のエンジニアリングデザインプロセス－日本の初等理科ものづくり活動との比較－，日本理科教育学会第71回全国大会.

中　村　仁　志

（学籍：愛知教育大学）

○研究テーマ
「デューイ実験学校の歴史科教育論の構造とその形成基盤に関する研究」
○研究ポイント
米国の教育学者・哲学者ジョン・デューイ（John Dewey）は、シカゴ大学附属小学校、通称「デューイ実験学校（Dewey's Laboratory School）」の開設・運営に携わったことで知られている。デューイ実験学校の歴史科は理科とともにカリキュラム統合の基盤となった教科であり、子どもの興味や知的発達に配慮され、子どもの生活や他教科との「相関」が図られた。
本研究では、デューイ実験学校の教師の歴史科教育論を主たる分析対象とし、その構造と形成基盤を解明することを目的とする。
○キーワード
ジョン・デューイ、デューイ実験学校、歴史教育

1　博士論文の計画

本研究では、上記の研究目的を達成するために、次の４点の作業課題を設定し、研究を進めてゆく。第一に、20世紀への転換期米国における初等歴史科教育論の展開とその課題の分析、第二に、デューイ実験学校の教師の歴史科教育論の形成基盤の分析、第三に、デューイ実験学校の教師の歴史科教育論の構造と実践の具体の分析、第四に、デューイ実験学校における歴史科と他教科等の「相関」の論理と教師の協働の分析である。

博士課程３年次である今年度は、日本生活科･総合的学習教育学会第30回静岡（富士山）大会で「『子ども理解』を基盤とした教科横断的な学習に関する一考察―デューイ実験学校の教育実践における『相関』と『社会的等価物への翻訳』を手がかりに―」と題する研究発表を行い、『生活科･総合的学習研究』に「シカゴ大学時代のデューイ思想の活動構成論としての再構成」と題する論文を投稿した。

今後は、博士論文の中で未執筆および執筆途中になっている章・節の執筆を進めてゆく。

2　本年度の研究活動

(1) 論文

中村仁志（2022）「シカゴ大学時代のデューイ思想の活動構成論としての再構成」愛知教育大学生活科教育講座『生活科・総合的学習研究』（印刷中）。

(2) 学会発表

中村仁志（2021）「『子ども理解』を基盤とした教科横断的な学習に関する一考察―デューイ実験学校の教育実践における『相関』と『社会的等価物への翻訳』を手がかりに―」日本生活科・総合的学習教育学会第30回静岡（富士山）大会。

大久保　博　和

（学籍：愛知教育大学）

○研究テーマ
　科学的概念の定着を促す実験教材の開発と指導方法の検討
○研究ポイント
　科学的概念の定着を目的とした実験教材の開発と指導方法を提案し、その効果と課題を検討する。
○キーワード
　科学的概念、教材開発、電熱線の発熱、カーボン・ナノチューブ・ペーパー

1　博士論文の計画

物理分野での科学的概念の定着に関する論文は力学・電磁気分野で多く報告されている。科学的概念の定着への方法としては教材の開発と教授法の改善が挙げられる。本研究では科学的概念の定着に効果がある教材の開発とその効果の検証を目的としている。中学校における「電気」の学習内容の中から「電熱線による発熱」を中心に、「電流」、「電気抵抗」、「発熱」の概念定着を図る教材の開発を進める。中学校での「電熱線による発熱」の実験は生徒実験及び教師の演示実験を含めて50％程度しか実施されていない。その理由として実験の準備や実験そのものに時間がかかること、火傷や感電などの危険があることが挙げられている。本研究では、電熱線に代わる抵抗体を利用した安全で実施しやすい発熱実験教材を開発する。教材にはこれまでの「電熱線による発熱」での電力の概念獲得だけではなく、発熱と電気抵抗との関係、抵抗体を流れる電流による発熱を視覚的に観察できる機能を持たせる。この教材で授業実践を行い、その効果を検証することを目的としている。

３年次は、開発する教材の基礎的な研究が中心であり、授業実践はできなかった。今後は先行研究における実態調査の結果、開発された教材、指導（授業）方法などを基に、研究目的に沿った調査問題を作成し、試行調査を実施して授業実践への準備を進める。博士論文は基礎研究の結果と今後の実践の結果を基に構成する予定である。

2　本年度の研究活動

・投稿論文　物理教育学会（2022. ３. ８受理　査読中）
　カーボン･ナノチューブ･ペーパーと液晶サーモグラフシートによる発熱教材

澤　田　育　子

（学籍：愛知教育大学）

○研究テーマ
　高等学校における発声指導に関する研究　― シンガーズ・フォルマントを強化するための発声法の検討 ―
○研究ポイント
　共鳴腔を意識した発声法と呼吸法を意識した発声法の比較実験
○キーワード
　resonant voices（響く歌声）、high school（高等学校）、singing instruction（歌唱指導）、vocalization（発声法）、singer's formant（シンガーズ・フォルマント）、resonance cavity（共鳴腔）

1　博士論文の概要

本研究の目的は、「響く歌声」の音響的特徴であるシンガーズ・フォルマント※を強化する歌唱指導法を探求し、新たな視点で歌唱指導することを提案することである。遠くに響く声を科学的に分析すると、シンガーズ・フォルマントと呼ばれる音響特徴がみられる。多くの研究者がこのシンガーズ・フォルマントについての解明や実験･分析を行っているが、どのように具体的指導をすればシンガーズ･フォルマントが強化されるか、いまだ明確になっていない。そこで、共鳴腔を意識した発声法と呼吸法を意識した発声法の指導を行い、指導前後のシンガーズ・フォルマントの増加率を比較し、この実験結果をもとに、共鳴腔による指導の有効性を実証する。

※シンガーズ・フォルマントとは、「よく共鳴する」歌唱に見られ、2,500～3,200Hzの領域に見られる山形の音響スペクトルのこと。

論文構成は以下のとおりである。

序論　論文の背景

本論

第１章　響く歌声についての国内外の研究の概観
　第１節　研究方法
　第２節　調査結果
　第３節　考察
　第４節　まとめ
第２章　高等学校の音楽教師の歌唱指導に関する調査研究
　第１節　研究方法
　第２節　全体集計結果
　第３節　「教師の属性」と「独唱・合唱の発声関係で重視する事柄」の関係
　第４節　まとめと課題
第３章　歌唱の分析方法と指導法に関する検討
　第１節　歌唱の可視化
　第２節　歌唱の指導法についての文献調査
　第３節　まとめと研究課題
第４章　共鳴腔と呼吸法の発声法の比較実験
　第１節　研究方法と内容
　第２節　本実験結果
　第３節　考察

結論　研究成果と今後の課題
　第１節　研究成果
　第２節　今後の課題

2　本年度の研究活動

(1) 学会誌への投稿

「高等学校における発声指導に関する研究－シンガーズ・フォルマントを強化するための発声法の検討―」を日本声楽発声学会に投稿し、『声楽発声研究』No.12　に研究論文として掲載予定。

(2) 口頭発表

令和３年度岐阜県高等学校教育研究会 第１回研究協議会（音楽）関市文化会館

第１部 研究発表　澤田育子「高等学校の音楽教師の歌唱指導に関する研究」2021.11.16.

二　見　隆　亮

（学籍：静岡大学）

○研究テーマ
「多様な経験を通じた内省過程に着眼した自己探究型ランニング学習」（仮）
○研究ポイント
「自分をひもとくこと」を目的に据えた段階的なランニング学習の意義を明らかにする。
○キーワード
ランニング、総合学習、内省、自己評価、自己教育

1　博士論文の計画

(1) 研究の経過

2021年度はこれまでの下地を生かしての授業実践に注力する１年となった。授業履修を終え、先生方からのアドバイスをもとに授業を構成し、修改正を繰り返しながら、大学生を対象とした健康体育演習（計３回）、中学生を対象とした総合的な探究の時間（自分をひもとくランニング計21回）の授業実践を行った。

前者においては大学1・2年生にランニングに対しての印象・認識を書き出してもらった上で、からだほぐし、スロージョギング、からだの使い方・運び方を段階的に学んだもらい、キャンパス内を自由に走ってもらった。結果、大半の学生にもともとあったランニングへの印象・認識が変化した様子がうかがえた。

後者においては中学3年生にランニングに対しての考え方・捉え方と合わせて、「自分をひもとく」という言葉の意味について考えてもらった上で、全体・個人・グループでの実践に区分けされた多様なランニングを体験的に学んでもらった。結果、もともとのランニングに対しての考え方・捉え方が好転したというよりはより具体的・多様的・固有的な視点を獲得していった様子がことに最終発表会からうかがえた。

論文執筆状況に関しては、展望の区分でJournal of Health Psychology Researchに投稿（8月）した論文は不採用、総説の区分でウォーキング研究に投稿（11月）した論文は資料論文として掲載となった。現在、前者を書き換え共生科学に投稿（12月）した論文が査読中である。結果的に2021年度も提出要件を揃えることはできず、博士論文提出は来期に見送る形となった。博士論文題目には「多様な経験を通じた」を加え、「内省」を「内省過程」に変更し、中学校での実践を主とするものとして構成し直すことにした。

(2) 今後の展開

この先は、分析の完了していないインタビュー調査と上記２つの授業実践の全３章分の執筆が主な動きになるが、個々に焦点を当てた調査また実践をいかに論文化していくかに関しては大きな課題として残っている。そこで当事者研究、一人称研究、ライフストーリー研究の中に手がかりがないか探しながら、必要に応じて自身の論文をまとめるための方法論を1つの論文としてまとめることも検討したい。

2021年度は新たに日本共生科学会に入会した。様々な研究領域が複雑に絡み合う自身の研究をむしろ強みに博士論文全体を精緻化していきたいと考えている。

2　本年度の研究活動

(1) 学会活動

日本共生科学会入会

(2) 投稿論文

ウォーキング研究『ウォーキングとランニングにおける自分学について』（資料論文）
共生科学『ランニングにおける内省に関する哲学的試論』（査読中）

三　宅　昂　子

（学籍：静岡大学）

○研究テーマ
　養護診断に関する研究動向を踏まえ、養護診断における養護教諭の意思決定モデルを開発・検討し、養護診断の力量向上を目指した教材を提案する。その際、養護診断の対象を小学生に焦点化するとともに、養護診断の内容についても「心理的な要因が存在する可能性のある状態」に限定する。
○研究ポイント
　養護実践から帰納的な手法により生成された養護診断の意思決定モデルや意思決定に影響を与える視点や経験年数といった養護教諭の特性を踏まえた検討を行う。
○キーワード
　養護診断　意思決定　心理的な要因が存在する可能性のある状態　小学生

1　博士論文の計画

第１部では、養護診断の定義および課題を明らかにする（研究１）とともに、教師や養護教諭の意思決定に関する研究を概観する（研究２）ことで、養護診断の力量向上に意思決定が貢献することを言及する。

第２部では、これまでの養護診断研究では指摘されてこなかった養護診断における養護教諭の意思決定を検討する。その際、技能の速さや正確さといった手際のよさを求められる「緊急性・重症性の高い救急処置」に関する養護診断に対して、養護診断「心理的な要因が存在する可能性のある状態」にあっては、複数の選択肢の中から児童の状態や背景要因をもとに柔軟かつ効果的に対処することが求められるため、意思決定が複雑かつ多様であると推測する。また本研究では、養護教諭の職務の特性を鑑みながら行うことが可能な「心理的な要因が存在する可能性のある状態」に焦点をあて、発達段階も小学校段階に限定する。まず、研究３において小学校に勤務する養護教諭を対象として、半構造化面接を実施、養護診断「心理的な要因が存在する可能性のある状態」における意思決定モデルの開発を行う。次に、研究３で開発した意思決定モデルの信頼性・妥当性を検討するために、量的検討を行い、養護教諭の特性との関連性の検討についても言及する（研究４）。さらに、経験年数を参考に初任、中堅、熟練養護教諭に分け、養護診断「心理的な要因が存在する可能性のある状態」における意思決定について検討する（研究５）。それを踏まえ、経験年数６年から10年の中堅養護教諭に焦点を当て、養護診断「心理的な要因が存在する可能性のある状態」における意思決定の力量向上方法に関して質的検討を行う（研究６）。

第３部では、第１部と第２部から得られた養護診断「心理的な要因が存在する可能性のある状態」（小学生版）における養護教諭の意思決定と養護教諭の特性について、総合的に考察する。

2　本年度の研究活動

研究計画の立案および、研究１（養護診断の定義および課題）に関して論文投稿を行った。

山　元　　薫

（学籍：静岡大学）

○研究テーマ
知的障害特別支援学校における授業力を高めるツールの開発
―授業づくり研修に活用した有効性の検討―
○研究ポイント
① 知的障害教育における基盤的課題を整理していること
② 「特性」「発達」「教科」をつなぐツールを開発していること
③ 知的障害特別支援学校の組織的構造を踏まえた研修での活用を検討していること
○キーワード
知的障害教育、授業力、発達的基盤

1　博士論文の計画

以下、各章立ての進捗状況について報告する。

＜第１章＞問題の所在

第１節知的障害教育の規模の拡大、第２節知的障害教育における教育課程の構造、第３節知的障害特別支援学校における専門性向上に関する組織的課題で構成の予定である。

＜第２章＞本研究の目的と構成

＜第３章＞知的障害教育における「特性」「発達」「教科」をつなぐツールの開発

本ツールの開発の手続きを明示し、知的障害のある児童生徒の国語科、算数科（数学科）のラーニングマップの構造を解説する予定である。

＜第４章＞ラーニングマップを活用した授業づくり研修の学校組織に及ぼす影響

ラーニングマップの活用を通して、学校組織の変容を教員の意識変化から明らかにする。経験年数ごとのラーニングマップの活用とその効果について特徴的な効果について論文を投稿中。

＜第５章＞　総合考察

ラーニングマップ開発の意義と学校組織におけるラーニングマップ活用の可能性について言及する。

2　本年度の研究活動

＜学会活動＞

第59回　日本特殊教育学会　自主シンポジウム企画・司会　オンライン開催
「知的障害教育における国語、算数・数学科の指導Ⅱ」

第59回　日本特殊教育学会　自主シンポジウム企画　オンライン開催
「知的障害特別支援学校における個別の指導計画を生かした還流型電子システムの開発」

＜論文執筆＞

山元薫・笹原雄介（2021）「知的障害教育における「特性」「発達」「教科」をつなぐラーニングマップの開発」、静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）第53号、153－162

山元薫（2022）「「発達段階」「障害特性」「教科内容」を意識した授業づくりの 知的障害特別支援学校の組織に及ぼす影響 ―ラーニングマップを活用した授業づくり研修の効果検証―」について査読中

岡　村　明　夢

（学籍：静岡大学）

1　博士論文の計画

(1) 研究テーマ　日本語母語話者の英語非対格動詞の過剰受動化の誤りに関する研究

(2) 研究の目的

日本語母語話者を含む英語を第二言語として学ぶ学習者が、能動態で用いなければならない非対格動詞を過剰受動化して産出する誤りが観察されている。この現象に関してこれまでの研究では以下の要因が提案されている。

ａ）主語の有生性の影響：主語が無生物の場合、有生物よりも過剰受動化が起こりやすい。

ｂ）連想される動作主の有無：動作主が連想される文脈では、動作主が存在しない文脈よりも過剰受動化が起こりやすい。

ｃ）動詞の完結性の影響：動詞の完結性が強い動詞ほど過剰受動化が起こりやすい。

ｄ）母語における自他交替の有無による影響：母語において自他交替がある動詞（例、起こる－起こす）は自動詞用法のみの動詞(例、到着する)より過剰受動化が起こりやすい。

以上のように、過剰受動化の誤りの要因が提案されているが、これら複数の要因を比較した研究はあまり行われておらず、どの要因が過剰受動化に最も強く影響するのか分かっていない。そこで本研究では、上に挙げた４つの要因を比較した上で、それぞれの要因がどの程度過剰受動化に影響を及ぼすのかを明らかにする。さらに、過剰受動化の誤りの原因を明確にした上で、学校における文法指導や教科書や参考書等での非対格動詞の扱われ方など、学校英語教育が非対格動詞の習得にどのように影響するのかも調査する予定である。

(3) 研究の計画

本研究では以下の４つの実験を行うことで非対格動詞の習得の実態について明らかする。

実験１：主語の有生性と連想される動作主の比較

実験２：主語の有生性と動詞の完結性の比較

実験３：主語の有生性と母語における自他交替の有無の比較

実験４：連想される動作主と母語における自他交替の有無の比較

さらに、学校英語教育の影響について調査するため、学習者や現場の英語教員を対象にアンケート調査を行う予定である。学習者への調査では、これまでの学校で受けてきた授業において、自動詞や受動態に関してどのような指導を受けてきたのかを、教員への調査では、授業において、自動詞や受動態をどのように指導しているのかを質問する。同時に、現在使用されている教科書や参考書においてそれらの文法がどのように扱われているのかも調べる予定である。

2　研究の経過及び今後の展開

現在までのところ、実験１と実験２を実施した。その２つの実験結果をまとめたものを全国誌に論文投稿する予定である。2022年度７月までに全ての実験を実施し、8月以降、学校英語教育が過剰受動化の誤りに与える影響について調査する。

高　根　信　吾

（学籍：静岡大学）

○研究テーマ
　バレーボールにおける学習プログラムの開発とその実践が思考・判断過程に及ぼす学習効果の研究
○研究ポイント
　本研究は、教科開発学の一環として、教科専門であるスポーツ哲学と教科教育である体育科教育を融合・発展させた教科学（創造系教科学）を中心に、バレーボールの本質的な概念的検討（教育内容論）やバレーボールを教材とする体育科の授業に関する考察（教材論）などを行う。
○キーワード
　バレーボール、学習プログラム、思考・判断、シチュエーショントレーニング、状況判断

1　博士論文の計画

研究の目的および構成：本研究は、バレーボールを教材とする体育科の授業改善に寄与することを企図して、開発した学習プログラムの実践が思考・判断過程に及ぼす学習効果の有効性を明らかにすることを目的とする。そのために、第１章では教材としてのバレーボールの本質的概念考察を、第２章では学習プログラム開発による研究授業構想を、第３章ではその研究授業実践とその実践が及ぼす学習効果検証を行う。

第１章　バレーボールの定義および競技特性
第２章　バレーボールの競技特性を体現化する学習プログラム開発
第３章　学習プログラムの実践と学習効果の検証

研究概要：第１章では、バレーボールがどのようなものであるかという視点からバレーボールの競技特性について考察を進め、差異論的アプローチという方法を採用してバレーボールにおける定義を提示した。第２章では、競技特性を体現化する学習プログラム開発を行い、単元計画を考案した。研究授業においては、受講生の思考や判断過程に着目した検証を実施するため、それらを明らかにすることを企図した独自のワークシートを作成し、その際、「不便益」というコンセプトを援用した。第３章では、「学習プログラムを組み込んだ単元計画」を研究授業として実践し、その学習効果を検証した。研究授業の実践は高等学校で行い、授業でテーマとしてきた「方向変換」「返球」「状況判断」「セット」について、受講生の思考の高まりが確認でき、学習プログラムの効果が明らかになった。

2　本年度の研究活動

【研究論文（筆頭４本のみ掲載、他２本）】

① 高根信吾「バレーボールの競技特性に関する研究―差異論的アプローチによる定義化の試み―」『バレーボール研究』23(1), 2021, pp.11-17.
② 高根信吾・塚本博之「授業における練習とゲームの現状把握および両者間にみられる隔たりの指摘―女子大学生の授業におけるバレーボールのゲームでのボール移動に着目して―」『バレーボール研究』23(1), 2021, pp.65-71.
③ 高根信吾・朝比奈祐弥・新保淳「シチュエーショントレーニングを導入したバレーボールの単元計画に関する研究：高等学校における体育実践の事例」『常葉大学経営学部紀要』9(1), 2021, pp.25-33.
④ 高根信吾・新保淳「バレーボールにおける学習プログラムの開発と実践およびその学習効果―状況判断に着目して―」『教科開発学論集』10, 2022, pp.81-94.

古　田　このみ

（学籍：静岡大学）

○研究テーマ
　受動歩行模型教材を用いた中学校から大学を対象とした科学的探究活動の開発
○研究ポイント
　受動歩行模型教材を用いた探究活動による科学的探究の力の育成
○キーワード
　受動歩行、科学的探究、問題解決、探究活動、ものづくり

1　博士論文の計画

近年、科学的探究の力の育成が強く求められている一方で、教員の共通認識が図られていないことや容易に実施可能な教材が不足しているなどの課題が存在している。そこで、科学的探究活動を実施可能な教材として受動歩行模型を取り上げる。受動歩行は、位置エネルギーを運動エネルギーに変換して斜面を移動する歩行であり、歩行ロボットの機構としても研究が進められている。本研究で開発した紙製４足受動歩行模型は紙・はさみ・のりのみで製作が可能であり、脚の長さ、足底の角度、模型の重さ、模型の大きさや材質、歩行斜面の材質や角度等、学習者が変更可能なパラメータが多く存在する。本年度は、受動歩行模型を用いた科学的探究活動・ワークシート・評価項目の開発を行い、開発した活動を大学生・中学生を対象に実施した。大学生を対象とした実践では、開発したワークシートにより課題設定や仮説設定の手順を理解できること、評価基準を示すことで自己調整しながら活動を遂行できること等が明らかになった。また、実践により明らかになった課題点を基に活動・ワークシート・評価基準を修正した。次年度は中学生を対象に実施した探究活動を分析し、科学的探究の力の育成へのつながりを明らかにする。

2　本年度の研究活動

[論文]

１）松永泰弘・古田このみ：紙製４足受動歩行模型を用いた小学生対象の授業実践，日本産業技術教育学会誌，第63巻，第２号，pp.207-214(2021)
２）松永泰弘・古田このみ：たわみ変形により歩行する４足受動歩行模型の材料と大きさに関する研究，日本産業技術教育学会誌，第63巻，第３号，pp.325-333(2021)
３）松永泰弘・古田このみ：紙製３足受動歩行模型教材の開発と授業実践，日本産業技術教育学会誌，第64巻，第１号，pp.1-8(2022)
４）古田このみ・松永泰弘：科学的探究の力の育成に向けた受動歩行模型を用いた活動の開発と実践による検証，日本産業技術教育学会誌（査読中）

[学会発表]

１）古田このみ・松永泰弘：科学的探究における受動歩行模型教材の意義，日本産業技術教育学会第64回全国大会　講演要旨集，p.99(2021)
２）古田このみ・松永泰弘：大学における紙製４足受動歩行模型を用いた科学的探究活動，第39回日本産業技術教育学会東海支部大会　講演論文集，pp.5-8(2020)

（他１件）

小柳津　和　博

（学籍：静岡大学）

○研究テーマ
　重症心身障害児と関わり合いを促すインクルーシブ保育自己評価表の開発
○研究ポイント
　本研究では、インクルーシブ保育における重症心身障害児と他児との関わり合いを促す保育者の専門性を明らかにし、保育者が自身を点検できる自己評価表を開発する。
○キーワード
　インクルーシブ保育・重症心身障害児・関わり合い

1　博士論文の計画

(1) 研究の目的

インクルーシブ保育において、子ども同士の関わり合いを促す保育者の専門性やスキルの標準化研究が進められているところである。しかしながら発達障害児を対象とした研究が中心で、近年増加傾向にある重症心身障害児を含む集団においては、子ども同士の関わり合いを促す具体的な保育者専門性は明らかになっていない。そこで本研究では、重症心身障害児と他児との関わり合いを促す保育者の専門性を明らかにし、保育者が自身を点検できる自己評価表を開発することを目的とする。自己評価表の開発を通して、重症心身障害児を含む集団のインクルーシブ保育を担う保育者の力量向上に寄与したいと考えた。

(2) 研究の進捗状況

本研究は大きく以下の４つの研究から構成する。

研究１：重症心身障害児との関わり合いを促す保育者の専門性の可視化
　　―保育場面からの質的研究―
研究２：重症心身障害児を含む集団の保育を創造する専門性の検討
　　―保育者への質問紙調査研究―
研究３：海外のインクルーシブ教育（保育）における鍵項目の抽出
　　―欧州、北米と本国との違い―
研究４：重症心身障害児との関わり合いを促す保育自己評価項目の抽出

研究１については成果をまとめ、学会誌に投稿済（査読中）である。研究２は現在執筆中であり、2022年度前期に学会誌への投稿を予定している。研究３については、拙稿として２本発表済である。研究４は調査結果の分析を進めており、2022年度中の学会で成果を発表予定である。

2　本年度の研究活動

(1) 論文

小柳津和博（2021）日本型インクルーシブ教育システムにおける課題の可視化―米国の特別教育施策を基にした検討―, 桜花学園大学保育学部研究紀要, 24, 21-33.

(2) 学会発表等

小柳津和博・野々山貴（2021）インクルーシブ保育に必要な保育者の役割に関する研究―子ども同士の関わり合いを促す創造力―, 第73回日本保育学会.

小柳津和博・野々山貴（2021）重症心身障害児と関わり合うインクルーシブ保育を創造する力の考察, 日本特殊教育学会第59回大会.

室　伏　春　樹

（学籍：静岡大学）

○研究テーマ
　プロジェクトマネジメントに基づく技術教育の提案
○研究ポイント
　中学校技術・家庭の技術分野ではプロジェクト法による学習が伝統的に利用されてきたが、プロジェクトの進め方を学ぶことは含まれてこなかった。本研究はプロジェクト法による学習にJIS Q 21500:2018で標準化された「プロジェクトマネジメントの手引き」を利用することで、プロジェクト法による学習を維持しつつ、プロジェクトの進め方の知識を習得させることを目的としている。ものづくりを通してプロジェクトの進め方の知識を習得させることで、技術科の指導内容を包括する問題発見・課題解決能力を育成できることを明らかにする。
○キーワード
　技術科教育、ものづくり学習、プロジェクトマネジメント、PBL (Project Based Learning)

1　博士論文の計画

本論文は次の７章で構成する。１章では持続可能な社会の構築に向けて山積する課題に対して変革を目指す人材に必要な問題解決能力等の資質・能力に関する社会情勢をまとめる。２章では１章で示した社会情勢を踏まえ、プロジェクトマネジメントに基づく技術教育を提案し、本研究の目的や方法および全体構成を示す。３章では中学校の技術分野教科書を分析し、現状の技術科教育におけるプロジェクトマネジメントの要素の検討を行う。４章では提案に基づく教育実践を行い、５章で教育実践において得られたデータから教育効果を考察する。６章では提案の実現にむけた検討と課題を議論し、７章で本研究の成果および教科開発学としての意義をまとめる。

2　本年度の研究活動

(1) 記事

室伏春樹･岡本駿「技術科における早期プロジェクトマネジメント教育に向けた教科書分析」プロジェクトマネジメント学会誌23(4), pp25-28(2022)

(2) 発表

室伏春樹「プロジェクトマネジメントに基づいた技術教育の提案」第12回教科開発学研究会(2021)

室伏春樹「スクラッチを利用した協働制作の実践と効果の検討」一般社団法人日本産業技術教育学会第37回情報分科会（大阪）研究発表会(2022)

菊　本　智　之

（学籍：静岡大学）

○研究テーマ

我が国の伝統的な「かた」学習の原理を活用した中学校保健体育科「剣道」授業の教材開発および学習プログラムの開発

○研究ポイント

現在、中学校の保健体育科において、「武道」領域は1,2年生で必修である。「武道」領域の学びには、我が国の文化と伝統を尊重する態度が育成されることが企図されているが、実際の「剣道」の授業では、他の種目に代替できる内容の教材が多く、教育基本法や学習指導要領が目標とする授業内容を十分満たしているとは言い難い。このような問題意識から、本研究では、我が国の伝統的学習法が色濃くみられる「剣道」の「かた」の教育的意義を検証し、中学校の武道領域の学習に適した教材開発と学習プログラム開発を行っていく。

○キーワード

中学校保健体育科、剣道、かた、伝統的学習法、教育的意義

1　博士論文の計画

本研究の目的は、中学校の保健体育科で必修となっている武道学習の本義について検証し、我が国固有の伝統と文化を内包する「かた」学習の原理を活用した「剣道」授業の教材開発と学習プログラムを開発することである。そのためのプロセスとして、まず、先行研究から、学校教育における武道導入の経緯や武道必修化の背景について整理し、その上で学習者の困難、授業者の困難の背景や原因など武道領域の授業の現状と課題を示すことで本研究の位置づけを明らかにする。次に、これまで多くの授業者が採用してきた防具をつけた教材によって得られる剣道授業の効果とこれまであまり取り上げられてこなかった「かた」を教材とした剣道授業の効果を比較検討し、「かた」学習の原理を活用した剣道授業の有効性について検証していく。これらを実証していくために、中学校の授業に適した「かた」の教材化を行い、学習プログラムを構築していく。そして、実際に中学校における授業実践を通して、教材の有効性について検証し、剣道授業における「かた」学習の原理を活用した教材の有効性を明らかにしていく。これらの知見から、武道学習の本義は、他の体育種目に代替できる体力や運動能力の向上を図るものだけではなく、我が国固有の伝統と文化を学習する教材としての側面を備えることが重要な視点となることを明らかにしていく。ここで得られた教材、方法、効果などは、授業者への授業困難解決の一助となることを目指す。

2　本年度の研究活動

［論文］

菊本智之・新保淳（2021）中学校保健体育科における「剣道」授業の課題と「かた」を使った教材開発の意義．教科開発学論集，10，69-79.（査読有）

［学会発表］

菊本智之（2021）中学校保健体育科「武道」領域における「かた」学習プログラムの開発に関する研究．第54回日本武道学会発表

石　川　芳　恵

（学籍：静岡大学）

○研究テーマ
　日本人学習者の語彙の習得
○研究ポイント
　語彙学習における音声および文脈が果たす役割について実証的な研究を行い、効果的な指導法について考察する。また、高等学校での教師の語彙指導、生徒の語彙学習の実態について調査する。さらに、大学生の語彙知識を調べることで、単語の頻度と難易度の関係を明らかにし、効果的な指導法について提案を行う。
○キーワード
　語彙学習、明示的指導、受容的知識、産出的知識、文脈使用、チャンク学習、単語リスト

1　博士論文の計画

英語学習における語彙の効果的な指導法について実験を行い、その結果について考察する。また、高校生の語彙の学習法及び教師の指導法の実態を調査し、そこから明らかになる課題について考察する。さらに、大学生の語彙知識について調査を行う。以上の調査研究結果を基に、小・中・高等学校において、どのような指導法を用いるべきかを提案し、指導改善に資することを目的とする。そのために、特に次のような要因を考慮する。

(1) 文脈が果たす役割

文章を読んだり聞いたりする中で暗示的に語彙を学習する方法と、文脈から切り離して単独で意図的に学習する方法の効果について調査し、考察する。

(2) 単語の音声が果たす役割

語彙を学習する際、言語情報は必ず音韻化され、情報の処理・記憶システムに保存されるという研究が報告されている。実際に、タスクにおいて音声の利用はどの程度効果的であるかを検証する。

(3) 母語が果たす役割

母語が確立した後にL2を学ぶ学習者の場合、L2習得に際しての母語の仲介の有効性を主張する研究が報告されている。英語の授業で日本語を取り入れて行う語彙学習の効果を考察する。

2　本年度の研究活動

大学生の語彙知識調査を計画し、単語テストを実施した。調査の概要を以下に示す。

(1) 目的：大学生の語彙知識の実態を明らかにし、中学校、高等学校、大学での語彙指導の効果について考察する。また、学習者が意味を容易に習得できる単語とそうでない単語について分析する。以上の結果を踏まえ、中学校、高校、大学での語彙指導について提案を行う。

(2) 研究方法：大学生を対象として「新JACET8000」に含まれている動詞1,043語について、日本語の意味を選択肢の中から選ぶ形式のテストを実施する。大学生が日本語の意味を正しく答えることができた単語と「新JACET8000」単語リストの頻度順を比較し、正答率と頻度との間にどのような関係があるかを調べる。さらに、高頻度であるが難易度の高い単語や低頻度であるが難易度の低い単語があるとすれば、それらにはどのような特徴があるかを明らかにする。

下　田　　実

（学籍：静岡大学）

○研究テーマ
「個」を「場」に導く指導に関する研究
○研究ポイント
本研究は、国語科教育の授業実践力の向上に向け、学習者を学習の「場」に導く指導のありようと構想の視点を見出していくことを目的としている。この目的に迫るための以下の課題を設定し、学習者研究を中核に据えて明らかにしていく。
(1) 教師研究と学習者研究の構造化
(2) 学習者の内面的主体性に応じた指導の解明
(3) 教師と学習者の相互行為を通してことばの学びが生成する過程の解明
(4)「『個』を『場』に導く指導」における実践上の課題と解決の方向。
○キーワード
ことばの学びの生成過程教師研究と学習者研究の構造化内面的主体性

1　博士論文の計画　※章題は仮題。

序章研究の目的と方法

第１章　「個」と「場」の関係に目を向けた学習者研究の方法と枠組み

「場」との関わりに目を向けた学習者研究の構築に向けて、特別な配慮を要する「個」への指導過程を取り上げ、実践主体である当事者が「物語る」研究手法の必要性と枠組みについて考察する。

第２章　「個」の特性と関与形態

劇の単元を取り上げ、「個」の特性に応じた指導のありようや、学習の参加を妨げる要因とその解消に向けた方略について考察する。

第３章　「場」に導く指導における誤謬と是正

「批評文を書く」単元を取り上げ、「個」の特性に応じた指導の誤謬を見出す視点の提案と、その解消ための学習過程について考察する。

第４章　「場」との関わりをうながす指導

短歌の単元を取り上げ、２人の教師の指導過程の相違から、「場」との関わりをうながす指導場面を特定しする。その上で場面における学習者の相互作用とその成立過程について考察する。

結章研究の成果と課題

研究の成果を確認し、学習者を「場」に導くための内的言語活動に目を向けた指導方略を提案し、今後の研究課題を明らかにする。

2　本年度の研究活動

【論文】

１）「対話的関係の構築による授業改善：小学校６年生への国語科乗り入れ授業の可能性」
「比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究」第８巻（印刷中）

箱　﨑　雄　子

（学籍：静岡大学）

○研究テーマ
　小学校英語教育における音声指導
　―明瞭性の向上を目指した超分節音素の指導に関する実証的研究―
○研究ポイント
　小学校英語教育における明瞭性の向上を目指した音声指導の内容および方法を提案する
○キーワード
　小学校英語教育、音声指導、明瞭性、超分節音素、文強勢

1　博士論文の計画

研究の目的は、小学校英語教育における音声指導の方向性について考察を試みることである。昨今、英語はグローバルコミュニケーションのツールとして機能しており、英語のグローバル化、多国籍化、多様化の動きが加速している。英語を取り巻く環境の変化に鑑みて、発音指導において、学習者は必ずしも母語話者のような発音を目指す必要はなく、聞き手に分かりやすい「明瞭性（intelligibility）」の高い発音を目指すべきというのが一般的な見方である。そこで博士論文では、小学校高学年児童を対象に英語の超分節音素の一つである「強勢」に焦点を当てた明示的な音声指導を行い、その指導の有効性と効果を探るとともに、明瞭性の向上を目指した音声指導内容および方法の提案を行う。

2　本年度の研究活動

小学校の音声指導に関して、その重要性と段階に応じた指導の留意点について考えるとともに、明瞭性の向上を目指した語強勢の指導についてまとめた。

書籍

・「第12章 初等英語教育と音声教育―音声指導の重要性と段階に応じた指導の留意点」（共著）『英語音声学・音韻論―理論と実践―』大阪教育図書（pp. 253-276）2022
・「第３章 小学校英語教育における音声指導―Intelligibilityの向上を目指した語強勢の指導―」（単著）『ことばを身につけるとは―言語習得研究から言語教育研究への架け橋―』くろしお出版 2022年12月発行予定

河　合　紳　和

（学籍：静岡大学）

○研究テーマ
　学校音楽教育における指揮学習の必要性と方法に関する研究
○研究ポイント
　本研究では、学校音楽教育における「表現」の学習の一環として行われる合唱や合奏での児童生徒の学びの質を高める上で、指揮（指揮者）の存在が不可欠であること、そして、学習活動がより効果的に行われるためには、児童生徒が基礎的な指揮技能を習得することが必要であることを明らかにする。また、指揮技能の習得が、テンポ感、拍感（拍子感）、リズム感などの音楽表現の諸技能を向上させるとともに、「音楽を形づくっている要素」の知覚とその働きの感受を促し、「鑑賞」の学習においても学びの質を高めることを実証する。
○キーワード
　指揮、指揮学習、指揮技能、体を動かす活動（身体表現活動）、主体的な音楽表現

1　本年度の研究成果

音楽表現を創意工夫する学習過程において、指揮表現を用いたパフォーマンス課題を導入することの有用性を検討するとともに、評価に用いるルーブリックを作成し、生徒のパフォーマンスから資質・能力を解釈する具体的な方法について提案する研究を行った。

高校１年生を対象に、歌唱表現に対する表現意図を指揮で伝えるための方法について考え、実際に合唱を指揮するパフォーマンス課題を実施した。その後、サンプル集団を抽出し、複数の音楽教師が共同で作成した〈ルーブリック（案）〉を用いながら実際に評価を行い、擦り合わせを行いながらモデレーションを繰り返し、信頼性・妥当性のある評価のためのルーブリックを作成した。

音楽の学習では、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」が相互に関わり合いながら育成されていくため、指揮を用いた音楽表現のパフォーマンス評価でも、それらを一体的に評価していく必要がある。本研究で作成したルーブリックや、研究過程での議論が、音楽の学習における生徒の資質・能力の育成状況を的確に評価する上で有効な示唆を与えてくれることが期待できる。

2　本年度の研究活動

(1) 研究論文

河合紳和，澤田育子，村松佑哉，菅 龍之介「指揮を用いた音楽表現のパフォーマンス評価に関する一考察　―ルーブリックの作成とモデレーションを通して―」，令和４年３月，愛知教育大学大学院・静岡大学大学院『教科開発学論集』第10号，pp.57-68

(2) 教育雑誌記事等

河合紳和「１人１台端末の効果的な活用に向けて（音楽）」，令和３年７月，『中等教育資料』令和３年７月号，学事出版，pp.30-33

河合紳和「高等学校学習指導要領の実施に向けて」令和３年７月，季刊『音楽鑑賞教育』Vol.46，音楽鑑賞振興財団，pp.50-53

河合紳和「高等学校芸術科（音楽）における学習指導と学習評価の工夫改善」，令和４年２月，『中等教育資料』令和４年２月号，学事出版，pp.16-21

(3) 動画資料

河合紳和「新学習指導要領の改訂のポイントと学習評価　高等学校芸術科（音楽）」，令和４年２月，独立行政法人教職員支援機構，新学習指導要領編no.69

橋　詰　ゆ　り

（学籍：静岡大学）

○研究テーマ
　GPS情報と心拍数からみる児童の体力差を考慮した体育授業の開発
○研究ポイント
　子供の体力課題に対し、学校の担う役割が大きくなっている一方、教育現場は大きな変革の時を迎えている。体育授業の中で、一定の活動量を確保することは、子供の体力向上および健康の保持増進の視点において、非常に価値がある。本研究では、生まれ月により生じる子供の体力差をふまえ、GPSを用いた位置情報と心拍メモリー計で得られた活動測定を基準とした、体育科教材としての鬼ごっこ導入について検討するとともにGPSを活用した授業の取組についてその可能性について探求し、子供の体力課題と教職員の教材研究の新たな指針および提言を得る。
○キーワード
　GPS情報、心拍数、鬼ごっこ

1　博士論文の計画

1）体力テストからみる生まれ期および運動習慣が及ぼす体力差（教科開発学論集第９号，2021）
　発育発達の著しい小学生期において、生まれ期およびスポーツ活動が同学年内に生じる体力差に及ぼす影響について検討した。静岡県の小学生に対し、体力テストの結果とともに個人基本情報（身長、体重、性別、生年月日）を調査した。その結果、生まれ期およびスポーツ活動が子供の体力差を生じさせる要因となることが示された。

2）１HzGPS活用可能性の検討（教科開発学論集第７号，日本コーチング学会第30回学会大会，2019）
　１HzGPSの測定精度および活用可能性検討のため、子供の総力や方向転換スキルを考慮した動きのシミュレーションを１HzGPSとHRメモリー計を装着した成人で行った。その結果、低学年児童および低体力児童の運動は１HzGPSでも十分補足可能と示された。

3）公立小学校における実態調査（セミナーⅢおよび第25回日本ウォーキング学会，2021）
　小学校４年生および２年生に対し、休み時間や外遊びについてのアンケート調査を行った。また、体育授業を担当する教員を対象に授業で実施する鬼ごっこの種類や目的について聞き取り調査を行い、鬼ごっこの分類をした。

4）鬼ごっこの教材化（日本コーチング学会第33回学会大会，2022）
　小学校２年生を対象に３種類の鬼ごっこ（かわり鬼、増え鬼、宝とり鬼）を実施し、１HzGPSを用いて測定した。得られた結果から、鬼ごっこの種類別の活動特性および体力差について検討した。

2　本年度の研究活動

1）橋詰ゆり，長津恒輝，杉山康司「体育科教材としての鬼ごっこ導入に向けたGPS内蔵心拍数記憶装置を用いた氷鬼ごっこ中における児童の活動様相」，ウォーキング研究No25，（印刷中）.

2）橋詰ゆり，長津恒輝，杉山康司「氷鬼における移動距離および移動軌跡と子供の体力との関係からみる体育科教材としての鬼ごっこの検討」，第25回日本ウォーキング学会，2021.

3）橋詰ゆり，長津恒輝，木下涼雅，杉山康司「１HzGPSを用いた小学校体育授業における鬼ごっこの活動測定」，日本コーチング学会第33回学会大会，2022.

中　山　敬　司

（学籍：静岡大学）

○研究テーマ
　静岡県小笠地域における融和運動家井上良一の行動と思想
○研究ポイント
　井上家所蔵史料の活用
○キーワード
　井上良一　被差別部落　小笠地域　融和運動

1　博士論文の計画

小笠地域に生きた融和運動家井上良一の活動を通して静岡県の部落史を明らかにする。

本論文で研究対象とする静岡県では被差別部落は50地区余り存在し、水平運動が展開されたがそれは大衆的基盤を持ち得なかったため融和運動が一定の影響力を持った。戦後も差別事象はあったわけだが、同和教育や運動が活発でないため水面下での問題になりやすい。そのため静岡県部落史や水平運動史・融和運動史の研究をさらに深める必要がある。井上良一の研究は皆無であり、静岡県部落史を検討する上では必要不可欠な研究課題といえよう。井上の戦前から戦後の活動をみたときに、彼は静岡県の融和運動を牽引したことは明らかである。井上の活動は融和運動、水平運動の枠にあてはまらない地域における部落解放を目指したといえよう。また、教科開発学の視点では井上をどう授業化していくかを検討していきたい。

2　本年度の研究活動

本年度の主な研究活動は、井上良一の部落改善運動を検討することと、昨年度までの井上良一の融和運動及び1930年代以降の被差別部落の満洲移民の実態の研究成果を教科開発学の視点で授業実践化し、その効果を図ることにあった。この２点を述べてみたい。

小笠地域で部落改善運動が展開したのは、1910年代以降であり、改善を推進したのは後に融和運動を牽引する井上良一である。井上の運動が行政に注目され、融和運動に繋がることになる。井上は「部落内の富農」出身でなく、改善自体も行政からの指導でなかった点が注目される。まず、自村の部落改善として1913年の青年会、翌年の婦人会を皮切りに積極的な運動を展開した。中でも注目に値する改善運動が、井上にとって最も困難だった自村における隧道工事建設である。井上が、当該工事建設のために村や県にどのように向き合っていったのか、そして村内内部の反対運動にどのように取り組んだかを探ることで、一地域の被差別部落の「改善」に対しての行政側の考えや、被差別部落民の意識を知ることが可能になる。井上がこの改善運動をもとにその後の融和運動をどのように展開したかを検証することができると考える。以上の井上の活動を井上家の所蔵史料や、県内の部落改善運動史料を検討することで小笠地域が融和運動の中心となる前提の条件となったことを考察した。

次に井上の改善運動や融和運動及び満洲移民の研究を授業実践化したことを述べてみたい。井上のライフヒストリーを意識し、①井上の被差別体験②部落改善運動③満州移民問題を生徒に提示し、思考させ地域の問題だけに終わらずに通史に位置づけることを目的にした。３年次生で近現代までの学習を終えている生徒が対象であり、多くの問いを設定し思考させた。井上のみならず小笠地域の被差別部落で生きた方々の証言も含めながら「差別」がなぜ起きるのかを考えさせた。地域史及び人物史を取り上げていく実践の要はいかに全体史に繋げることで、生徒自ら「歴史」を主体的に叙述させた点は有効であった。

塩　澤　友　樹

（学籍：静岡大学）

○研究テーマ
学校数学における標本データに基づく統計的推論力の育成に関する研究：変動性に着目して
○研究のポイント
平成29年、30年告示学習指導要領では、小中高を通じて統計内容が充実した。しかし、日本の算数・数学カリキュラムの中で、標本調査の位置づけは統計教育先進国に比べ同学年あるいは遅く、課題があるといえる。そこで、本研究では、変動性に着目し、標本データに基づく統計的推論力を捉える枠組みを構築しその実態について明らかにすることで、算数・数学カリキュラム改善及び統計的推論力を促進するための指導への方策を導出する。
○キーワード
算数・数学、カリキュラム、標本調査、統計的推論力、変動性

1　博士論文の計画

本研究では、上記の研究目的を達成するために、次の４つの研究課題を設定し、研究を進める。まず、１つ目として統計教育先進国の国家カリキュラムにおける標本調査の位置づけを文献により調査し、日本の算数・数学カリキュラムにおける標本調査内容の位置づけ方の特徴について明らかにする。次に２つ目として、標本データに基づく統計的推論力について概念規定し、変動性に着目した際の特質とは何かを明確にする。次に３つ目として、日本の児童生徒が現行カリキュラムで、どの程度標本データに基づく統計的推論力を有しているか、枠組みに基づき調査問題を開発・実施し、学年横断的な実態を明らかにする。最後に４つ目として、学年横断的な調査結果を踏まえ、日本の算数・数学カリキュラムにおける標本調査内容の位置づけについて検証するとともに、標本データに基づく統計的推論力を促進するための指導への方策を得る。

今年度は、３つ目の研究課題に取り組んだ。来年度は調査結果を質的な分析に留まらず、量的に分析し、４つ目の研究課題に取り組む予定である。

2　本年度の研究活動

１）塩澤友樹(2021)．標本データに基づく統計的推論力の概念規定とその特質に関する一考察．日本数学教育心理研究学会令和３年度春期研究集会．（口頭発表）
２）塩澤友樹(2021)．標本データに基づく統計的推論力の概念規定とその特定方法の検討―変動性に着目して―．日本科学教育学会第45回年会論文集，513-516．（口頭発表）
３）石橋一昴，塩澤友樹(2021)．学校数学における二次元表理解のための足場設定．日本科学教育学会2021年度第２回研究会研究報告，36(2)，209-214.（口頭発表）
４）塩澤友樹(2021)．標本データに基づく統計的推論力を捉える分析枠組みの構築－SOLO Taxonomyに着目して－．日本科学教育学会2021年度第４回研究会研究報告，36(4)，41-46.（口頭発表）

望　月　　大

（学籍：静岡大学）

○研究テーマ
「豪雨災害から命を守る資質・能力を育む社会科授業の開発」
○研究ポイント
①地理的な見方・考え方を働かせて、②適切な避難プランを作成する資質・能力を身につけ、③リスク認知、自己効力感を高め、避難行動意図を促進する④社会科授業の開発と効果の検証
○キーワード
防災教育　資質・能力　避難行動意図　ハザードマップ　災害情報

1．博士論文の計画

(1) 論文の概要

本研究の目的は、社会科において地理的な見方・考え方を働かせる活動により、豪雨災害からの適切な避難プランを作成する資質･能力を身につけると共に､「リスク認知」と防災に対する「自己効力感」を高め、結果として豪雨災害時の「避難行動意図」を高める防災授業の開発である。

これまで、豪雨災害から命を守る避難行動に必要とされる資質・能力は、議論されていない。本研究では、避難行動に必要な資質・能力を「避難行動判定フロー（内閣府2019)」から特定し、これを活用しながら豪雨災害からの避難に必要とされる資質・能力を提案した。この資質・能力を育成することで、児童生徒が自宅からの適切な避難プランを作成することができるようになることを目的とした授業を開発した。

また､適切な避難プランがあっても､避難行動が実行されないことが知られており､「避難行動意図」を高める必要性が指摘されている。先行研究により「避難行動意図」を高める要因として「リスク認知」「自己効力感」があげられている。本研究では、地理的な見方や考え方を、現実の災害の危機が高まったときに活用して「リスク認知」し、自分や家族の身を守るために資質・能力を活用できる自信を持つことで「自己効力感」を高め、結果として「避難行動意図」を高めるような授業の開発をめざした。実際に開発した授業を実践し、授業前後に行なった調査票調査やテストなどの結果を分析することで授業効果を検証した。

(2) 2022年度の計画

①研究Ⅳ（小学校実践２）の論文化…2021年度に行なった小学校授業実践を論文にまとめ投稿準備中
②研究Ⅲ（中学校実践２）の論文化…2021年度に行なった中学校授業実践を論文にまとめ投稿準備中
③博士論文の執筆…これまでの研究成果をまとめて、博士論文を執筆。

2．2021年度の研究活動

(1) 望月　大「リスク認知と自己効力感を高める授業は豪雨災害時の行動意図を変容させるか？」社会科教育研究 No134 2021 pp.169-181
(2) 望月　大・村越　真「資質・能力の視点から見た防災教育実践研究の動向－東日本大震災以降の防災教育の授業実践論文を中心に」教科開発学論集第10号 2022a pp.1-14
(3) 望月　大・村越　真「豪雨災害時の「避難意図」を高める小学校社会科授業の開発と効果の検証―博物館を活用して―」防災教育学研究 Vol.2 No.2 2022b 掲載決定

Ⅴ．修了生一覧と論文要旨

愛知教育大学

杉野　裕子	プログラミングを活用した図形概念形成についての研究 ―教材コンテンツ開発と授業実践を通して―	H27	課程修了
今井　隆夫	The Effects of Teaching Linguistic Motivation through Image English Grammar	H28	課程修了
原　　郁水	小学生のレジリエンスを高めることを目的とした保健教育プログラムの開発	H28	課程修了
山田　丈美	言語を基盤とした教科等横断的指導による思考力と表現力の相互育成に関する研究	H30	課程修了
伊藤佐奈美	軽度知的障害生徒における自己理解の支援に関する実証的研究	H30	課程修了
内田　智子	幼児期の運動指導が体力・運動能力向上につながる運動プログラムに関する研究	R 1	課程修了
大島　光代	発達障害幼児の音韻意識及び語彙の獲得を目的とした 言語指導プログラム開発に関する研究	R 1	課程修了
名倉　一美	保育における幼児の「集団所属感」	R 2	課程修了
森　　慶恵	健康情報の判断と選択に着目した健康情報リテラシー教育に関する研究	R 2	課程修了
小池　嘉志	算数・数学の問題解決型授業における精緻化を促進する指導法に関する研究	R 2	課程修了
マムチャンセン	カンボジアの生物教育における物理的アプローチによる教材開発 Development of Teaching Materials through Integration of Physical Approach for Biology Education in Cambodia	R 2	課程修了
中川　右也	An Empirical Study of Cognitive Linguistics-Based Instruction for Effective English Phrasal Verb Acquisition 認知言語学的アプローチによる英語句動詞の指導と習得に関する実証研究	R 3	
市川　裕理	英語劇活動における協働対話がランゲージングに与える影響についての研究	R 3	

静岡大学

鈴木　正行	近代民衆思想史研究から教科内容開発への展開： －歴史研究を踏まえた教科開発学の構築をめざして－	H26	課程修了
松島　　充	算数・数学教育における協調的問題解決を実現する学習に関する研究	H26	課程修了
加賀　恵子	中学校家庭科と社会資源との協働によるシティズンシップ育成に関する研究	H27	課程修了
日高　　翼	米国ハイスクールにおける「生物学」の成立過程に関する研究 －ヒトの身体の扱いに焦点を当てて－	H28	課程修了
長倉　　守	中学校社会科世界地誌学習の授業実践力向上に関する教科開発学的研究	H28	課程修了
大矢　隆二	投動作学習プログラムの開発とその学習効果	H29	課程修了
酒井　郷平	中学生のインターネット依存傾向の予防・改善を目的とした 情報モラル教育に関する実践的研究	H29	課程修了
大瀧　綾乃	日本語母語話者による英語の動詞の自他動性の習得と指導の効果検証 －英語能格動詞に焦点をあてて－	H30	課程修了
百瀬容美子	先天全盲児童・生徒の運動イメージ生成指導法と評価に関する研究	R 2	課程修了
荒谷　航平	1821-1930年の米国ハイスクール「物理」の成立過程	R 2	課程修了
満下　健太	教育的意義が教員のリスク認知に及ぼす影響の研究	R 3	課程修了

青木麟太郎	ドライバ操作における手指動作の分析を基にした手先の器用の指導についての研究	Ｒ３	課程修了
一之瀬敦幾	教師の資質能力向上および学校組織の活性化を図る評価システムに関する研究 －教科開発学を視野に入れた教師の資質能力と学校組織の往還－	H27	課程博 H27.3.31単位取得退学
山田　哲也	紙製受動歩行模型教材を使用した小学校設計学習に関する研究	H30	課程博 H30.3.31単位取得退学
田村　知子	日本語の母語説話者における英語の派生接辞の第二言語習得と明示的指導	Ｒ２	課程修了 R3.3.31単位取得退学
西ヶ谷浩史	設計を中心にした授業課程の研究	Ｒ２	課程修了 R3.3.31単位取得退学

（論文博士・様式１０）（Doctoral qualification by publication, Form 10 ）

学 位 論 文 要 旨

Abstract of Doctoral Thesis

氏　名：長 田 洋 一

論文題目:自閉症スペクトラム児の対人関係の向上を目的とした心理劇的アプローチの開発
－小学校の通級指導教室における自立活動の授業実践を通して－

論文要旨：

本研究の目的は、自閉症スペクトラム(ASD)児の対人関係を向上させる新しい指導技法を開発することである。学校現場では使われてこなかった心理劇を小学校の通級指導教室で自立活動の授業に導入することを目指した。その背景を長田が通級指導教室で行った 3 つの事例から述べる。事例 1 では、読み困難な児童に漢字の読み能力の向上を図った。事例 1 からは、教科の補充指導には限界があり、生きる力を養うには自立活動を行う必要があることが示唆された。事例 2 では、海外移住が決まった途端に問題行動を起こした発達障害児に応急処置的に自立活動で交流や異文化理解を行うことによって心理的な安定を図った。事例 2 からは、問題点を根本的に改善するためには年度初めから意図的、計画的にソーシャルスキルトレーニング(SST)を行う必要があることが示唆された。事例 3 では、他害行為をする ASD 児をクラスに適応させるために自立活動で SST を行った。事例 3 からは、個別指導で行った SST がクラスの中で生かされるためには小集団グループで指導する場を設けたり、クラスの中で常時付き添う支援員を配置したりして般化プログラムを組む必要があることが示唆された。また、通級指導教室の担当教師にアンケート調査を実施したところ、SST のやりにくさを指摘する意見が多く出され、「楽しく繰り返し学習できる教材」や「ロールプレイング的な活動」といった新しい指導技法の開発を待ち望む意見もみられた。

以上のことから、般化プログラムを組まなくても改善が期待できるような SST 以外の新しい指導技法として、「心理劇」に着目した。

心理劇は、精神障害者の治療方法として医療現場で用いられていたが、1990 年代から療育や福祉の場で発達障害者に適用され始めた。学校教育現場では、特別支援学校でわずかに試みられたのみである。そこで、本研究では心理劇を小学校の通級指導教室で ASD 児の支援に適した形に変更して実施することにした。

心理劇は一般的に台本や取り決めがない状態で進行していくが、ASD 児は先の見通しが持てないと緊張したり興奮したりする傾向がある。そのため、台本を用意し、筋書きが定められた心理劇を行うことにした。高良・大森ら(1984)は入院中の統合失調症患者に「童話を用いた心理劇」を行い、童話の筋にとらわれることなく自由に演じてよいとした。この

「童話を用いた心理劇」(高良ら, 1984)の手続きや方法を小学生の ASD 児に適した形に変更したものを、「心理劇的アプローチ」と名づけた。心理劇的アプローチは、担当教師 1 名と ASD 児 2 名の 3 名で行い、筋書きを守って演じさせた。その理由は、ASD 児の即興性に対する不安や緊張を避けるためであり、また、道徳の学習につながるように意味のある終わり方をするためでもある。

実施の手順とその意図は以下の通りである。

①**「映像によるフィードバック」**(3 分) : 児童が活躍した前回の映像を見せ、劇への意欲を高める。

②**「役割決めの確認」**(3 分) : 児童の意向を尊重し、なるべく希望に沿うように配役する。

③**「台本の音読」**(5 分) : 劇で言うセリフを自覚させて見通しを持たせるため、児童にも音読させる。

④**「準備」**(4 分) : 劇場面を具体的にイメージするように道具や衣装を児童に装備させる。

⑤**「劇化」**(15 分) : 筋書き通りに演じさせることによって道徳的な学習にもつなげていく。

⑥**「シェアリング」**(10 分) : 口頭発表と感想文によって 2 度の振り返りを行う。

⑦**「次回の予告・片づけ」**(5 分) : 次回の題目と配役を決め、児童に自分が演じる役のイメージを持たせる。

以上の手順で、4 グループ 8 名の ASD 児(A 児～H 児)に、グループごとに 12 回から 22 回の心理劇的アプローチを実施したところ、次の 4 つの成果がみられた。

① 集団活動への参加意欲が高まった。A 児、D 児、F 児が該当
② 仲間意識が芽生えた。 B 児、E 児、H 児が該当
③ こだわりが減少した。 C 児、G 児が該当
④ 思いやりの心が育った。 C 児、D 児、E 児、F 児、G 児、H 児が該当

8 名全員にいずれかの成果がみられたことから、心理劇的アプローチは ASD 児の対人関係の向上に有効であり、通級指導教室で行う小集団指導に適していることが示唆された。

実施に際しては、20 回程度継続することによって内面的な変化が表れ、児童が希望する童話を取り上げることによって劇への意欲が高まり、児童が活躍した場面の映像をフィードバックして見せることによって自分や相手の児童の長所に気づくことが示唆された。

心理劇的アプローチの長所は、児童が主体的、意欲的に取り組むことができ、終わった後に満足感が得られることである。短所は、担当教師が 1 名しかいないため、監督と補助自我を兼務しなければならないことである。短所を克服するため、担当教師は監督としての立ち振る舞いかたや劇を終了するタイミング、児童への効果的な働きかけのしかたなど、事前に周到な準備を積んだ上で授業に臨む必要がある。

なお、今後は心理劇的アプローチが持つ適用可能性や適用の限界について検討していくことを課題とする。具体的には、①対象児童を LD 児や ADHD 児に拡大する、②特別支援学級でも実施する、③劇に参加する児童を増やす、④観客を設定して行う、など多様な条件のもとで心理劇的アプローチを実施していく。

博士論文執筆体験談

（長田　洋一　所属：盛岡大学文学部）

1　博士論文のテーマ

博士課程に入学した頃、私は小学校で通級指導担当教員をしていました。通常の学級に在籍している多くの発達障害児が通級による指導を受けていました。通級指導教室では、人と関わることが苦手な自閉症スペクトラム(ASD)児に対し、どのように通常の学級に馴染ませていくかが大きな課題でした。そこで、ASD 児の対人関係を向上させる新しい指導技法を開発することを研究テーマに設定しました。

2　研究の経過

博士課程(D)に入学してから学位が授与されるまでの足跡をふりかえり、まとめてみます。

2014 年度(D1 年)	研究テーマを決定する。心理劇及び通級指導教室に関する文献を収集し、精読する。
2015 年度(D2 年)	9 月までに実践の計画と具体的な手続きを決め、10 月から 2 つの事例で実践を開始する。一方は成果が見られたので事例 1 としたが、もう一方は失敗に終わる。
2016 年度(D3 年)	事例 2 を実践する。事例 2 の前半部を「教科開発学論集」に投稿し、掲載される。
2017 年度(D4 年)	事例 3 と事例 4 を実践する。盛岡大学に赴任することが 12 月に決まったため、3 月末をもって単位満了退学にする。36 年間勤務してきた小学校の教員も退職する。
2018 年度 (大学教員 1 年目)	大学の授業は初めてであるため、毎日準備に追われる。その合間に事例 1、事例 2 の後半部、事例 3、事例 4 を論文に書き、学会誌や大学の紀要に投稿する。
2019 年度 (大学教員 2 年目)	事例 1 と事例 2(後半部)は「愛知教育大学障害者教育・福祉学研究」に、事例 3 は「臨床発達心理実践研究」に、事例 4 は「盛岡大学紀要」に掲載される。
2020 年度 (大学教員 3 年目)	コロナの影響で遠隔授業が余儀なくされて四苦八苦したことと、公認心理師の資格取得に向けて試験勉強を開始したことにより、研究はいったん中断する。
2021 年度 (大学教員 4 年目)	対面授業が再開され、資格も取得できたことで研究を再開し、博士論文の完成に向けて最終的なまとめに入る。

以上のように、博士課程に入学してから学位が授与されるまでに 8 年という長い年月を要しました。その間に小学校教員から大学教員へ転職し、単位満了退学し、紆余曲折しましたが、研究のことが頭から離れた日は一度もなく、「いつか必ず博士論文を完成させる」と心に強く誓っていました。博士論文に取り組む中で、強い意志を持ち続けることによって願いは必ず叶うということを改めて知りました。

3　今後の発展に向けて

この研究で開発した心理劇的アプローチをさらに多くの ASD 児に実践し、より効果が高まるように改良していきたいです。しかし、今の私には ASD 児に実践する場がありません。そこで、大学で行っている「学校心理学演習」の授業で心理劇的アプローチを紹介し、実際に学生たちに体験させています。学生たちには「小学校の教員になった時、よかったら心理劇的アプローチを実践してみてください」と勧めています。この先、卒業生から心理劇的アプローチを実践したという報告が届く日を楽しみに待っています。

4　謝辞

主指導教員の稲葉先生には単位満了退学後も学位が授与されるまで熱心にご指導やご助言をいただき、深く感謝しております。自分が指導した学生は卒業した後も気に留め、支援していくという大学の教員として大切なことを先生から学ばせていただきました。最後に、事前審査と最終試験の際に貴重なご指導・ご助言をしてくださった審査委員の先生方、および、書類の提出から学位授与までの一切の事務手続きを懇切丁寧に進めてくださった事務の方に厚くお礼を申し上げます。

（課程博士・様式７）（Doctoral degree with coursework，Form 7）

学 位 論 文 要 旨

Summary of doctoral dissertation

専　　攻：　共同教科開発学専攻　創造系教科学

Course：　Cooperative Doctoral Course in Subject Development in the Graduate School of Education

氏　名：　青木麟太郎

Name：　Rintaro AOKI

論文題目：ドライバ操作における手指動作の分析を基にした手先の器用の指導についての研究

Title of dissertation：　Research on Teaching of the Hand Dexterity based on analysis of Finger Motion of Screwdriver Operation

論文要旨：

Summary：

本研究の目的は，手指のモーションキャプチャシステムを用い，中学生を対象に，速く細かく正確な手指の動きでドライバを操作する指導のためには，何が求められるかを明らかにすることである。

研究の目的を達成するために４つの課題を設定した。（本論文第１章）

１つ目の課題は「手先の器用がどう捉えられているか，どうあるべきかを明らかにし，普通教育としての技術教育において，生徒に獲得させたい手先の器用を定義する」と設定した。そのために，辞典や事典，文献にある定義や説明をもとに「器用」の語句へ含まれる一般的な特徴な整理したり，先行研究をもとに，手先の器用と技術科の授業との関係を確認したり，中学校学習指導要領の解説書をもとに技術科教育で習得させたい技能を確認したりした。その結果，普通教育としての技術教育において，生徒に獲得させたい手先の器用は２つあり，道具操作のための巧緻性（「速く」「細かく」「正確な」手指を使った動き」）と，「新しい道具操作技能を習得しやすい資質・能力」と定義し，学習の初期段階ではまず道具操作のための巧緻性を習得させる必要があると考えた。（本論文第２章）

２つ目の課題は「普通教育としての技術教育で生徒に獲得させたい手先の器用や，技術教育で扱われる道具をもとに，手先の器用における手指動作の違いが確認しやすい道具を選定する」と設定した。そのために，「技術教育における技能指導の対象になった道具」「技術・家庭（技術分野）の授業で使用する道具」，「日常生活で使用する道具」，「速く細かく正確な手指を使った動きが求められる道具」，「新しい道具に対応できるよう，操作原理が

他の道具の操作でも転移しそうな道具」といった条件にあう道具を明らかにした。その結果，道具操作のための巧緻性における手指動作の違いが確認しやすい道具として，ドライバを選定した。（本論文第 3 章）

3 つ目の課題は「発達段階と作業条件の違いにより，選定した道具を操作した時，手指動作にどういった違いがあるかを確かめ，指導のための要点を明らかにする」と設定した。ドライバ操作時の手指動作と，ネジに向けて押す力（以後，押圧力）を計測するため，モーションキャプチャシステムシステムと押圧力測定装置を開発した。（本論文第 4, 5, 7 章）発達段階の違いによるドライバ操作時の手指動作の違いを明らかにするため，モーションキャプチャシステムを用い，手指の巧緻性が異なる，大学生群と中学生群がドライバ操作する時の手指動作を計測した。計測の結果，年齢・操作方法によらず，手首の回転が速い学生は，ネジを締めるのが速い傾向にあるとわかった。また，大学生が中学生に比べ，親指の関節各部位の角度が一緒に増減しているとわかった。作業条件の違いによるドライバ操作時の手指動作の違いを明らかにするため，モーションキャプチャシステムと押圧力測定装置を用い，ネジが外れやすい中学生群とネジが外れにくい中学生群がドライバ操作する時の手指動作と押圧力を計測した。計測の結果，ネジの外れやすさによらず，押圧力が小さいほど，最終的な押圧力の合計が小さい傾向にあるとわかった。また，ネジが外れやすい条件では押圧力の合計が小さいほど，締めたネジの長さが長くなり，ネジが外れにくい条件では，押圧力の最大値が大きいほど，締めたネジの長さが長くなる傾向にあるとわかった。そして，握力が大きい中学生がドライバの柄を 5 本の指でしっかり握り，ドライバの軸をもつ手指の動きが小さくなり，ネジを締めきることができる傾向にあるとわかった。（本論文第 6, 8 章）

4 つ目の課題は「分析の結果から，指導のための要点をリスト化し，それを基にした指導とその結果を分析する」と設定した。中学生が獲得したドライバ操作時の手指動作を分析するため，中学生を対象に，ドライバ操作の技能指導を行い，ネジが外れやすい条件でドライバ操作時の手指動作と押圧力を計測した。ドライバ操作の技能指導ではドライバ操作時の手指動作における特徴を含めた指導上の要点を伝え，ドライバ操作の練習を繰り返し行った。ドライバ操作の技能指導では，ドライバ操作の技能指導上の要点を伝えた後にドライバ操作の練習を繰り返すと，練習から 1 週間以上経過しても，ネジを速く締めきるためのドライバ操作技能が定着しやすいことがわかった。また，中学生がネジを速く締めきるためのドライバ操作時の手指の形・動作として，「握力が大きく，指先が長い」，「5 本の指すべてで，道具をしっかりと固定する」，「手指の動きに無駄な動きがない」といった特徴があるとわかった。（本論文第 9, 10 章）

以上より，普通教育としての技術教育で必要な手先の器用として，まず，道具操作時の速く細かく正確な手指の動きを身につけるため，5 本の指すべてでドライバを固定すること，およびドライバ操作時に無駄な動きがなくなるよう最適化されていく学習過程を身につける必要があると考えている。

博士論文の概要

本研究では、普通教育としての技術教育に必要な手先の器用さを明らかにするため、手指のモーションキャプチャシステムを用い、中学生がドライバ操作する手指の動きを分析し、分析した結果を基にドライバ操作の指導を行い、指導結果を基に手先の器用さを考察しました。手指のモーションキャプチャシステムは私が修士論文の研究で開発し、関節各部位の位置座標を保存できます。本研究では、ドライバ操作時の手指動作に焦点を絞りましたが、今後、様々な手指作業の特徴を分析・可視化していきたいと考えています。

研究生活と謝辞

この研究生活で一番の課題は、答えのない問題に向き合う習慣化です。そして、そんな研究に向き合う自分の無知さが、何よりもつらいと感じる日々でした。

研究に向き合う時間は、自身の視野の狭さや、優れた先人の業績に思い知らされます。データをまとめて、足りない部分に気付き、無知な自分と向き合う日々です。なぜ、わざわざ無知な自分と向き合うことを選んでしまったのでしょうか。そんな 3 年間でした。そのため、残念ながら、私の博士論文は不十分な点が多いと感じています。

しかし、それでも今、執筆体験談を書くことができているのは、多くのご助言やご指導を頂いた諸先生方と、無知な自分だとしても、また研究を進めようと思わせてくれる先輩後輩の学生のみなさま、および両親のおかげだと考えています。

紅林先生には主指導教員として教育学部 3 年時から修士課程、博士課程の計 7 年間にわたり、研究のいろはを一から丁寧にご指導いただきました。新保先生と飯島先生には副指導教員として博士課程 3 年間、博士論文の構想・内容を幅広い視点からご助言いただきました。また村上先生をはじめ、共同大学院の先生方にはそれぞれの専門的知見からご助言いただきました。皆さまのご指導・助言を頂き、答えのない問題に向き合う方法・習慣を養うことができました。深く感謝いたします。

共同大学院の院生のみなさまは研究以外の面でも私の先を走って（生きて）いられるので、私にとって学ぶべきことが多く、よい刺激となりました。紅林研究室の学部生や院生のみなさまとは毎週研究の進捗状況を報告し、学生たちが少しでも研究を進めようとする姿に力をもらいました。そんな毎日を積み重ねたからこそ、自分と向き合う習慣ができ、博士論文を少しずつ作成することができました。皆さんに出会えたおかげです。本当にありがとうございました。

執筆体験談を書いている今も、私は自分の無知さと向き合う日々です。しかし、この研究生活があったからこそ、明日は今日よりきっといい研究ができると信じることができます。今もまだまだ学ぶことが多いので、私は頑張ることができています。

（課程博士・様式７）（Doctoral degree with coursework，Form 7）

学 位 論 文 要 旨

Summary of doctoral dissertation

専　　攻：　共同教科開発学専攻　　氏　名：　市川　裕理

論文題目：英語劇活動における協働対話がランゲージングに与える影響についての研究

論文要旨：

本研究の目的は、英語授業の協働学習における話し合いについて、活動を質的に分析し、どのように知識構築がなされるのかを、社会文化理論に基づいて明らかにすることである。本研究の意義は、英語をどのように教えるかではなく、どのように学んでいるかということについて知見を得ることであり、英語授業における学びのあり方を提案することである。

英語授業において、ペアワークやグループワークが取り入れられることはあるが、その場合、研究や実践の多くはコミュニケーションの道具としての言語能力がどのように向上するかということに注目してきた。社会文化理論は言語をコミュニケーションの道具としてだけではなく、思考を媒介する道具としてとらえている。そのため、言語について何を学んだかという結果でなはなく、どのように学んでいるかというプロセスに注目する。そして、そのプロセスを学びとしてとらえるのである。英語授業における話し合いによって、学習者が何を話し合い、どのように学び合っているのかということを明らかにできれば、教室という集団を基本とする場において、仲間で学ぶことの意義が明確になる。これは、持続可能な開発のための教育（ESD）や 21 世紀型スキルといった新しい教育概念における協働を軸とした学びのあり方に通じるものである。本論文では、協働の中身を分析するにあたって、ランゲージング理論に基づいて、英語授業における英語劇作成のための話し合いに焦点を当て、分析を行った。

まず第 1 章では本論文の目的と背景について述べた。

第 2 章では社会文化理論の外国語教育への影響について言及し、ランゲージングに関する先行研究を行った。ランゲージングは、社会文化理論における言語と発達の概念を、第二言語習得の文脈に応用した理論である。ここではランゲージング研究の変遷について述べ、言語学習において結果ではなくどのように学んでいるかというプロセスに研究が開かれたことを示した。しかし、ランゲージングの正確性を測定することは、高校レベルの学習者を対象とした場合において効果は期待できないのではないかと問題提起し、本研究の焦点を絞った。

第 3 章では本研究における分析対象となった英語劇活動について、筆者がどのように授業実践を行ったかについて記述した。教科書の内容に基づいてオリジナル原稿を作成する

という難易度の高いタスクにもかかわらず、意欲的に取り組み完成度が高くなるのは、学習者がグループで行う話し合いが鍵になっているのではないかと筆者は考えるに至った。

そこで第 4 章では筆者が 2018 年度に行った英語劇活動について、どのような活動を行っているのか、また、活動をどのようにとらえているかということについて、学習者自身の評価を分析した。得られた文字データについて KH Coder3 を用いてテキストマイニングを行い、学習者が対話によって伝えるための英語表現について理解を深めていることを明らかにした。

第 5 章では、2018 年度に実施した実践研究で得られた結果を検証するために、活動場面における談話分析を行った。ここでは学習者が実際にどのような話し合いを行い、協働で知識構築を行っているかを明らかにした。分析対象としたデータは、2019 年度に実施した英語劇活動における協働対話である。原稿についての対話を分析単位（エピソード）として取り出し、主題の特定を行った。主題とエピソードの質的内容との関連を分析し、英語の知識だけではなく母語の知識を活用し、協働で解釈を行うような発言が見られるエピソードでは知識構築がなされる傾向にあることを明らかにした。このことは、参照する知識の不足から高校レベルの学習者にとっては、正確性を模索するランゲージングは適していないのではないかという仮説を裏付けた。また、同時に英語劇活動における原稿を修正する話し合いにおいては、母語を思考を深める手段として用いて、伝えるための英語表現について理解を深めていることが示された。ランゲージングでは言語化によって自己モニタリングが働き、深い理解がなされると考える。本研究では正確性ではなく英語劇における表現の適切性を模索する場合に、学習者同士のモニタリング機能が促され、協働的足場かけがなされるととらえた。表現の適切性とは英語劇活動における文脈に沿っているかどうかということである。筆者はこの文脈上の適切さを話し合うことが、英語劇活動におけるランゲージングの最大の特徴であり、知識構築に影響を及ぼしていると考えた。

これに従い第 6 章では、エピソードにおける文脈考慮についての分析を行い、その結果について統計的処理を行った。その結果、エピソードにおける知識構築には文脈を考慮することと特定の主題のエピソードであるということが、エピソードにおける問題解決という要因と比較して有意に影響を及ぼしていることが明らかになった。このことからも、英語劇活動においては、文脈を考慮することが自己モニタリングを働かせ、深い理解へとつながっていることが示された。

最後に第 7 章では、本研究から得られた教育的示唆について述べ、研究の限界と今後の方向性や課題について述べた。

博士論文執筆体験談

（市川　裕理　学籍：愛知教育大学）

1　博士論文のテーマ

英語劇活動における協働対話がランゲージングに与える影響についての研究

2　研究の目的

この研究は英語劇活動における協働対話を通じて、学習者がより伝わる英語表現についての理解をどのように得ているのかということについて、ランゲージングを用いて実証することを目的としました。

3　研究活動と博論執筆

愛知県立高校教員から高専教員へと転職後、自分がこれまで実践してきた英語授業におけるグループワークについて、英語教育という観点から意義を見出すことが博士課程を志望した動機でした。研究活動で一番苦労したことは、実践を研究という土俵に引っ張り上げる理論と手法を探り当てることでした。グループワークの効果を測定するのではなく、そこで何が起こっているのか、学習者にとってどんな意味があるのかということを、どのような手法で明らかにするのか。無明長夜のように感じました。

ランゲージングにたどり着き、このあたりがメインになりそうですねと指導教員の稲葉先生から言われたとき、やっと光明が見えたという思いと、その場合対話分析が必須となるため、そこまでやれるだろうかという思いを抱きました。

最後と決めた一年は、“ここでやらないと一生できない”と書いた紙をPCに貼り付けて、うなぎ登り調子の学内業務と博論執筆に向かっていました。締切直前の真夜中にメールで“頑張れ！”と稲葉先生の檄が飛んできたときには、驚きと共に眠気が吹っ飛びました。最後の最後まで惜しみなくいただいた、ご指導と励ましのおかげで博士論文の提出にたどり着くことができました。本当にありがとうございました。

4　今後の抱負

教科開発学の講義で先生方は、「博士の取得は通過点」とおっしゃっていました。その時には博士はゴールとしか思えませんでしたが、今実感しています。研究活動は終わりがなく、次から次へと課題や疑問が出てきます。現在の研究テーマはAI時代における英語教育のあり方です。Google 翻訳などで一定の正確性を担保できるようになった今、英語学習は何を目指すべきなのか。この問いは、博士論文を執筆する中で生まれてきたものです。一足飛びにたどり着ける道筋のない大きな問いですが、教員として研究者として、探求していきたいと思います。

（課程博士・様式７）（Doctoral degree with coursework，Form 7）

学 位 論 文 要 旨

Summary of doctoral dissertation

専　　攻：教科開発学　　氏　名：中川　右也
Course：Subject Development　　Name：NAKAGAWA, Yuya

論文題目：認知言語学的アプローチによる英語句動詞の指導と習得に関する実証研究
Title of dissertation：An Empirical Study of Cognitive Linguistics-Based Instruction for Effective English Phrasal Verb Acquisition

論文要旨：

句動詞の習得に関する本研究の目的は，認知言語学の成果に基づく絵解きの有効性を，4 つの実験を通して検証し，その証明を示すことである．

句動詞習得が重要であると考える理由には 3 つある．1 つ目は，難しい表現であっても，既に知っている基本を使って表現できる点である. 自分の言いたいことをどのように英語で表すのかわからないために英語によるコミュニケーションが苦手といった場合には, 句動詞を用いることによって言い表すことができる．2 つ目として，経済的であるということである．限られた動詞と不変化詞で組み合わされた句動詞は，動詞の倍の機能をする．3 つ目として，句動詞が英語母語話者にとって頻繁に用いられる点である．

しかしながら，外国語として英語を学ぶ学習者にとっては，句動詞を習得することは思いのほか難しいと言われている．その理由は，所謂ゲシュタルトによって，句動詞の意味がなぜそのようになるのかが理解できず，その結果，覚えることを困難にさせているのである．認知言語学は言語の有縁性という観点から，句動詞のそのような謎を明らかにしてくれることから，その知見に基づいた静止画や動画の教材を使った指導には，有効性があると考えられる．

認知言語学的アプローチを活用した句動詞学習の長所として, ①言語の有縁性に焦点をあてることによって記憶が促進され，②類義語表現との差異を明らかにすることができ，③文法・語法の理解が深められる点が挙げられる．本研究は，上記で述べた句動詞習得における認知言語学的アプローチの教育現場での有用性を示す．本博士論文は次に示す通り 7 章から成り立っている．

1 章では，本研究の概要について述べる．その後，本研究が基盤とした教科開発学の概念を示す．続いて 2 章では，認知言語学の概要とその知見を援用したこれまでの先行研究を概観し，また，句動詞とその学習に関する先行研究をまとめ，考察する．さらに，本研究で用いた方法論や教材を使った効果に関して, その有用性を裏付ける心理学や学習科学など様々な分野における科学的知見を示す.

3 章では，本研究が提案する認知言語学の知見に基づいた教材の活用が，句動詞学習において効果的であるかどうかを検証する. 認知言語学に基づいて句動詞学習をしたグループと日頃の方法で句動詞を学習したグループに分けて検証したところ, 前者のグループに属する参加者の方が事前テストにおいて有意に得点が高いことがわかり, 認知言語学の知見に基づいた句動詞教材の有用性が証明された.

4 章と 5 章では，教えやすさという teachability と学びやすさという learnability の観点から，認知言語学的アプローチによる句動詞習得の効果の検証をそれぞれ行う．教材を開発する際，教師にとって教えやすいか，また学習者にとっては学びやすいかといった観点が必要である．検証の結果，teachability と learnability の担保が確認された．learnability に関して，提案した認知言語学的アプローチを使って句動詞を学習した際，事後テストから事前テストを引いた得点差は，英語力やそれまでの句動詞の習得した量に関係なく効果的であったことが確認された．さらに，認知言語学的アプローチによる句動詞学習は，学力層による差を小さくさせる効果もあることがわかった．

6 章では，句動詞習得におけるアクティブラーニング型授業の 1 つとして，ジグソー法を用いた実践例を提案する．近年，日本の教育では，アクティブラーニングが推奨されているが，語彙習得では未だに教師主導が主に行われている．教育現場に本研究の成果が取り入れることができるよう，句動詞学習におけるアクティブラーニング型授業の 1 つの方法とその効果を示す．

本博士論文は，これまでに述べた 4 つの実証研究を通して，提案された句動詞の学習法の有効性を調査したものである．第 7 章では，本研究で得られた様々な結果をまとめ，今後の課題を記した上で，句動詞学習法に関する今後の研究の方向付けを行う．

Summary :

The purpose of the present study concerning the acquisition of English phrasal verbs was to examine and demonstrate, through four empirical experiments, the effectiveness of cognitive linguistics-based instruction with pictorial elucidations, its teachability, learnability, and adaptability to active learning-based instruction.

The reasons for focusing on phrasal verbs are threefold. First, difficult expressions can be articulated using a basic lexicon that language users are likely to have already acquired. Therefore, if learners have trouble communicating in English because they do not know how to express what they would like to communicate in English, phrasal verbs can bridge gaps in knowledge and assist speakers in expressing themselves. The second reason is that English phrasal verbs are economical. When combined with a limited number of basic verbs and particles, phrasal verbs function much better than verbs alone. The third reason is that phrasal verbs are frequently used in daily conversation by native speakers of English.

If the objective is to develop students' basic communication abilities in English, phrasal verb learning should be recognized as crucial for English language education in Japan. However, for learners of English as a foreign language, phrasal verbs can be challenging to master. The so-called Gestalt makes it difficult to understand why phrasal verbs mean what they do, and, as a result, the learning process is time consuming and laborious. As cognitive linguistics can reveal mysteries, such as those associated with phrasal verbs, from the perspective of linguistic motivation, a concept that conflicts with arbitrariness, instruction utilizing still or moving images based on its insights could be effective.

The advantages of phrasal verb learning via this cognitive linguistics-based approach are as follows: (1) a focus on linguistic motivation facilitates memory, (2) it clarifies differences in synonymous expressions, and (3) it deepens understanding of grammar and usage. The present research was an empirical study exploring the usefulness of cognitive linguistics-based approaches to phrasal verb learning, as described above, in Japanese educational settings. This doctoral dissertation consists of seven chapters, as outlined below.

Chapter 1 presents an overview of the current study. Then, key concepts of Subject Development Studies, in which the current study was grounded, are introduced.

In Chapter 2, previous research on phrasal verbs and their learning as well as the theoretical background of cognitive linguistics and applied cognitive linguistics is summarized and discussed. In addition, scientific evidence from a variety of fields, such as psychology and learning science, is reviewed to support the usefulness of the methodologies and materials employed in the present study.

Chapter 3 examines whether the application of materials based on the cognitive linguistics findings proposed in the present study was effective for phrasal verb learning or not. After dividing the participants into two groups, one of which learned phrasal verbs on the basis of cognitive linguistics and the other on the basis of conventional approaches, it was determined that participants in the former group scored significantly higher on the post-test, proving the efficacy of the phrasal verb materials derived from cognitive linguistics insights.

Chapters 4 and 5 verify the effectiveness of the cognitive linguistics approach for phrasal verb instruction in terms of teachability and learnability, respectively. When developing materials to put this theory into practice in educational settings, it is imperative to consider whether they are both easy for teachers to teach and for learners to learn. In contributing research findings to the field of education, it is considered more appropriate to focus on the findings of theoretical linguistics to enhance teachers' instruction and cognitive abilities to enable learners to understand the explanations. The results of the verification confirmed that teachability and learnability were guaranteed elements when the method was applied. With respect to learnability, the gain scores (post-test minus pre-test) for phrasal verbs learned in the proposed cognitive linguistic approach were found to be high, regardless of English proficiency or the number of phrasal verbs learned before the experiment. Furthermore, the cognitive linguistic approach to phrasal verb learning was observed to be beneficial in reducing the differences among academic groups.

In Chapter 6, a practical model for active learning-based instruction for phrasal verb acquisition utilizing the jigsaw method is proposed. In recent years, although active learning has been recommended in education in Japan, teacher-centered instruction remains the main method of vocabulary teaching. To enable the results of the present study to be incorporated into educational settings, one method of active learning-based instruction for phrasal verb learning and its effects is demonstrated.

This doctoral dissertation investigated the effectiveness of the proposed phrasal verb learning methods through four empirical studies, as previously described. In Chapter 7, a summary of the multitude of results obtained in the present study is presented, the limitations are enumerated, and recommended directions for future research on phrasal verb learning methods are indicated.

博士論文執筆体験談

（中川　右也　学籍：愛知教育大学）

1　博士論文テーマ

博士論文のテーマとしては、かなり短い期間であっても解明できる限定的なものにしました。さらに、教科開発学的視点が必要であったことから、教育現場に還元できる内容に設定しました。

2　博士論文の執筆

博士論文を執筆する過程で、多くの講義を履修する機会がありました。私は修士の学位の１つが英語教育学でしたが、教育学部出身ではなかったために、様々な教科教育を学ぶことにより、教科開発学とは何か？を根本から考え、他教科の教育法から新たな視点を得られる環境で学ぶことができたことは有益でした。１人の学習者として、それらを互いに無関係なものにするのか、または関係あるものとする、つまり、関係づけるのかは学びの主体である学習者であることも実感でき、自身の教育観にも影響を与えました。

博士論文は基本的に学会での口頭発表を通して論文などで出版したものを章にして組み立てたものでした。執筆が計画通りに進まない時もありました。その時には、少しテーマと離れたことに取り組んで意図的に気持ちを落ち着かせるようにしました。また、学会などに出かけてエネルギーを補充し、さらに、研究仲間と話をすることで自然と頭の中を整理できるようにしました。

私の場合、発表の際や査読コメントで研究内容に関する指摘や批判を受けた時は、悩み苦しみました。しかし、研究において大切な科学的正当性を担保するには、そうした批判は必要不可欠です。私は、批判された点を修正すれば良いと肯定的に考えるようにしました。独力で解決できない箇所については、他の人の助言や先行研究の力を借り、それでも難しい場合には、自らの研究の限界と認めて、次への課題としました。チョムスキーという言語学者は『On the Generative Enterprise』という書籍の中で、統語論の自律性という自身が提唱したテーゼが、これまで反証に十分耐えてきたという趣旨を述べています。この記述を目にした時、どんな大家であっても、批判を受けることを前提に研究しているということを知り、気持ちも楽になったことを覚えています。博士課程の最後には、博士論文最終口頭試験があります。口頭試験を英語では Oral Defence と言います。批判があることが前提であるために Defence という言葉が使われているのでしょう。私にとって、セミナーⅢで発表をした際に頂戴した指摘や批判は、後の Defence に備えるための大きなヒントになりました。

3　謝辞

全ての先生方のご尽力によって博士号を取得できたことを心から感謝いたします。主指導教員である稲葉みどり先生は、一見、自由に放牧されているものの、しっかりと囲いを設けて見守りながらも、適切に博士論文を完成させられるように導いていただきました。あえて批判的な立場から口頭試験の練習をしていただいた日のことを昨日のことのように覚えています。怠惰な私の性格を知りつつ、さり気なく餌をぶら下げて研究に取り組むように心配りをしていただきました審査員の白畑知彦先生に御礼申し上げます。審査委員の野地恒有先生には、自身の研究の位置づけや独自性の重要性について、中野真志先生には何度も講義を受講させていただき、デューイ研究を通して文献学の基礎を学ばせていただきました。また、審査委員の竹川慎哉先生からは、教育方法学の視点から貴重なご指摘を頂き、今後の研究への示唆を与えていただきました。村越真先生は統計学について、村山功先生は教育工学について、ご多忙にもかかわらず、講義以外でも相談にのっていただきました。講義だけでなく、すれ違った折りの立ち話の中、「中川さんが博士号を取らなかったら誰が取るんだ」と伊藤貴啓先生から力強いお言葉をかけていただいたことは、研究の支えになりました。紙幅の制限により、お一人お一人の名前を挙げることはできませんでしたが、先生方全員の懇篤なご指導に深甚な感謝の意を示します。

Ⅵ. 教科開発学研究会

プログラム

全体進行：竹川慎哉（愛知教育大学）

10：30　開会の挨拶　白畑知彦（静岡大学）

研究発表セッション

※○は口頭発表者　発表 15 分　質疑応答 5 分

10：40~11：40　座長：飯島康之（愛知教育大学）

1. ○室伏春樹（静岡大学）　紅林秀治（静岡大学）
   プロジェクトマネジメントに基づいた技術教育の提案
2. ○西ヶ谷浩史（焼津市立大村中学校）　紅林秀治（静岡大学）
   エンジニアリングデザイン教育における要素の選択・組み合わせの学習の必要性
3. ○池谷慎吾(静岡大学)　紅林 秀治(静岡大学)
   ワイヤレス給電システムを利用した、水中掃除ロボット教材の開発

休憩

13：00～14：00　座長：坂口京子（静岡大学）

4. ○岡村明夢(静岡大学籍)　白畑知彦(静岡大学)
   日本語母語話者の英語非対格動詞の過剰受動化現象
5. ○長田洋一（盛岡大学）　稲葉みどり（愛知教育大学）
   発達障害児への通級による指導―知的能力差を配慮した実践
6. ○大島光代（名古屋学芸大学）　稲葉みどり（愛知教育大学）
   言語指導プログラムを活用した音韻指導―ADHD とディスレクシアをあわせもつ幼児の事例―

14:10~15:10　講演

「非医学系研究における倫理審査の現状と課題」

講演者　静岡大学学術院人文社会科学領域

静岡大学サステナビリティセンター　　堂囿　俊彦　先生

堂囿先生　ご略歴：

学部、大学院と、哲学・倫理学の研究に従事する。2004 に、東京大学大学院医学系研究科に、科学技術振興調整費の支援を受けて設置された「生命・医療倫理人材養成ユニット」に特任助教として着任し、科学や医療をめぐる問題を、科学者や医療従事者とともに考える。2008 年静岡大学准教授、2018 年教授、2020 年サステナビリティセンター長。2015 年より、静岡大学人を対象とした研究倫理委員会副委員長、2017 年から委員長。この間、行政指針に対応した学内の審査体制作りに尽力する。この他、複数の組織において、治験審査委員会や倫理委員会委員を務める。

15:15~15:45　博士論文報告セッション

満下健太（静岡大学籍）「教育的意義が教員のリスク認知に及ぼす影響の研究」

閉会の言葉　　飯島康之（愛知教育大学）

Ⅶ. 教員の教育・研究活動

石　川　　恭

所　　属　愛知教育大学教育学部保健体育講座
職位・学位　教授　博士（教育学）
博士課程分野　教育環境学
担当科目　教科開発学原論、遊び文化環境論、教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ
研究テーマ　遊び文化論、遊びと学び、ホイジンガの思想研究

１．これまでの教育研究について

ヨハン・ホイジンガの遊び文化論を現代社会との関りから、人生100年時代をよりよく生きるために、遊びと学びの関係について研究してきました。特に、今日の遊びが、子どもに及ぼす影響について焦点を当てて取り組んできました。研究の中で一貫している視点は、社会生活における遊びの重要性です。近代化が進むにつれて、社会生活における遊びの形態や内容はどのように変化したのか、それが人々にどのような影響を与えているのかといった観点です。そして、遊びこそが学びであることを主張してきました。

教育面では、授業を通して、人生100年時代の自由時間の過ごし方について、遊びと文化、自由時間と生きがいといった点から講義・演習を行ってきました。自由時間が増えている中で、どのような遊びが人々の生きがいと学びにつながるかを説いています。

２．博士課程における教育研究について

博士課程においては、教育環境学と教科学を統合した教科開発学の視点から研究を行っています。具体的には、遊びをキーワードに、遊びと文化の融合や、現代社会における子どもの問題を、遊びによって解決する可能性を探ること、教科への伝承遊びの導入とその効果についてなど、理論的に構築し、その後、調査などを行い立証していく予定です。

３．担当講義について

【教科開発学原論】

教育環境学と教科学を統合した学問としての背景と目的について理解を深めます。教育環境学は、学校環境だけでなく、地域・社会・文化を含んだ幅広い視点からの教育環境の発展を目指すものです。本講義では、子どもの遊びという視点から社会化との関わりについて説明しています。その上で、教科学への応用がどのような観点で可能かについて議論を行います。また、遊びと文化を機軸にして、特に、創造系と人文社会系の教科の現状と課題を捉えなおし、新たな教科観の開発･創造への可能性について検討します。

【遊び文化環境論研究】

現代社会における子どもの遊びは、過去と比べてかなり変化しています。この状況は、遊びそのものの変化に留まらず、様々な影響を子どもに与えています。講義では、現代に生きる子どもの問題を遊びとの関わりから考察します。また、遊びによって身につく社会を生き抜く力が、教育とどのような関わりをもつかについて、議論を交わします。その上で、遊びがもつ可能性について、グローバルな視点から文化の創造との関わりを考えます。

４．主要研究業績

１）教科学を創る，第１集，愛知教育大学出版会，2014，分担執筆。
２）教科学を創る，第２集，愛知教育大学出版会，2016，分担執筆。
３）子どもの問題に対する遊びの効果を取り入れた表現運動，教科開発学論集第１号，愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科，2013.3。
４）教科開発学を創る，第２集，愛知教育大学出版会，2018，分担執筆。
５）教科開発学を創る，第３集，愛知教育大学出版会，2021，分担執筆。

５．主な社会的活動

１）安城市スポーツ指導者養成講習会講師（2021）
２）安城市スポーツ推進審議会委員（2021）
３）豊明市スポーツ推進審議会会長（2021）

野　平　慎　二

所　　属　愛知教育大学教育学部学校教育講座
職位・学位　教授　博士（教育学）
博士課程分野　教育環境学
担当科目　教科開発学原論、教育哲学・思想論研究、
　　教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ
研究テーマ　ドイツ教育哲学・教育思想史の研究、物語論的人間形成論、美的人間形成論

１．これまでの教育研究について

ドイツ教育哲学・教育思想史を主たるフィールドとしつつ、異質な他者といかに共存できるのか／共存できる主体を形成できるのか、をテーマとして研究を進めてきました。具体的には、人間形成における「美的なもの／崇高なもの」の意義に関する教育思想史的研究、コミュニケーション倫理学（J.ハーバーマス）に依拠した教育の公共性論や道徳教育論などの研究を行ってきました。

２．博士課程における教育研究について

物語論の知見に依拠しながら、伝統的な人間形成論（Bildungstheorie）と現代の経験的な人間形成研究（Bildungsforschung）をどのように媒介できるのかについて探究しています。特に、アイデンティティ形成や能力形成に還元されない人間形成の様相をいかに描き出せるか、主体と環境との相互作用としての人間形成の過程において、他者や共同体、構想力はどのような機能を果たすのかについて理論的、経験的に検討しています。

３．担当講義について

【教科開発学原論】

教育哲学・教育思想史の観点から、教科指導と教科開発の考え方、ならびに人間形成にとって環境がもつ意義について検討します。教科を介した指導や、主体と環境との相互作用としての人間形成という考え方が成立した思想史的背景について考察し、同時に学校教育を取り巻く現代的な諸条件も勘案しながら、現代における人間形成のあり方をどのように描き出すことができるのかを探ります。

【教育哲学・思想論研究】

主としてドイツ教育哲学・教育思想史に依拠しながら、教育に対する現代的な考え方の歴史的、社会的な制約を問い直し、教育をめぐる倫理的に公正で公共的な語り方を探究することを目指します。特に近代の二元論的な世界観とそこから導かれる子どもに対する対象操作としての教育観を批判的に捉え直した上で、他者論や物語論の知見を踏まえながら、対象操作的でも弁証法的でもない人間形成の描き方を探ります。

４．主要な研究業績

１）野平慎二（2007）『ハーバーマスと教育』世織書房。
２）Shinji NOBIRA (2016) : Probleme der politischen Bildung im Zeitalter unübersichtlicher Wissenschaft und Technik. In : Gutjahr-Löser, P. / Schulz, D. (Hrsg.) : Der Egoismus unserer Tage. (Theodor Litt Jahr- buch 2016), Leipzig (Leipziger Universitätsverlag) , S.123-134.
３）野平慎二（2020）「言語と人間形成－人間形成論的に方向づけられたビオグラフィ研究の視角から」、日本ディルタイ協会『ディルタイ研究』31、21～38頁。
４）野平慎二（2021）「経験的な語りと人間形成論をつなぐ－ビオグラフィ・インタビューの意味形象の再構成を通した反省的－規範的人間形成論の探究」、『愛知教育大学研究報告 教育科学編』70（印刷中）。

５．主要な社会活動業績

１）教育哲学会 理事（2016.9.～現在）機関誌編集委員会委員長（2021.9.～現在）
２）教育思想史学会 理事（2009.10.～現在）
３）一般社団法人 NGOインドネシア教育振興会 理事（2002.4.～現在）
４）愛知県教育委員会生涯学習課 家庭教育企画委員会 委員長（2016.4.～現在）

石　田　靖　彦

所　　属　愛知教育大学教育学部学校教育講座
職位・学位　准教授　博士（心理学）
博士課程分野　教育環境学分野
担当科目　教育評価実証方法論、学校適応論研究、
　　教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ　児童生徒の学校への適応過程、学級内の人間関係が児童生徒に及ぼす影響

1．これまでの教育研究について

中学校新入生や大学新入生の友人関係の親密化や学校への適応過程について研究してきました。児童生徒間関係、学校適応、社会性の育成などに興味があります。

2．博士課程における教育研究について

本博士課程では教育評価実証方法論、学校適応論研究ほかを担当しています。専門分野は、教育・社会心理学ですので、特定の教科に直接があるわけではありませんが、皆さんの研究を聞かせていただきながら、教科開発学にどのような貢献ができるかを探っていきたいと思っています。

3．担当講義について

【教育評価実証方法論（分担）】

この授業のわたしの担当部分では、受講生の研究を紹介してもらい、それに基づいてデータの収集法、相関的研究と実験的研究法、尺度の信頼性と妥当性などについて考えます。

【学校適応論研究】

学校への適応について、関連する著書や研究論文をもとに、それに関連する要因、教育への応用などについて考えます。

4．主要な研究業績（2019.4　～）

1）養護教諭が職務上抱える困難に関する文献検討愛知教育大学教職キャリアセンター紀要, 7, 183-190.（共著）
2）家族機能の認知が内在化・外在化問題に及ぼす影響―許し傾向性を媒介変数として　愛知教育大学教職キャリアセンター紀要, 7, 199.205.（共著）
3）親和欲求と拒否不安が仲間集団指向性とグループの所属・グループの特徴に及ぼす影響　愛知教育大学教育臨床総合センター紀要, 10, 10-19. 2020年（共著）
4）小学校教師が重視する児童の特徴―教師の性格特性との関連と教員養成大学生との比較　愛知教育大学研究報告（教育科学編）, 69, 93-98. 2020年（共著）
5）教育社会心理学に関する研究の動向と展望　教育心理学年報, 58, 47-62. 2019年
6）級友からの受容と教師からの受容に関連する性格特性―小学校と中学校の比較　愛知教育大学教育臨床総合センター紀要, 8, 18-25. 2019年（共著）
7）教職志望の大学生が重視する児童の特徴―大学生の性格特性と児童の性格特性の重視度との関連　愛知教育大学研究報告（教育科学編）, 67, 33-38. 2018年
8）各学校段階におけるスクールカーストの認識とその要因―大学生を対象にした回想法による検討　愛知教育大学教育臨床総合センター紀要, 7, 17-23. 2017年

5．主要な社会活動業績（2019　～）

1）日本学校心理士会愛知支部支部長，中部甲信越地区幹事（2011-現在）
2）愛知県教育職員免許法認定講習講師（2019）
3）教員免許状更新講習講師「教育の最新事情（必修）」（2018, 2019）
4）大府高校訪問授業（2020）

竹　川　慎　哉

所　　属　愛知教育大学教育学部学校教育講座
職位・学位　准教授　博士（教育学）
博士課程分野　教育環境学
担当科目　教科開発学実践論　　教育方法・内容論研究
　　教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ
研究テーマ　教育方法学、教育課程論(特に、カリキュラムの政治学的研究、批判的リテラシー教育、授業づくり)

1．これまでの教育研究について

国内外の授業実践、理論を対象にしながら、学習者が自己と他者、社会との関係を（再）構築していく学びを保障するための授業づくりについて研究しています。特にアメリカ、オーストラリア、カナダで実践されている批判的リテラシー教育に注目しています。批判的＝異なる見方、別の見方を探り出す教授＝学習をどう創り出すかに関心があります。

2．博士課程における教育研究について

教科内容研究、および教材・発問づくりへのポリティカルな視点の可能性と課題を検討しています。対話論、身体論、政治哲学と教科内容論、教材論、指導論との接点を探りつつ、公正、平等、多様性、ポリティクスなどをキーワードに、授業づくりの現状と課題を考えていきたいと思います。

3．担当講義について

【教科開発学実践論】

本科目では、各受講者のこれまでの研究を教科開発学の視点から再構成した発表と受講者・教員によるディスカッションを通して、教育事象を理論的検討課題として構想する方法論等を学ぶ。私の専門である教育方法学、教育課程論の観点から、教育実践の理論的研究と教育学理論の実践的研究の往還を提示していきます。

【教育方法・内容論研究】

教育実践におけるマクロとミクロのポリティクスを捉える理論枠組みを理解していきます。いわゆる「カリキュラム政治学」と呼ばれる研究群およびそれらの思想的基盤を形成している哲学、言語学、社会学の諸理論を取り上げ、検討します。その上で、授業における政治性の編み直し＝公正・平等な授業構造について、実践記録などをもとに検討を進めていきます。

4．主要な研究業績

1）Yuya Takeda & Shinya Takekawa (2021). Critical Literacy in Japan: Reclaiming Subjectivity in the Critical. In Pandya, J. Z., Mora, R. A., Alford, J., Golden, N. A. & de Roock, R. S. (Eds.). *The Critical Literacies Handbook*. Routledge.
2）竹川慎哉･木村裕（2020）「カリキュラムと教育評価」青木麻衣子･佐藤博志編著『オーストラリア･ニュージーランドの教育〔第三版〕－グローバル社会を生き抜く力の育成に向けて－』東信堂。
3）木村裕・竹川慎哉編著（2019）『子どもの幸せを実現する学力と学校』学事出版。
4）竹川慎哉（2019）「教育課程とカリキュラム」、吉田武男監修・根津朋実編著『MINERVAはじめて学ぶ教職 10　教育課程』、ミネルヴァ書房。
5）竹川慎哉（2019）「授業研究と教師の力量形成」、子安潤編『教科と総合の教育方法･技術』、学文社。
6）Shinya Takekawa (2015). Effects of Globalized Assessment on Local Curricular: What Japanese Teachers Face and How They Challenge it. In D. Wyse, L Hayward & J. Pandya (Eds.). *The SAGE Handbook of Curriculum, Pedagogy and Assessment* (pp. 946-964). London: SAGE Publisher.
6）竹川慎哉（2010）『批判的リテラシーの教育－オーストラリア・アメリカにおける現実と課題－』明石書店。

5．主要な社会活動業績

1）2015-2018　The Curriculum Journal, Editorial Board member
2）2018-　名古屋市立向陽高校　スーパー・サイエンス・スクール　運営指導委員
3）2020-　愛知県総合教育センター「新学習指導要領を踏まえた学習評価の在り方に関する研究」研究顧問など

鈴 木 裕 子

所　　属　愛知教育大学　幼児教育講座
職 位 ・ 学 位　教授　博士（学校教育学）
博士課程分野　教育環境学
担 当 科 目　教育評価実証方法論　幼児教育・保育内容論研究
　　教科開発学セミナー
研 究 テ ー マ　保育内容論　身体教育学　身体表現論

１．これまでの教育研究について

保育内容論、特に幼児期の身体表現・身体活動を主たるフィールドとして、子どものこころとからだの相互作用をテーマとした研究を続けてきました。具体的には、幼児間のコミュニケーションとしての模倣、幼児の感性、乳幼児の身体活動性増強の方略、運動による心理社会的効果としての「遊び込む」概念の追求や環境構築、そして現在は、幼少期のからだを動かす遊びにおける非認知能力の可視化を目指した研究に取り組んでいます。

２．博士課程における教育研究について

幼児教育・保育の世界には「教科」はありません。「教科」に相当するのは「領域」ですが、子どもたちの一つの活動、特に「遊び」の中では、様々な領域が重なり合い「保育内容」として存在しています。ですから「教科開発学」に相当するのは「幼児教育･保育内容実践開発学」といえるかもしれません。「幼児教育・保育内容実践開発学」では、幼児教育・保育に関わる多様な実践や諸課題の改善・改革に貢献することのできる高度な研究指導能力を有する実践者及び実践に根ざした研究者を育成し、その成果として博士論文を発信することを目指したいと考えます。

３．担当講義について

【教育評価実証方法論】

実践的研究者と研究的実践者の立場から、対象を理解し分析評価する方法、それを研究として昇華させるための研究方法を扱います。受講者の研究背景や状況に応じて、研究構想に寄与できるような高度研究手法としての定量的（量的）な研究方法、定性的（質的）な研究方法、混合研究方法などの中からいくつかの具体的な方法を取り上げます。

【幼児教育・保育内容論研究】

本授業では、幼児教育、保育の実践、またその類縁の学校教育や子育て支援、家庭の養育等をめぐる最近の研究知見を学び、研究動向を把握します。また保育内容・保育実践における様々な事象の中から問いを立てて検討し、諸現象を実証的に分析する方法、結果を説得的に提示していくための論理等、論文作成に関わる研究営為を扱います。幼児教育・保育分野を直接に扱う受講者に対しては、各人の研究主題に関連する研究のレビューをしながら､今後の研究への示唆等が得られるようにしたいと考えます。

４．主要な研究業績

１）鈴木裕子（2021）幼少期におけるからだを動かす遊び経験と非認知能力の関連性，幼児教育研究，第21号，27 - 36
２）Yuko Suzuki (2020) The Effect of Physical Play Experiences on Early Childhood Non-cognitive Skills Development，Journal of Education and Development，Volume 4 ，No 3，54-72
３）Yuko Suzuki (2019) Characteristics of Physical Expression Activities Among Young Children – How Physical Contact Influences the Body and Expression –，Journal of Modern Education Review，Volume 9，No2，109-123
４）Yuko Suzuki・Hideki Suzuki (2017) Psychosocial Effects of Physical Play in Early Childhood，Journal of Modern Education Review，Volume 7，No12，894-906
５）鈴木裕子（2017）幼児の「遊び込める」姿に含まれる要素の検討，こども環境学研究，第12巻，第２号，54-62
６）鈴木裕子（2016）保育における幼児間の身体による模倣，風間書房

５．主要な社会的活動業績（2022.3）

１）日本保育学会　評議員
２）独立行政法人大学改革支援・学位授与機構　専門委員
３）日本教育大学協会幼児教育部門代表
４）愛知県豊明市子ども・子育て会議委員長
５）愛知県蒲郡市子ども・子育て会議委員

野　崎　浩　成

所　　属　愛知教育大学
職位・学位　博士（工学）
博士課程分野　教育環境学
担当科目　教授学習論研究
　　教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ
研究テーマ　コンピュータと教育、教育工学、認知科学

１．これまでの教育研究について

これまでに取り組んできた教育研究のメインテーマは、「コンピュータを活用した学習支援」です。具体的なキーワードは、「eラーニング」、「学習環境の構築」、「学術論文執筆支援」、「第二言語習得」、「日本語コーパスを活用した言語学習支援」、「文章理解」、「教育におけるメディアの利活用」などです。

２．博士課程における教育研究について

博士課程では、学習環境の構築や教材開発の実践を理論的に分析し、その理論を学校教育に活かすことを目的として教育研究に取り組んでいます。すなわち、実践と理論の往還を通じて、学習環境の諸課題を解決し、教授・学習を改善する方法を探究します。

３．担当講義について

担当する講義「教授学習論研究」では、認知科学的な観点に立って、「教授・学習」に関わる理論について学習します。すなわち、「学び」を科学的に分析するための研究手法の習得を目指します。さらに、教授・学習に関連する研究論文や学術書などを輪読することを通じて、ICT等を活用した教育環境の改善について考察します。

４．主要な研究業績

[1] 野崎浩成, 横山詔一, 磯本征雄, 米田純子（1996）文字使用に関する計量的研究：日本語教育支援の観点から, 日本教育工学雑誌, Vol.20, No.3, 141-149
[2] 野崎浩成, 市川伸一（1997）漢字学習支援システムの開発：漢字の構造理解と筋運動感覚の獲得, 日本教育工学雑誌, Vol.21, No.1, 25-35
[3] 野崎浩成, 清水康敬（2000）新聞における漢字頻度特性の分析とNIEのための漢字学習表の開発, 日本教育工学雑誌, Vol.24, No.2, 121-132

５．主要な社会活動業績

教育システム情報学会 東海支部役員

梅　田　恭　子

所　　属　愛知教育大学　教育学部　情報教育講座
職 位 ・ 学 位　准教授・博士（学術）
博士課程分野　教育環境学分野
担 当 科 目　教科開発学原論、ICT教育研究
研 究 テ ー マ　教育工学、情報教育

１．これまでの教育研究について

教育工学の視点にたち、人の学びに関する理論的な知見を基に教育実践研究を行っています。具体的な内容としては主体的・対話的で深い学びを支援するためにICTを活用し、効果的・効率的な授業設計に関する研究や、問題解決・探求における情報活用、情報モラル、小学校プログラミングなど、子どもたちの情報活用能力の育成に関する研究、高等学校教科「情報」に関する研究を行っています。

２．博士課程における教育研究について

博士課程においては、教育実践の結果を人の学びに関する科学的な知見から捉えることと、それらの理論から授業を設計し実践するということを往還し、経験豊かな教員の主に授業における暗黙知を形式知化する研究を試みたいと思っています。

３．担当講義について

「教科開発学原論」では、教育の情報化の背景を概観し、なぜICT活用が必要なのか、主体的・対話的で深い学びとの関連性などを検討したうえで、2020年代を通じて実現すべき令和の日本型学校教育の姿について探ります。また、情報活用能力とは何かについて、教育の情報化における位置づけ、構成要素、資質・能力との対応の観点から捉えます。「ICT教育研究」では、学習観や指導観の転換に基づいたICTを活用した授業デザインについてインストラクショナル・デザイン理論から捉えます。また優れた実践研究や教育実践例を基にどのような授業設計の方法があるのかを検討します。

４．主要な研究業績

・林一真・梅田恭子（2021）１人１台のタブレット端末を活用した情報活用能力を育成する授業設計の留意点の提案，日本教育工学会論文誌 44(4), 497-511
・梅田恭子・齋藤ひとみ編著（2019）ICT活用指導力アップ　教育の情報化　教員になるための情報教育入門，実教出版
・Hitomi SAITO and Kyoko UMEDA (2019) The Development of Teaching Skills Using ICT in Teacher Training: Practices in First-Year Introduction for ICT, Proceedings of the 2019 3rd International Conference on Education and Multimedia Technology, 120-125

５．主な社会活動業績

・文部科学省　令和３年度　ＩＣＴ活用教育アドバイザー（2021年度）
・愛知県教育委員会　愛知県義務教育問題研究協議会　委員（2020-2021年度）
・愛知県総合教育センター　情報教育の充実に関する研究（ICT授業活用に関する研究）　顧問（2021.4～現在）

野　地　恒　有

所　　属　愛知教育大学
職位・学位　理事（教育・学生担当）・副学長・博士（文学）
博士課程分野　人文社会系教科学
　　博士課程担当科目　セミナーⅠ～Ⅲ
研究テーマ　日本民俗文化論、歴史民俗博物館論

1．これまでの教育・研究について

日本の文化や歴史を民俗学という分野から研究しています。主なテーマは日本の海洋文化論・都市文化論です。具体的には、近代以降に開拓・形成された集落（移住開拓島）の生活体系に関する研究や、金魚、菊、朝顔など都市で形成された観賞用動植物の飼育栽培文化に関する研究を進めています。

2．博士課程における教育・研究について

教科開発学とは、基礎科学の成果を基軸としてその成果を社会的に還元させるための開発を図る応用科学の一つであり、基礎研究の成果を学校教育へ応用化するための開発を研究対象としてその体系化や理論化をめざすものである、と私は考えています。そして、基礎研究として民俗学の成果をふまえた教育・研究では、民俗学を学校教育（とくに社会科歴史的分野）の場面に応用した教材あるいは教材論の領域を「同時代生活誌」という形で提示することをめざしています。同時代生活誌は、現在の地域社会に内在する歴史や伝統を描き出すことにより地域の生活や生活に根ざした文化をとらえ、地域社会の未来を構想する内容構成になるとともに、基礎科学の民俗学研究にもインパクトを与えうるものと考えています（「教科開発学と大学教育の一貫性―民俗学＝同時代生活誌を基軸として―」『教科開発学を創る』2、愛知教育大学出版会［2018］参照）。

また、セミナーⅠ～Ⅲの授業では、博士論文に向けて、教科開発学の構築について考えるとともに、実践をふまえたオリジナリティのある研究について、自立的な研究の進め方や博士論文の書き方について、受講者が理解を深め、身につけられることを目標としています。

3．担当講義について

4．最近の研究業績

1）「海洋性とゆるやかな定住社会～紀州文化への視座～」『紀伊半島をめぐる海の道と文化交流』和歌山県立紀伊風土記の丘（2021）
2）「バック・トゥ・ザ・現在～同時代生活史としての民俗学～」『未来の社会を共に創る社会科授業叢書「教職の魅力共創」（教科領域編）②』愛知教育大学出版会（2022）

5．主要な社会活動業績

1）愛知教育大学地域連携公開講座や市町村の市民大学講座などの講師：「暮らしの中の民俗学」・「松本清張から見た民俗学―「或る『小倉日記』伝」を題材として―」など
2）岡崎市美術博物館博物資料収集委員会委員（2006～2020）、名古屋市博物館資料委員会委員（2013～）、鳥取県立博物館協議会委員（2014～2022）

稲　葉　みどり

所　　属　愛知教育大学教育学部日本語教育講座
職位・学位　特別教授　博士（学術）
博士課程分野　人文社会系教科学
担当科目　教科開発学実践論、言語教育内容論研究
　　教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ
研究テーマ　言語教育に関する教科開発、外国語教育、授業研究等

１．これまでの教育研究について

研究テーマは第一言語・第二言語習得研究、外国語教育（日本語教育、英語教育）、異文化理解教育等です。外国語教育の授業研究、外国語教師の認知に関する研究も行っています。今年度は特にオンライン日本語教育実習の方法、英語の自己調整学習、初等英語教員養成等についての研究に取り組みました。学部では日本語教育学に関連した授業や実習、初等英語科教育、卒論等、教職大学院では英語教育（教材分析と授業実践開発・教材開発と編成・実践開発）に関する授業を担当しています。

２．博士課程における教育研究について

博士課程では、学位論文の指導を中心に行っています。これまで英語教育、日本語教育、国語教育、特別支援教育、幼児教育、保育等の分野の研究をしている指導生を担当してきました。研究指導では、指導生が自分の研究を成就できるように、研究テーマの絞り込み、理論的枠組み、データの収集、分析の方法、考察の観点等を一緒に考えています。令和3年度は、英語教育分野2名、特別支援教育分野で1名が博士の学士を取得しました。

３．担当講義について

【教科開発学実践論】

新しい教育を創造開発するには、これまでの教育実践を省察し、問題点や課題を発見し、それと同時に実践を理論化していく必要があります。授業では、受講者が各自のこれまでの研究を教科開発学の視点から構成し直し、今後の博士論文に向けて、研究の方向性を明確にします。また、様々な教育分野等の観点から他の受講生等と意見交換し、教科開発学における実践的諸課題についての理解を深めます。

【言語教育内容論研究】

「ことば」は、教科を超えて学習、教育、研究の基礎となります。ここでは、特に研究に焦点を当て、研究資料に現れることばの分析、解釈、数量化等の方法を考察し、受講者が自身の研究の遂行、論文の執筆に適した方法を探ります。データベースを作成し、分析ソフトを用いたりして、質的分析、量的分析等を行う方法を検討します。

４．主要な研究業績

１）稲葉みどり（2021）.「大学生の自己調整学習の分析－英語学習における動機づけ・メタ認知・学習方略－」『教養と教育』21, 1-8.　愛知教育大学共通科目専門委員会.
２）稲葉みどり（2022）「10歳児・11歳児の物語文の発達に見られる特徴－Frog Storyの場合－」『教科開発学論集』10,　27-36. 愛知教育大学大学院･静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻（後期３年博士課程）.
３）稲葉みどり(2022).「オンライン日本語教育実習の試み」『愛知教育大学研究報告(人文･社会科学編)』71, 1-9. 愛知教育大学.

５．主要な社会活動業績

１）一般社団法人大学女性協会国際奨学委員
２）高校訪問出前授業
３）愛知教育大学公開講座開講（高校生向け講座、教員向け講座等）

伊　藤　貴　啓

所　　属　愛知教育大学教育学部地域社会システム講座
職位・学位　教授　博士（理学）
博士課程分野　人文社会科学系教科学
担当科目　地理学教材研究論，文化資源活用論，教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ　農業地域の自立的発展とその条件，ヨーロッパ国境地域の空間変動，
教員としての実践的指導力育成と地域教材開発（社会科地域学習および　防災教育）
社会科の教科内容と教科専門と教科教育の架橋に関する研究

１．これまでの教育研究について

教科専門では、地理学担当教員の任にあります。専門の農業地理学では、野菜産地から日本農業の変化を追うことと連動させて、農業地理学の学史的分析を始めています。EUの国境地域や農村地域の研究では、オランダへの関心を持ち続けている状況です。このような教科専門としての地理学をベースに、教員養成段階における教員としての実践的指導力育成の方途を主に社会科と防災教育の分野で探っています。とりわけ、教科開発学という点で、教科専門と教科教育の架橋に関心があります。

２．博士課程における教育研究について

本博士課程では、地理学教材研究論ほかを担当しています。研究面では、自らの専門である地理学と社会科教育をフィールドに教科専門と教科教育の架橋に関わる方途を探りながら教科専門のおもしろさを伝えつつ、いかに教員としての実践的指導力を高められるのかを先達に学びながら考えるとともに、社会科教育研究者とやりとりしながら、社会科の教科内容について研究し始めたところです。

３．担当講義について

【文化資源活用論】　文化資源としての地域資源について、そのとらえ方と地域形成・振興との関わりを愛知県におけるフードツーリズム、ルーラルツーリズムに事例を求めて、自然資源・景観・観光・人材育成などの観点から受講者とともに考えて学んでいます。

【地理学教材研究論】　本講義では地理学における野外調査の技法を座学とフィールドでの観察などから理解することで①「地域」を観る目を養い、②社会科の内容である地域社会の事象をフィールドで理解し、その仕組みを解き明かしうる能力とともに、③それらを構造的に把握して教材を開発する資質能力の育成を目的としています。

４．研究業績（2021年度）

１）学部生によるESD地域副読本作成と社会科教員の養成－教員養成における教科専門の意味を再考する．愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻編『教科開発学を創る　第３集』愛知教育大学出版会，pp.89～109，2021年３月
２）教員養成系大学院における実践的指導力育成と地域防災教育の展開に関する基礎的研究－地域防災副読本作成の試みから－．愛知教育大学研究報告第70輯（教育科学編），pp.101～109，2021年３月
３）オランダにおける農業と自然－循環型農業への挑戦－．漆原和子・藤塚吉浩・松山 洋・大西宏治編著『図説世界の地域問題100』ナカニシヤ出版，pp.88～89，2021年12月
４）「地域」と「地域」の見方・とらえ方（pp.71～81）．「自然災害から人々を守る活動」の教材化（三河地震）（pp.124～133），コラム７「発問はまずWhyよりもHowで」（p.81），コラム８「地域の構造図を描くには」（p.82），コラム９「地理院地図と国土地理院をもっと利用しよう」（p.97）．伊藤裕康 編『社会科教育リバイバルへの途―社会への扉を拓く「地域」教材開発―』学術図書出版社，2022年４月

５．主要な社会活動業績（2020年度～　）

１）人文地理学会代議員（2020～2022年９月），経済地理学会論文賞選考委員（2021年度），日本地理学会小林浩二研究助成審査委員会委員（～2022年度）
２）社会科副読本監修 知立市（2017年度～現在），安城市・岡崎市・高浜市・幸田町（2018年度～現在），
３）豊田市史編さん執筆委員（2007～2020年度），豊田市史編さん執筆協力委員（2021年度～）
４）豊川市の未来を拓く教育推進懇談会（会長，2018～2020年度）

中　野　真　志

所　　属　愛知教育大学生活科教育講座
職位・学位　教授・博士（文学）
博士課程分野　人文社会系教科
担当科目　教科開発学原論、生活科教育内容論研究、
　　教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ　ジョン・デューイの教育論、生活科及び総合的な学習の理論と実践

１．これまでの教育研究について

研究者として、当初、アメリカのカリキュラム理論及び社会科教育いついて研究していましたが、日本において生活科が誕生して以降、その研究対象を生活科、後に総合的な学習に広げ、カリキュラム理論だけでなく教育方法学及び授業論の観点からも生活科、総合的な学習及び社会科の理論と実践について研究してきました。また、これらの研究とともに、ジョン・デューイの教育論、特にデューイ実験学校のカリキュラム理論と教育実践も研究しています。

２．博士課程における教育研究について

本博士課程においては、これまでの研究成果に基づき、教科の内容構成のもととなる親学問が存在しない生活科及び総合的な学習を教えるのに必要な資質・能力とは何か、生活科と総合的な学習における体験と活動をどのように単元構想に位置づけ、それらを知識、技能の習得と活用及び態度の育成にどのように関連づけるのか、生活科と総合的な学習における素材とは何かについてカリキュラム理論、教育方法学および授業論の観点から考察すること、その考察を通して教科とは何かについてともに考えたいと思います。

３．担当講義について

【生活科教育内容論研究】

生活科新設までの経緯、誕生した背景と要因について考察し、親学問をもたない生活科という教科の本質と独自性についての理解を深めます。そのために、まず、生活科の目標と内容、単元構想、年間指導計画の基本的な考え方について検討します。次に、生活科と総合的な学習の源流の一つであるデューイ実験学校のカリキュラム理論と教育実践について考察し、現在の生活科のカリキュラム及び授業実践を批判的に分析し、考察する能力の習得を目指します。

４．主要な研究業績（2016.3 ～）

1）「アメリカにおける社会性と情動の学習(SEL)－「学術的、社会的、情動的な学習の協働」（CASEL）を中心に－」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』第７号、2022年、pp.159-166
2）「『民主主義と教育』における経験とリフレクション－探究･体験型学習の理論的基底－」（日本デューイ学会編『民主主義と教育の再創造－デューイ研究の未来へ－』、勁草書房、2020年、pp.188-196）
3）「シカゴ大学時代のエラ・フラッグ・ヤング（Ella Flagg Young）(I)」『愛知教育大学研究報告』第69輯（教育科学編）2020年３月、pp.1-8
4）『生活科・総合的学習の系譜と展望』三恵社（加藤智との共編著）、2018年10月
5）文部科学省、国立教育政策研究所、教育課程研究センター編著『発達や学びをつなぐスタートカリキュラム－スタートカリキュラム導入・実践の手引き－』学事出版、2018年４月（作成協力者・副主査）
6）キャサリーン･キャンプ･メイヒュー、アンナ･キャンプ･エドワーズ著、小柳正司監訳『デューイ・スクール－シカゴ大学附属実験学校：1896年～1903年－』あいり出版、2017年（８章、18章、補遺１、補遺２の翻訳）
7）「J.デューイ（John Dewey）のカリキュラム理論と教科観－デューイ実験学校のカリキュラム理論と相補的な歴史と地理を中心に－」『愛知教育大学研究報告』第66輯（教育科学編）2017年３月、pp.１～８
8）『デューイ実験学校における統合的カリキュラム開発の研究』風間書房、2016年２月

５．主要な社会活動業績（2021年3月）

1）日本生活科・総合的学習教育学会　常任理事（2002年度～現在）、副会長（2020年度～現在）
2）愛知県教育センター中堅教諭等資質向上研修（小学校生活科）　講師（2004年度～現在）
3）社会福祉法人　愛知県社会福祉協議会　福祉読本『ともに生きる』編集委員長（2020年度～現在）

丹　藤　博　文

所　　属　愛知教育大学教育学部国語教育講座
職位・学位　教授・博士（教育学）
博士課程分野　人文社会系教科学
担当科目　文化資源活用論、国語科教育教材論研究、
　　教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ　文学教育・物語研究（語り分析）

１．これまでの教育・研究について

ソシュールやウィトゲンシュタイン以降の言語論､記号論や構造主義による文学理論をベースとして、あるいは戦後文学教育の理論と歴史をふまえつつ、国語教科書に掲載される文学教材の読みについて研究しています。近年は、物語論（ナラトロジー）・フランスの国語教科書を研究することで、語りを日本の文学教育に導入すべく指導過程を提案し実践的な有効性を検討しています。

２．博士課程における教育・研究について

高度情報化社会といわれ、子どもたちにもスマホが普及する中で、子どものリテラシーをどう育てていくか、文学的なテクストの果たすべき役割とは何かといったことを明らかにしていきたいと考えています。すでに学校においては、デジタル教科書が導入されていますが、メディア社会における文学の教育的な意味と役割を追究することが課題です。

３．担当講義について

【文化資源活用論】

言語論・物語論について概説し、物語分析の手法を紹介します。そのうえで、小・中学校国語教科書に掲載される文学教材を分析し読みを問題としていきます。受講者にも、自分で物語分析を演習してもらいます。

【国語科教育教材論研究】

戦後の文学教育の展開をたどることで、その成果と課題を明らかにします。戦後の文学教育を概観し、20世紀の言語論･文学理論を参照しつつ、文学教育の在り方について考察します。そのうえで、小･中･高校の国語教科書における文学教材・説明文教材の読み直しを図り、教材価値について検討します。

４．主要な研究業績（2019年～、単著は1995年～）

１）著書

〈単著〉『教室の中の読者たち』(学芸図書 1995)，『他者の言葉』(学芸図書 2001)，『文学教育の転回』(教育出版 2014)，『ナラティヴ・リテラシー―読書行為としての語り―』（溪水社 2018）

〈共著〉日本読書学会編『読書教育の未来』（ひつじ書房 2019），全国大学国語教育学会編『新たな学びを創る小学校国語科授業研究』（東洋館出版 2019)，『あまんきみこハンドブック』（三省堂 2019)，全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望　Ⅲ』（2022年刊行予定）

２）論文

「連載・語り講座①～⑦」『道標』（Vol.33～39 教育出版 2016～2019)，「附属学校園ワンダーランド」愛知教育大学教職キャリアセンター　教科教育部門『SCOPEⅢ』（No.9 2019.3）「中学校における〈言語論的転回〉の授業」『愛知教育大学　教職キャリアセンター紀要』（第５号 2020.3)，「抵抗のメソッド―〈主体的読み〉とは何か―」『国語国文学報』（第78集 2020.3)，「新コロナウィルス・ICT教育・言語活動」愛知教育大学教職キャリアセンター　教科教育部門『SCOPEⅢ』（No.10 2020.3)，「文学教育再考のための覚書―読書行為の視座から―」『国語国文学報』（第79集 2021.3)，「国語教育VS国語教育」『日本文学』（No.820 2021.10)，「語りの行方―「一つの花」（今西祐行）の場合―」『国語国文学報』（第80集　2022.3）

５．主要な社会活動業績（2021年）

１）日本文学協会委員，全国大学国語教育学会理事・編集委員，愛知教育大学国語教育研究会代表
２）国語教科書編集委員（『ひろがる言葉　小学国語１年～６年』教育出版，『伝え合う言葉　中学国語１年～３年』教育出版）
３）日本教職員組合教育研究全国集会（日本語教育）・教研集会愛知大会（国語）・岡崎市教育研究大会共同研究者
４）愛知教育大学附属名古屋小学校・岡崎中学校（国語）共同研究者
５）愛知県立日進西高等学校出前授業，西春日井国語サークル講演

田　口　達　也

所　　属　愛知教育大学教育学部外国語教育講座
職位・学位　准教授　PhD in English
博士課程分野　人文社会系教科学
担当科目　第二言語教育論研究
研究テーマ　心理学的視点からの第二言語習得、研究方法論、英語教育

1．これまでの研究・教育について

これまで、第二言語習得（特に英語教育）における個人差を中心に研究を行ってきました。中でも、学習方略と学習動機づけ・態度を主たるテーマとしてきました。近年は、非認知能力の視点から、第二言語習得を捉える研究を行っています。また、データの収集や分析の方法の検討も、重要な研究テーマとなっています。以前は量的手法を用いた研究を中心としていましたが、最近では質的手法や混合手法も研究対象としています。教育については、学部では音声教育を含む英語教育全般、教職大学院では異文化理解を担当しています。

2．博士課程における研究・教育について

どのような教授法を用いても、学習者の学習に対する意欲・動機が言語習得の成否を左右します。この背後には、学習者のアイデンティティやその形成も関わります。そのため、学習意欲・動機づけの研究・教育に、アイデンティティの研究視点を加味することの意義を検討しています。また、研究を行うために研究手法を身に付ける必要もありますので、研究手法（特に言語習得研究に関わる手法）についても扱うことを考えています。

3．担当講義について

【第二言語教育論研究】

授業での学習時間には限りがあるため、学習者が授業に集中することと授業外で勉強をすることが英語習得には必要不可欠になり、これらの要因に関わる動機づけや学習意欲の研究は重要な意味を持ちます。本授業では、動機づけ・学習意欲に関する理論を概観しますが、それらの理論の実践的方法の検討も行いたいと思います。また、動機づけというと学習者の立場からの研究が容易に思いつきますが、語学教師の側にも勤労意欲等の動機づけが必要であると言えます。そのため、学習者を対象者にした研究だけではなく、教師にとっての動機づけも併せて検討していきます。

4．主要な研究業績（2017.4～）

1）田口達也(2018)「TOEIC、学習時間、そしてやり抜く力－愛知教育大学の事例から－」『教養と教育』第18号、1-9頁.
2）Taguchi, T. (2020). Investigating self-control strategies of university students learning English in Japan. In T. Pattison (Ed.), *IATEFL 2019 Liverpool conference selections* (pp. 45-48). IATEFL.
3）建内高昭・田口達也（2021）「小学校外国語活動における児童の学習意欲と教室内動機づけ要因の動的関係－２年間の調査から－」『愛知教育大学研究年報．人文・社会科学編』第70輯、78-82頁.
4）Taguchi, T. (2021). Validating a self-control measurement for L2 learning: A factor analysis study. *Studies in Foreign Languages & Literature, 54,* 75-95.

5．主な社会活動業績

1）教員免許状更新講習「言語教育における非認知的能力の研究動向」（2018.8）
2）JALT Journal、System、Routledge Handbook論文査読委員
3）愛知県立国府高等学校公開授業指導助言（2021.11）

近　藤　裕　幸

所　　属　愛知教育大学教育学部社会科教育講座
職位・学位　教授　博士（学術）
博士課程分野　人文社会科学系教科学
担当科目　文化資源活用論・社会科教育論研究
研究テーマ　明治から第二次世界大戦における地理教育史研究

１．これまでの教育研究について

これまで、第二次世界大戦前の中等教育段階における地理教授を研究してきました。戦前は中等教育段階が複線型でとても複雑であるため、旧制中学校・高等女学校・実業学校などすべてにわたっての地理教授の実態は依然として解明されていません。師範学校も含めて、これらを比較考察することで、その全容を明らかにしたいと思っています。

最近は，戦前の地理科や歴史科において、中学校と高等女学校でどのような差が見られるのかを明らかにして、とくに女性について求められていたものが何であったのかを教科書の内容に限定して研究しています。

２．博士課程における教育研究について

博士課程では、社会科教育論研究を担当しています。専門知識はいうまでもないのですが、その専門性が現場の経験や知識に結びついていることが重要だと思っています。現職の方は専門知識の重要性を、教員経験のない方には現場の知識をお伝えして、理論と実践が往還するような授業を行いたいと思っています。

３．担当講義について

【文化資源活用論】

社会科（地歴科・公民科）は、おもに地理・歴史・公民的な内容によって構成されています。これらを連携・融合することでどのような授業が生み出されるのかを考え、作りたいと思います。また、社会科だけにとどまらず、他教科との連携・融合によって、教科の枠にとらわれない自由で豊かな授業作りに挑戦します。専門にこだわる博士課程だからこそ、視野を広げる授業にしたいと思います。

【社会科教育論研究】

社会科教育（地歴・公民科）でしばしばとりあげられる本（著作物）を輪読することによって、その本が社会科教育史において、どのような位置づけにあり、どのような教育的価値をもっているのかについて考えていくことを目的とします。また、しっかりとした教材研究の力量を育成するために、その本をもとにして教材開発を行ってもらいます。

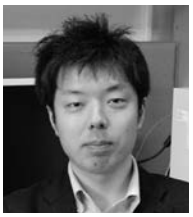
４．主要な研究業績（2022年～）

１）近藤裕幸（2022）．明治期から第二次世界大戦期まで（1872-1945年）の日本の中等教育における地理教育制度の変遷－実業学校を中心として－，人文地理，74-2.
２）近藤裕幸（2022）．明治期から第二次世界大戦期における高等女学校の東洋史教科書にみられる良妻賢母思想，探究，32.

５．主要な社会活動業績

１）令和３年度中堅教諭資質向上研修，講師，2021.8.19
２）天白高等学校出張授業，講師，2021.9.30
３）江南高等学校出張授業，講師，2021.11.8

宮　村　悠　介



所　　属　愛知教育大学社会科教育講座
職位・学位　准教授　博士（文学）
博士課程分野　人文社会系研究科倫理学専攻
担当科目　倫理教材論研究、文化資源活用論
　　教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ
研究テーマ　近現代ドイツ倫理学、日本近現代倫理思想史、カント倫理学

１．これまでの教育研究について

倫理学の担当教員として、近現代のドイツおよび日本の倫理学・倫理思想史を研究してきました。人名で言うと、ドイツについてはイマニュエル・カント、マックス・シェーラー、ハンス・ヨナスなどについて主に研究しており、日本については和辻哲郎の倫理学などを取りあげています。こうした思想家を中心とした倫理思想史や倫理学の授業を担当するほか、生命倫理学や環境倫理学といった応用倫理学の卒論指導も担当しています。

２．博士課程における教育研究について

博士課程では、とくに高等学校公民科「倫理」の教材について考察してきたいと考えていきたいと考えております。何気なく授業で使われている「倫理」の教科書記述にも、それを裏付ける先哲たちの書いた古典的な文章があり、そうした古典と教科書を往復することで、「倫理」の教育にも奥行きをもたらすことができるはずです。講義ではそうした古典と教科書の往復の過程を、ともに体験していただきたいと考えています。

３．担当講義について

博士課程では倫理教材研究論と文化資源活用論の授業を担当します。倫理教材研究論では、高等学校公民科「倫理」の教科書を手がかりとして、その教科書記述を支えている倫理学の古典的な文章に遡り、そうした原典資料を「倫理」の授業等で教材として活用する方法を考えたいと思っています。取り上げられる範囲はプラトンやアリストテレスといった古代ギリシアから、動物倫理や環境倫理といった現代の応用倫理学にまでわたりますが、どの分野をどれだけ時間をかけて掘り下げるかは、受講者と話し合いながら決めたいと思います。文化資源活用論では、文化資源としての倫理学の古典を、教材として活用する方法について考えたいと思いますが、これも具体的な内容は受講者と相談して決めます。

４．主要な研究業績

１）（共著）木村純二, 吉田真樹編『和辻哲郎の人文学』ナカニシヤ出版、2021年
２）宮村悠介「カント倫理学における徳の理念の問題」（日本カント協会編『日本カント研究　20』に所収）2019年
３）宮村悠介「教育と倫理――「人格の完成」をめぐって――」（日本金属学会編『まてりあ（Materia Japan）　56-4』に所収）2017年
４）宮村悠介「個体であることの孤独について――人格の倫理学のために――」（実存思想協会編『実存思想論集　XXXI』に所収）2016年
５）「M・シェーラーと「悔い改め」の現象学――再生の倫理学のために――」（日本倫理学会編『倫理学年報　第六三輯』に所収）2014年

５．主要な社会活動業績

１）日本カント協会編集委員（2020年12月～現在）
２）日本倫理学会監事（2021年４月～現在）
３）日本比較思想学会評議員（2022年４月～現在）

奥　田　浩　司

所　　属　愛知教育大学教育学部国語教育講座
職位・学位　教授・博士（文学）
博士課程分野　人文社会系教科学
担当科目　文化資源活用論・国語科教育教材論研究
研究テーマ　日本近現代文学・日本文化学・アニメ文化論

1．これまでの教育・研究について

日本近現代文学、日本文化を対象に、文化論的な観点から研究を進めています。近年は,村上春樹の小説を中心に、日本文化との接点を探り、神秘主義との関わりについて検討しています。また同様の観点から、宮崎駿のアニメーションについても考察を行っています。

2．博士課程における教育・研究について

小説や詩の読解において、文学理論をどのように活用できるのかということについて考えたいと思います。文学テクストは,ともすれば感覚的な教材として受け取られる傾向がありますが、文学理論を援用することで客観的に対象化することができます。国語教育においても,文学理論を援用することが可能であると考えます。文学教育における文学理論の可能性について追究することが課題です。

3．担当講義について

【文化資源活用論】

日本近現代文学の小説について、文学理論を援用しつつ分析を行う。具体的には、物語論、ポストコロニアル理論、アダプテーション、表象不可能性を中心に講義を行い、併せて小説の分析を行う。小説については、主に教科書で取りあげられている作家を取りあげたい。

【国語科教育教材論研究】

教科書には、様々な小説が取り上げられている。しかし、必ずしも文学理論を踏まえた文学教育が行われているわけではない．その一方で、文学研究の場では、文学理論は必須の知識となっている。このような状況に鑑み、現代作家を対象に、文学理論を使った文学教育の可能性について考察する。また映像メディアも取り上げ、文学教育での活用についても議論を行う。

4．主要な研究業績

1）著書

〈共著〉

『村上春樹における両義性』（淡江大学出版　2016）

2）論文

・「「満州国」及び旧植民地における高齢日本語話者へのインタビュー（3）―日本語・日本文化の記憶に関する報告―」
（『国語国文学報』第80集，2022．3）
・「「満州国」及び旧植民地における高齢日本語話者へのインタビュー（2）―日本語・日本文化の記憶に関する報告―」
（『愛知教育大学大学院国語研究』第29号，2021．3）
・「「満州国」及び旧植民地における高齢日本語話者へのインタビュー（1）―日本語・日本文化の記憶に関する報告―」
（『愛知教育大学大学院国語研究』第27号，2019．3）
・「Representing the Holocaust Haruki Murakami's Killing Commendatore and "An Independent Organ"（『専修大学　人文科学研究月報』293号，2018．5）

3）発表

「村上春樹「タイランド」における日本回帰－村上春樹の小説における神秘主義への接近－」
Practicing Japan – 35 years of Japanese Studies in Poznań and Kraków 25th March, Friday

5．主要な社会活動業績

1）日本社会文学会・編集委員
2）有島武郎研究会・編集委員

岩　山　　勉

所　　属　愛知教育大学 理事・副学長（理科教育講座）
職 位 ・ 学 位　教授・博士（理学）
博士課程分野　自然系教科学
担 当 科 目　科学技術活用論、物理教材論研究、教科開発学セミナーⅠ、Ⅱ、Ⅲ
研 究 テ ー マ　物理教材開発、科学・ものづくり教育、半導体物理学、ビーム物性

１．これまでの教育研究について

量子ビーム（イオン・レーザービーム等）用いた半導体ナノ結晶の作製とその物性評価を中心とした研究を行っている。半導体物質を微細化することにより、固体の物性と著しく異なる半導体ナノ結晶特有な物性の発現が期待される。これは、量子サイズ効果や表面効果などによるものである、現在は、イオンビーム（イオン注入法)、レーザービーム（レーザーアブレーション法)、エキシマＵＶランプ、近赤外線ランプ、電子線等を用いることにより、微細構造の制御された半導体ナノ結晶、機能性薄膜を作製し、その物性の評価、さらには、その光電子機能デバイスとしての応用の可能性探索を行っている。

２．博士課程における教育研究について

子どもたちの「理科離れ」が様々な場で叫ばれており、対応が急務となっている。これは、教育現場で「なぜ理科を学ぶ必要があるのか」という素朴な疑問に明確に答えていないことに原因の一端があるものと思われる。現実的には、科学技術の発展とともにブラックボックス化され、専門家以外はその原理を知らず、単にユーザとしてその恩恵を受けるのみの場合が多い。博士課程では、これまでの研究を基盤として、先端科学技術の原理をいかに簡素化・モデル化し、教育現場に定着させていけるのかという課題に取り組んでいる。また、先端科学技術を活用した教材開発とその教育効果の検証も行っている。

３．担当講義について

【科学技術活用論】

最新の科学技術研究の成果をふまえ、初等・中等教育の教科内容における広範な専門的知識の重要性の認識とその理解を深める授業を行う。博士課程における、共通的な科目であり、非専門の方々も多く履修することを考慮して基礎から学び、その知識を活かす方法や、その面白さについて学ぶ。

【物理教材論研究】

身の回りの物理現象や先端科学技術を概説しつつ、教材開発やその授業での活用法を検討する。特に、学習の動機付けや日常との関わりから、理科を学ぶ意義、楽しさを伝える工夫として、先端科学技術を利用した「日常生活」と「理科学習」をつなげる新規の教材開発研究を行い、その有用性を検討する。

４．主要な研究業績

１）「理数探究（物理分野)」愛知教育大学出版会（2019).
２）"Optical properties of Si nanocrystals in SiO2 matrix synthesized by reactive pulsed laser deposition", Journal of Physics: Conference Series, (IOP Publishing), **1527**, 12027 (2020).
３）「教科開発学を創る 第３集（第７章 生徒が実験を通して主体的・創造的に電気抵抗の概念を獲得することを目指した新規教材の開発)」愛知教育大学出版会（2021).
４）"Electrical resistor and capacitor using carbon-based papers for creative thinking to deepen and extend learning", Physics Education (IOP Publishing), **56**, 35006 (2021).
５）「カーボン･ナノチューブ･ペーパーを用いた電気抵抗の探究的学習」物理教育, **69**, 145-150（2021).

５．主要な社会活動業績

１）刈谷市理数大好き推進協議会理事
２）刈谷市立住吉小学校学校評議員
３）愛知県立刈谷高等学校SSH運営指導委員・評価委員
４）愛知県立豊田北高等学校学校評議員
５）独立行政法人大学改革支援・学位授与機構、国立大学教育研究評価委員会専門委員

稲 毛 正 彦

所　　属　愛知教育大学教育学部理科教育講座
職 位 ・ 学 位　教授・理学博士
博士課程分野　自然系教科学
担 当 科 目　科学技術活用論，理科教育内容論研究，教科開発学セミナー
研 究 テ ー マ　無機化学，環境科学分野での教科開発

1．これまでの教育研究について

学部および大学院において無機化学担当教員として教育と研究に携わっています。主な研究テーマは金属イオンの関与する電子移動反応、光化学反応や配位子置換反応などの溶液内反応に関する研究です。金属ポルフィリン錯体などの特異な反応性を示す金属錯体を取り上げ、その動的挙動を各種の分光法を利用して明らかにするとともに、高速レーザー分光の手法を駆使して、光励起に伴って生じる不安定化学種の電子構造や反応性の解明をめざして研究を行っています。最近は金属ポルフィリン複合系における光誘起電子移動反応やフタロシアニン錯体の電子移動反応のダイナミックスの解明などに取り組んでいます。

2．博士課程における教育研究について

本博士課程においては、近年注目されている地球環境問題を念頭におき、自らの専門分野である化学を基盤として環境科学の研究成果を学校教育にいかに普及させるかという課題に取り組みたいと考えています。地球環境の保全と人類社会の持続可能性への展望の提示が現在の学術界に課せられた大きな課題であり、サステイナビリティ学の学校教育への展開という観点から博士課程での教育研究に関わっていきたいと考えています。

3．担当講義について

【科学技術活用論】

現代文明は最先端の科学的知見に基づいて作り上げられたさまざまな技術に依拠しています。学校教育においては、科学技術の負の側面に留意しつつ、それらを適切に伝授し、その適正な活用に関する理解の増進を図る必要があります。このような観点で、化学の分野における科学技術の活用について解説を行います。

【理科教育内容論研究】

近年、地球環境が悪化の一途を辿っています。学校現場では次世代を担う人材の養成のために、このような地球環境問題への関心を喚起するとともに、問題を正確に理解し、持続可能な社会の構築のための処方箋を考える必要があります。本授業では温室効果や低炭素社会実現を目指した代替エネルギー開発などを題材として、持続可能な社会の構築のための戦略の学校教育への展開を検討します。

4．主要な研究業績（2017年4月以降）

1）Structure Dependence of Intramolecular Electron Transfer Reactions of Simple Dyads of Zinc(II) Porphyrin Complex Bearing a Peripheral Bipyridine Moiety, K. Sakakibara *et al., Dalton Trans.* **2017**, *46*, 12645.
2）Behavior of Ionic Liquids Around Charged Metal Complexes: Investigation of Homogeneous Electron Transfer Reactions between Metal Complexes in Ionic Liquids, T. Mabe *et al., J. Sol. Chem.* **2018**, *47*, 993.
3）Intramolecular photoinduced electron transfer reactions of zinc(II) porphyrin dyads studied with a sub-ns time resolution, K. Sakakibara *et al., Journal of Porphyrins and Phthalocyanines* **2020**, *24*, 1099.
4）Colorimetric and fluorometric determination of boron using β-diketone–BF2 compounds containing catechol moiety, Y. Sobue *et al., Talanta Open* **2021**, *4*, 100076.

5．主要な社会活動業績

1）愛知教育大学連携公開講座講師「環境科学と日常生活の関わり」
2）名古屋市立向陽高等学校SSH運営指導委員会委員
3）日本化学会東海支部幹事（2018-2019年度）

飯 島 康 之

所　　属　愛知教育大学教育学部数学教育講座
職位・学位　教授　教育学修士
博士課程分野　自然系教科学
担当科目　数学教材論研究
研究テーマ　動的幾何ソフトを中核とした教育用ソフト開発・コンテンツ開発・授業研究、数学教育

１．これまでの教育研究について

数学教育学に関する研究を行っています。中核は、Geometric Constructor（GC）という動的幾何ソフト（作図ツール）です。DOS版（1989-）、Windows版（1996-）、Java版（2000-）、html5版（2010-）を開発しました。附属学校の他さまざまな学校と連携して授業研究を行い、動的幾何ソフトが数学教育に及ぼす影響を、教材研究、カリキュラム研究、授業研究など幅広く、理論的かつ実践的に研究しています。

２．博士課程における教育研究について

2010年から開発に着手したGC/html5は、いろいろな意味での先進性を研究する中核になっています。html5+JavaScriptで開発することによって、次世代の教育用ソフトのあり方を具現化しています。複数の点を同時に動かせることなど、操作性と数学的活動との対応づけもできます。４人１組での学習の場で利用することによって言語表現の活性化が期待されます。また附属学校・公立学校の実際の授業で検証し、理論的かつ実践的に明らかにすることに取り組んでいます。

３．担当講義について

【数学教材論研究】

数学教育において、数学的問題解決に対して汎用のソフトを開発・利用することで、その改革を目指すさまざまな研究に注目します。ソフト開発、コンテンツ・教材開発、授業研究、認識論的研究などのさまざまな領域において､それらの研究がどのように行われているのかを文献で明らかにするとともに、GCに関する実際のコンテンツ・教材開発や授業研究に接し、理論的かつ実践的に研究します。数年前からはSTEM教育の中での数学のあり方も模索しています。

４．主要な研究業績（2015.4 - ）

Y. Iijima, Ch. 64 Teaching and Learning Mathematics and communication technology in Japan - the case of Geometric Constructor, Bharath Sriraman et al (eds), The First Sourcebook on Asian Research in Mathematics Education : China, Korea, Singapore, Japan, Malaysia, India (International Sourcebooks in Mathematics Education), 1437 – 1553, 2015

飯島康之, 作図ツールGC/html5の開発―HTML5＋JavaScriptによる教育用ソフト開発の可能性―, 科学教育研究vol.39, pp.161-175, 2015

飯島康之, 作図ツールGC/html5を用いた数学的探究における精度・誤差について - インターラクティブな探究に向けて - ,教科開発学論集 4, 111-121, 2016

飯島康之, GC を使った数学的探究における事実と問いのダイナミズム －対応表をもとに進める数学的探究に関するケーススタディを基にして－ , イプシロン, 61, 9-24, 2019

飯島康之, GCの「条件を満たす点の集合の自動描画機能」を使った数学的探究－数学的探究に関するケーススタディを基にして－, イプシロン, 62, 33-42, 2021

飯島康之, ICTで変わる数学的探究, 明治図書, 2021

飯島康之, 数学的探究のサイクルと「データ」の役割について- 統計と図形に関するケーススタディを基にして-, イプシロン, 63, 1-20

小　谷　健　司

所　　属　愛知教育大学 教育学部 数学教育講座
職 位 ・ 学 位　教授・博士（理学）
博士課程分野　自然系教科学
担 当 科 目　科学技術活用論、数学教育内容論研究、
　　教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ
研 究 テ ー マ　数学教材開発，常微分方程式論

１．これまでの教育研究について

私の研究分野は常微分方程式論です。常微分方程式とは微分を含む方程式で、自然科学の研究に大いに役立っています。私は常微分方程式を幾何学的に考える問題に興味を持ち、長年研究を行ってきました。同時に、教育学部の学生たちと身近な事象に現れる数学的な問題についても研究してきました。このことについても、いくつかの結果を残しています。

２．博士課程における教育研究について

私は長年、身近な事象に現れる私は数学について研究してきました。このことを生かし、学生のみなさんと新たな数学教材を作り出したいと思っています。

３．担当講義について

【科学技術活用論】

数学的な考え方・数学的な問題解決の仕方について、身近な事象に現れる数学を題材として授業したいと思います。内容は受講者の経歴等によって柔軟に変更します。

【数学教育内容論研究】

授業内容の１つめは、数学を教えるうえで知っておくべきことです。例えば、人類は実数を２千年以上のむかしから使ってきました。しかし、その正体について詳しく理解している人は少ないと思います。授業内容の２つめは、身近な事象に現れる数学についてです。内容は受講者の経歴等によって柔軟に変更します。

４．主要な研究業績

１）高校訪問授業の記録 15ゲームを数学的に考える, イプシロン61 (2019), 63-68.
２）Relations between two generalized pi's, 愛知教育大学研究報告, 自然科学編 68 (2019), 1-3.（Luey Sokea 氏との共著）
３）ビー玉の数学, イプシロン 60 (2018), 51-58.

５．主要な社会活動業績

１）新城市教育委員会「数楽チャレンジ大会」実行委員会 顧問（2001年～現在）
２）愛知県立刈谷高等学校SSH運営指導委員会委員（2014年～現在）
３）国際協力事業団 短期専門家（数学教育）（2001年７月31日～９月８日）
４）国際協力事業団 短期専門家（数学教育）（1999年３月28日～４月９日）

大　鹿　聖　公

所　　属　愛知教育大学教育学部理科教育講座
職位・学位　教授・博士（学術）
博士課程分野　自然系教科学
担当科目　科学技術活用論・理科教材開発論研究
　　教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ
研究テーマ　理科教材開発、環境教育・ESDカリキュラム

１．これまでの教育研究について

小･中･高等学校の理科教育に関わる教材開発に取り組んでいる。実験観察活動を基盤とした教材から、モデルやシミュレーションなどを取り入れた児童・生徒の主体的な活動を育む教材など幅広く取り上げて開発している。また、理科教育における理解促進のため、科学館や博物館などの社会教育施設との教育連携に関する研究にも取り組んでいる。現在では、理科教育にとどまらず、環境教育、ESD、SDGsといった持続可能な社会における科学教育に関するカリキュラム開発や教育実践に関する研究にも取り組んでいる。

２．博士課程における教育研究について

21世紀の現代は、科学技術の発展と地球環境問題の複雑化によって持続可能な社会に貢献する科学技術人材が求められている。そのため、主体的に自然科学や科学技術に取り組み、科学的な探究を実践する児童・生徒の育成が急務である。そのために、科学教育として、どのような教材や指導法を提供することが適切であるのか、また、未知の課題を探究するために必要な資質・能力とは何か、それらについて、歴史的な研究背景を省察しながら、研究を進め、実践的な教育研究に取り組んでいる。

３．担当講義について

【科学技術活用論】

現代は、Society5.0を目指し、さまざまな分野で科学技術が発展・進歩している。自然科学・科学技術がどのような社会背景の中で進展し、科学教育に影響を与えてきたか、科学技術と科学教育の関わりから、俯瞰して解説を行う。

【理科教材開発論研究】

理科授業では、自然科学の概念理解のために様々な教材が開発、利用されている。それぞれの自然科学分野における教材開発の歴史を辿りながら、また、児童・生徒の科学概念の状態を踏まえながら、教材開発に必要な目的、方略、実践について、具体的にトピックを選択しながら、議論を深める。

４．主要な研究業績

１）「協働学習を導入した中学校理科カリキュラムの開発―対面的－積極的相互作用の活性化による効果を中心にして―」『愛知教育大学研究報告 教育科学編』. 71, 125-133.(2022)（共著）
２）「エネルギーミックスを扱ったシミュレーション活動教材の開発－中学校理科「科学技術と人間」での授業実践を通して－」『愛知教育大学研究報告教育科学編』. 69, 153-161.(2020)（共著）
３）「中学校理科においてキャリア教育の視点を取り入れた リーフレット教材の開発と授業実践」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』. 4,153-159.(2019)（共著）
４）「小学校理科「植物の発芽、成長、結実」におけるファストプランツを用いた授業実践とその効果」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』. 4, 97-104.(2019)（共著）

５．主要な社会活動業績

１）日本生物教育学会理事・副会長（2016.１.～現在）
２）一般社団法人SDGsコミュニティ理事（2019.４.～現在）
３）名古屋市環境審議会委員（2019.４.～現在）
４）愛知県教育委員会科学の甲子園ジュニア大会副委員長（2014～現在）

寺　本　圭　輔

所　　属　愛知教育大学教育学部保健体育講座
職位・学位　准教授・博士（人間環境学）
博士課程分野　創造系教科学
担当科目　教科開発学実践論・保健体育内容論研究
研究テーマ　健康科学、発育発達、水泳

1．これまでの教育・研究について

私の研究分野は運動生理学及び水泳である。運動生理学的研究では、主に小児期の発育発達と生活習慣や運動習慣、エネルギー代謝をテーマとして研究を行っている。また、近年では発展途上国（カンボジア）の小児の発育調査や身体測定の普及にも取り組んでいる。水泳研究では、学校水泳や初心者の教授法や教材開発をテーマとして研究を行っている。

2．博士課程における教育・研究について

子どもたちの体力低下やその下げ止まり、メタボリックシンドロームやロコモティブシンドロームの低年齢化は既知であるが、時代に即した適応ではないのか？とも考える。子どもたちの健全発育としての適切な動きやその巧みさとそれに関わる要因、悪とするならどのように学校教育や日常生活で改善できるのか、考えていきたい。また、水泳＝泳法として行われる水泳教育の弊害によって多くの水泳嫌いを招いている。水泳教育は本来どうあるべきか、考えていきたい。

3．担当講義について

【教科開発学実践論】

授業参加者・担当教員が様々な専門領域を持っている中で自分の研究テーマを発表することは、多くの新たな気づきが得られる機会となると考える。当たり前と考えていたことが覆されたり、自分の専門領域のみでは大きな壁であったことが学際的視点により大きく進むこともある。本授業がそのきっかけとなればと考えている。

【保健体育内容論研究】

保健体育・健康科学に関する課題を運動生理学及びバイオメカニクス的観点から提起し、議論していきたい。特に、子どもたちの発育や動きの現状、それを改善する策を教科開発学の観点から授業参加者で考えたい。また、水泳のみならずそれぞれの本来の運動ついての系統的学びと学校教育の現状と課題についても議論したい。

4．主要な研究業績

1）著書

〈単著〉

「水泳＝泳法」ではない水泳教育－水中環境における系統的学びの展開－. 教科開発学を創る, 第3集, 愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻篇, 2021.

2）論文

・幼児期における全身反応時間の年齢差の検討および脚伸展筋力との関係. 発育発達研究, 87, 1-9, 2020.
・短期間の中強度トレーニングが内臓脂肪蓄積及び筋内脂肪に及ぼす影響. 人間と生活環境, 28(1), 2021.
・児童における投動作の短期間学習が投能力の性差に及ぼす影響. 愛知教育大学愛知教育大学研究報告.芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編, 第69輯, 2021.
・Physical Growth of Primary School Children in Cambodia. Int. J. School Health, 8 (1), 18-27, 2021.
・A Cross-Sectional Study for a Reference Model of Body Composition in Japanese Children Aged 3 to 10 Years. Int. J. School Health, 9(1), 2-12, 2022.
・計量テキスト分析を用いた教員志望学生の水泳に関するイメージと好嫌度の要因に関する検討. 愛知教育大学愛知教育大学研究報告.芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編, 第70輯, 2022.

5．主要な社会活動業績

愛知県健康推進学校審査委員、三重県水泳連盟医科学委員会委員長

山　田　浩　平

所　　属　愛知教育大学教育学部養護教育講座
職位・学位　准教授　博士（スポーツ健康科学）
博士課程分野　創造系教科学
担当科目　保健科教育論研究、教育評価実証方法論
　　教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ
研究テーマ　学校保健学、健康教育学、保健科教育学

１．これまでの教育研究について

生活者の自発的な健康行動の獲得というテーマのもと、対象者のQuality of Life（生活の質）の向上に焦点をあてた行動変容の研究を続けてきています。特に、児童・生徒・学生に視点をあて、現在、学校現場で注目されている生活習慣改善に対する意志決定や問題解決能力の育成、対人葛藤場面における対人関係能力との関わり、さらには保健授業のための指導資料や学習法、教材開発などに着目した研究をしてきました。これらの研究を背景にして、養護教諭や保健体育科教員を目指す学生たちの現代的健康課題に対応した学校健康教育の方法を具体的に教示しています。

２．博士課程における教育研究について

発育発達期にある児童・生徒等の学校生活が楽しく健康に送れるように、また生涯にわたって健康に過ごせるように、学校ではさまざまな活動を行っています。これらの活動は、保健教育と保健管理に分けられ、両領域の円滑な運営を図るための保健組織活動があります。具体的には、特別活動等における保健の指導、健康観察や健康診断などの活動が挙げられます。ここでは保健教育に視点をあて、保健教育の目標、内容、方法、評価方法について研究を進めています。

３．担当講義について

【教育評価実践方法論】

学校教育における児童生徒へのさまざまな指導や教育方法について、その妥当性や効果を科学的に検証することは教科開発の観点から非常に重要です。ここでは、学校で行われる健康教育（保健教育）に対する評価方法を取り上げ、その概要を解説します。

【保健科教育論研究】

保健教育には、限られた時間数の中で子どもたちに生涯にわたって自らの健康を守る能力を身につけるという目標があります。そのため、まず保健教育が何を目指すのかを解説した後に、学習内容や方法について演習を含めて解説します。

４．主要な研究業績

<著書>

１）保健科教育法入門：第２章第５節「授業スタイルを考えよう(p68-77)」, 大修館書店, 2018
２）学校保健ハンドブック：第２章第２節「学習指導要領に基づく保健の指導(p66-70)」, ぎょうせい, 2019
３）保健科教育学の探究：第２部第３章３節「実践研究の事例(p317-322)」, 大修館書店, 2021
４）学校保健：第１章第５節「児童・生徒の健康状態(p41-54)」, 第２章第１～５節「学校における保健教育(p55-106)」, 第５章第６節「学校保健と地域との連携(p251-261)」, 大学教育出版, 2021

<学術論文>

２）対人葛藤場面での断り行動に対する自己効力感と社会的スキル及びユーモア対処との関わり, 学校保健研究,第54巻３号, 203-210, 2014（2014年度日本学校保健学会奨励賞受賞）
３）自己認識スキルを効果的に形成するための学習指導過程の開発 －認識形成と自己効力感形成の導入効果－, 思春期学, 第31巻４号, 316-324, 2015
４）Effective Teaching - Learning Process for Training Life Skills, Official Journal of School Health, Vol.9, 45-58, 2016
５）中学生における目標意識と生活習慣および生きがい感との関連, 東海学校保健学研究, 40巻１号, 89-96, 2017

５．主要な社会活動業績

国立教育政策研究所教育課程研究センター（学習指導要領作成に関わる専門委員）、愛知県健康推進校審査委員、日本オリンピック委員会（医・科学スタッフ）、日本学校保健学会代議員、日本保健科教育学会理事

鈴　木　英　樹

所　　属　愛知教育大学教育学部保健体育講座
職位・学位　教授　博士（スポーツ科学）
博士課程分野　創造科学系
担当科目　教育評価実証方法論
　　体育教材開発論研究
研究テーマ　運動生理学、筋生理、走運動分析

１．これまでの教育研究について

保健体育の教員として主に運動生理学に関連した授業と研究を行ってきました。研究は主に骨格筋の可塑性に関する研究を行っています。発育発達時の骨格筋の変化をはじめ、瞬発性・持久性運動に対する骨格筋の適応変化、不活動に伴う筋萎縮の研究を行ってきました。現在は、筋萎縮からの回復に着目した研究を行っています。一方で、数年前からは、子どもの走能力を高めるための有効な指導方法を検討するために、動作解析法を用いた研究を行っています。

２．博士課程における教育研究について

教材開発にあたり、子どもの実態を理解することは重要であると考えられます。専門である生理学的・運動生理学的見地から子どもを理解するために、学術論文や研究報告等のデータを用いて概説する計画である。特に発育期を中心に、身体的な変化や運動に対する適応変化について理解を深めて欲しいと考えている。

３．担当講義について

「教育評価実証方法論」:

子どもの発育・発達における身体的・機能的変化について、過去の研究報告のデータ等を参考に概説すると共にともに、受講者の研究課題に関連した内容について評価の観点からも議論する予定である。

「体育教材開発論研究」:

運動の実施が子どもをはじめとしたヒトの形態的、機能的特性に及ぼす影響について過去の論文や研究報告等を参考に、運動に対する適応変化を概説する。

４．主要な研究業績

＜骨格筋に関する研究＞

Suzuki H, Tsujimoto H, Shirato K, Mitsuhashi R, Sato S, Tachiyashiki K, Imaizumi K: Clenbuterol attenuates immobilization-induced atrophy of type II fibers in the fast-twitch extensor digitorum longus but not in the slow-twitch soleus muscle. Global Journal of Human Anatomy and Physiology Research, Vol1, pp10-17, 2014

Suzuki H, Kitaura T: Attenuating effects of clenbuterol, β_2-agonist, on immobilization-induced atrophy of rat hindlimb muscle fibers. Journal of Physical Fitness and Sports Medicine, Vol4(5), pp363-367, 2015.

Suzuki H, Yoshikawa Y, Tsujimoto H, Kitaura T, Muraoka I: Clenbuterol accelerates recovery after immobilization-induced atrophy of rat hindlimb muscle. Acta Histochemica, Vol122, 151453, 2020.

＜走運動に関する研究＞

中野弘幸，鈴木英樹：短距離走における回復脚の評価方法に関する研究．愛知教育大学保健体育講座研究紀要，第42巻，25–29, 2018.

中野弘幸，山本慎太郎，縄田亮太，鈴木英樹：小学生の体育授業における短距離走指導に関する研究．愛知教育大学研究報告，第68輯, 47–50, 2019.

中野弘幸，大松由季，黒須雅弘，鈴木英樹：幼児を対象とした短距離走指導の影響　－腕振り，ピッチ，ストライドに着目して－，愛知教育大学研究報告，第70輯, 41–45, 2021.

５．主要な社会活動業績

日本体力医学会評議員
豊田市立豊南中学校，学校アドバイザー

村　越　　真

所　　属　静岡大学学術院教育学領域
職位・学位　教授　博士（心理学）
博士課程分野　教育環境学
担当科目　学校危機管理論研究、教育フィールド調査論、
　　教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ
研究テーマ　リスク認知、学校の危機管理、リスクマネジメント、空間認知、安全教育、

１．研究ハイライト

①不確実性の高い環境の中で、人はどう賢く問題解決をしているのか？
②主体的、対話的な安全・防災教育の探求
③リスクの高い環境でのリスクマネジメントの実践知

上記３テーマがここ20年間の研究の柱としてきた。①は主として1990年代に空間認知･ナヴィゲーションを対象として研究した（村越、1991、1995；Murakoshi、1990、1994、Murakoshi、1997；村越、2004等）がある。2000年以後は、②③を主たるテーマとして、**子どもや教員・指導者がどのように危険を認知しているのか**、そこにどのような**安全上の課題があるのか**（村越、2004、2006、2008）、**危険を回避するスキルを育成する上で有効な教育方法はどのようなものか**を実践・実験の両面から検討した（2011、2015；村越・小山・河合、2016）。また、**自然体験・アウトドアスポーツでの事故の実態、活動者の危険認知や対処能力**についての研究も行った（村越、2010、2013、2016；村越ら、2014）。2016年からは、自然環境の中でリスクに気づき対処する認知プロセスの実証研究を進め、高齢者のリスク特定能力が低下する結果を得た（村越、2017）。また、**過酷な自然環境のリスクに対する知識や実践知**の研究を行っている（村越、2021）。実践面でもこれらの成果を山岳遭難対策協議会、登山団体への啓発活動、教育現場の研修などに活用してきた。

２．今後の研究の展開と博士課程における教育研究

最近の主要な研究成果は、①村越真（2017）登山者のリスク特定能力の実態：登山道を対象としたKYT図版による検討.野外教育研究, 21(1), 1-15、②村越真・満下健太（2020）過酷な自然環境でのリスクマネジメントの実践知. 認知科学、27(1), 23-43、③満下健太・村越真（2020）リスクに見出される教育的意義：３相因子分析法による小学校の体育的活動に対するリスク認知と教育的意義の関連の検討.体育学研究、28 (1), p.13-21.がある。

①では、登山道のKYT図版による登山者のリスクリテラシーの実態を明らかにした。②では、南極観測隊の安全管理隊員への聞き取りから質的研究法によってリスクの特性に応じたマネジメント方略の実践知を明らかにした。③でリスクと教育的意義の関係（満下・村越、2018、2020）や、ハザードマップを使った防災教育の実践について学生指導を行っている（望月・村越、2022）。

2019～2021年の南極地域観測において､日本の南極観測で正式に採用された初の人文社会科学研究｢リスク対応の実践知の把握に基づくフィールド安全教育プログラムの開発｣の研究代表者を務めた。また、幼稚園にリスキーな遊具を設置した時の幼児や保育者のリスクに関わる実践知を科研挑戦的萌芽により2021年より実施している。見かけ上の過酷さの違いを超えた**挑戦的活動におけるリスクマネジメントの統一的な原理の発見・構築**が今後の課題である。これらの成果は、**パーソナルなリスクマネジメントの理論構築とそれを踏まえた研修プログラムの開発**につながると期待できる。また、教育の世界でリスクマネジメントやリスクコミュニケーションをどのように取り入れていくかといった政策的な視点も視座に入れ、研究を進めている。

村　山　　功

所　　属　静岡大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻
職位・学位　教授　教育学修士
博士課程分野　教育環境学
担当科目　教科開発学原論（分担）、教育工学論研究
研究テーマ　認知心理学、学習科学

1．これまでの教育研究について

これまで、現行学習指導要領と全国学力･学習状況調査に基づく授業改善について、研究や助言を行ってきました。その成果の一部を『平成30年度調査　全国学力・学習状況調査における中学校理科と教科書の活用』として公表し、また2019年３月３日の教科開発学研究会において「全国学力・学習状況調査に見る中学校理科授業の実態」として発表しました。

また、新学習指導要領に対応した授業づくりについても研究を進めており、途中段階ではありますが「教育目標・内容、指導方法、学習評価の一体化に向けて　－新学習指導要領における『主体性』を中心に－」にまとめました。現在は、主体的に学習に取り組む態度の評価についての検討を行っており、本年度中には論文にまとめるつもりです。

一昨年度からコロナウィルス対応のためにe-learning化を始めて、その都度改善に努めています。LSMのインタフェースが英語化できるため外国籍の院生には受講しやすいという発見がありました。

2．博士課程における教育研究について

主指導教員として、院生が博士論文を書くことができるよう、計画的に働きかけていきます。特に、学術誌へ論文を掲載できるよう研究を支援していきます。昨年度から引き続き、教科開発学原論(分担)や教育工学論研究のe-learning化に取り組みます。一昨年度は受講生のネットワーク環境を考えて動画の使用を抑制してきました。本年度は動画教材化を行う予定でしたが、作業負担が大きくて進んでいません。一方、学習の質保証のため、確認テストを入れるなどの改善は進めています。

3．担当講義について

【教科開発学原論（分担)】

本専攻の導入科目にあたるため、博士論文執筆に向けた体制作りについて解説しています。

【教育工学論研究】

教育を再現可能な現象として捉え、工学的にアプローチする方法を紹介します。分野としては、インストラクショナル・デザイン（ID）に相当します。ただし、IDに関する教科書のほとんどは肝心のインストラクションの部分が不十分なため、この部分を学習科学の知見で補完しています。今後は、評価についても力点を置くつもりです。

4．主要な研究業績（2017.4～）

1）「附属静岡中学校の研究史と次期学習指導要領　－共同研究者から見た姿－」, 村山功, 静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学編), 68, 155-166, 2018/03.
2）「教員養成スタンダードから見た教育実習　－静岡大学教育学部附属静岡中学校の場合－」, 村山功, 静岡大学教育実践総合センター紀要, No.28, 335-341, 2018/02/28.
3）『平成30年度調査　全国学力・学習状況調査における中学校理科と教科書の活用』, 大日本図書, 全48ページ, 2018/12
4）「教育目標・内容、指導方法、学習評価の一体化に向けて　－新学習指導要領における『主体性』を中心に－」, 村山功, 静岡大学教育実践総合センター紀要, No.30, 194-201, 2020/03/31.

5．主要な社会活動業績

1）静岡県学力向上推進協議会長
2）公益社団法人全国学校図書館協議会理事
3）裾野市教育振興基本計画検討委員長

鎌　塚　優　子

所　　属　静岡大学教育学部養護教育専攻
職位・学位　教授・博士（教育学）
博士課程分野　創造系教科学
担当科目　教科開発学実践論,養護実践教育学研究
　　教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ　学校保健学,養護実践教育学、健康相談・健康相談活動

１．これまでの教育研究について

23年間の養護教諭としての教育実践を基盤とし、主に養護教諭でなければ得られない独自の視点について「心の問題への気づき」という観点で探究してきました。世界に類をみない教育職である養護教諭の専門性とは何かを近接研究分野・領域と連携、協働し、かつさまざまな研究方法を模索することで、より創造的、発展的な研究結果を導き出していくことを重視しています。

２．博士課程における教育研究について

本博士課程では、学校保健、養護教諭の教育実践研究について、未だ発展途上にある養護教諭に関わる学問構築に寄与する研究を行いたいと思います。養護教諭の専門性とは何か、養護とは何かについて、歴史的背景を踏まえ、現在の養護実践、今後予測される養護実践のあり方について探求していきます。また学校保健の視点から子供たちのさまざまな心身の健康課題解決のために、実践的観点を理論から考察し、今後の学校保健のあり方について考えて行きたいと思います。

３．担当講義について

【養護実践教育学】

養護の歴史や制度、養護の捉え方・養護教諭の実践、養護に関する近接領域の研究などに関する研究成果や文献をもとに、養護の目的・機能・方法についての文献を分析し議論を通じて理論構築を図ります。また養護実践、養護教育のあり方や方向性、学問構築について討議し、更に、養護教育のあり方と現職養護教諭の研修課題についてについて分析し考察します。

４．主な研究業績（2020.4.～）

1）学びの継続性を意識した小学校・中学校における保健教育に関する研究－学習内容の印象に関する実態調査を手がかりとして－深澤多恵, 鎌塚優子, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 272-279, 2020
2）学級担任と養護教諭の連携・協働のための学び－新しい教員養成カリキュラム・授業実践の取組み－, 梅澤収, 鎌塚優子, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 18-27, 2020
3）実習指導を行う養護教諭のための「養護実習サポートガイド」の作成と評価, 齋藤千景, 竹鼻ゆかり, 三森寧子, 鎌塚優子, 鹿野裕美, 埼玉大学紀要教育学部, 69(1) 65-75, 2020
4）養護教諭における性的マイノリティ児童生徒への対応の自信に関わる要因の検討－小学校, 中学校, 高等学校の比較－鎌塚優子, 玉井紀子, 井出智博, 松尾由希子, 山元薫, 細川知子, 日本健康相談活動学会誌, 15(1), 41-51, 2020
5）技能系教科における「思考・判断・表現」の 評価方法の研究－体育実践を事例として－, 新保 淳, 山崎朱音, 鎌塚優子, 教科開発学論集, 愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻, 8, 153-157, 2020
6）医療と教育の専門職養成における大学間専門職連携卒前教育の試みー合同ゼミナールの実践を通じてー, 鎌塚優子、竹下温子、雪田聡、中村美智太郎、片山はるみ、坪見利香、宮城島恭子、佐藤直美、山本真実, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 31 187-197, 2021
7）時代の変化を見据えた健康相談・健康相談活動のあり方, 鎌塚優子, 日本健康相談活動学会誌, 16(1)2-4, 2021
8）養護教諭の専門性を生かしたいじめへの対応ー気づきの感性を高めるー, 保健の科学, 9(63)591-595, 2021
9）養護教諭の年代層別キャリア形成に及ぼす要因の検討：仕事内容・組織風土の認知がキャリア形成意識へ及ぼす影響に着目して, 鎌塚 優子, 籠谷恵, 満下健太, 渋江かさね, 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 32, 102-108, 2022

５．主な社会的活動業績

1）日本養護教諭養成大学協議会　理事（2018年度～現在）
2）日本健康相談活動学会　理事（2018年度～現在）・日本健康相談活動学会編集委員会委員（2004年度～現在）日本健康相談活動学会第16回学術集会　学会長　（2020年２月）
3）日本学校保健学会　評議員（2019年度～現在）
4）東海学校保健学会　理事・評議員（2013～現在）

香　野　　毅

所　　属　静岡大学教育学部特別支援教育専攻
職位・学位　教授　博士（心理）
博士課程分野　教育環境学
担当科目
研究テーマ　特別支援教育　心理支援　動作法　子育て支援

１．これまでの教育研究について

特別支援教育専攻の教員として、障害をはじめとする支援ニーズのある人への支援教育について、主として心理学の立場から取り組んできました。障害種別としては、肢体不自由、知的障害、ASDをはじめとする発達障害、いわゆる情緒障害などが対象となりますが、障害種に特化した支援というよりも、生活や心理面の支援を前面に出すことで、あらゆる人を対象にできると考えています。支援の窓口としては「身体」や「動作」を得意としています。また家族支援や地域との連携などについて実践的な研究を進めてきました。

大学では、学部では肢体不自由児の心理や教育を、大学院では発達障害児の理解と対応を中心に授業を行っています。

２．博士課程における教育研究について

障害をはじめとする支援ニーズのある人への支援教育について、エビデンスのある方法の開発に取り組んでいきたいと考えています。加えて、それを支える仕組みや制度、人的環境といった面からも、学校や支援の場をいかに機能させていくかについて考えてみたいと考えます。

３．担当講義について

【教科開発学原論】

障害のある児者への支援について、アセスメントから実践、評価につながるサイクルについて、これまでの知見等を紹介しながら、一緒に考えていきたいと予定しています。

【特別支援教育研究】

障害のある人への指導支援の種々の方法や技法について深めていくとともに、その背景や構成等について理解を深めていきます。また学校や家庭といった関係機関がいかに機能していくのかについても考えてみたいと思います。

４．主要な研究業績

１）「緊張が高い子どもへの理解とアプローチ」　発達教育　2014年５月　Vol.33 No.5 pp.4-11
２）「発達障害のある子どもの姿勢と動き」教育と医学　2015年３月　No.741 pp.58-64
３）「肢体不自由者の持つニーズの年齢段階による変化　－保護者への質問紙と聞き取りによる調査から－」　特殊教育学研究　第54巻２号　2016年７月　pp.77-86
４）「学齢児を持つ保護者の相談ニーズに関する調査研究」静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要　2017年３月　第26号　pp.1-7　香野　毅・大石啓文・田代　篤・坂間多加志
５）「『学習に向かうからだづくり』のためのアセスメントツールと指導プログラムの開発」静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要　2020年３月　第30号　pp.1-9　山下憲市・香野　毅
６）「Developing and Evaluating Teaching Material for Information Technology Moral Education for High School Students with Special Needs」International Journal of Information and Education Technology, Vol. 10, No. 4, April 2020. Misaki Hashizume, Takeshi Kono, and Shingo Shiota
７）「障害のある子どもたちの新たな学びの場としての放課後等デイサービス　－連携と専門性という課題に焦点をあてた調査と実践事例－」　教科開発学論集　2021年３月　第９号
８）「肢体不自由者を中心とした障害者臨床・療育におけるアセスメント」2020年５月　静岡学術出版

５．主要な社会活動業績

１）小中高等学校、特別支援学校、幼保こども園　等研修講師　多数
２）NPO法人しずおか福祉の街づくり　理事

中村　美智太郎

所　　属　静岡大学学術院教育学領域
職位・学位　准教授・博士（学術）
博士課程分野　教育環境学
担当科目　教育プログラム開発論
研究テーマ　美的教育思想、情報倫理、道徳教育、キャリア教育

1．これまでの教育・研究について

倫理的なものと美的なものとの接合領域への関心から研究しています。最近は、情報倫理･生命倫理･スポーツ倫理といったいわゆる応用倫理や、またマイノリティ・遊び（遊戯）・リスク・安全・市民性・討議方法等についても検討しています。このベースには、近代ドイツ教育思想についての関心があります。18世紀を中心とした特にドイツの教育思想の文脈での主な研究対象は、美的教育思想を展開したFr・シラーです。彼が大きく影響を受けた古代ギリシア思想との関係や「書簡」を媒介とした同時代の人びととの交流も含め、彼の思想の起源を明らかにしつつ、現代までの展開を跡付けるべく、研究を進めています。

2．博士課程における教育・研究について

情報倫理・道徳教育・キャリア教育が抱える現代的な諸課題を射程に入れつつ、学校を中心とした教育機関での学びにおいて、私たちはどのように人間形成を行うのかをテーマに研究しています。「学校とはなにか」「学びとはなにか」「教育とはなにか」といった根本的な、かつ一義的な解のない問いに対して応答しようと試みています。

3．担当講義について

【教育プログラム開発論】

特にキャリア教育や道徳教育の視点に立って理論・歴史と実践を往還しながら、教育プログラムの開発方法・検証等についての検討を行います。

4．最近の主な研究業績

・中村美智太郎（2021）「情報圏における道徳的行為者と道徳的コミュニケーション－情報倫理のアプローチに基づいて」『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）』第72号，pp.183-194。
・中村美智太郎・竹内伸一・鎌塚優子（2021）「『ケースメソッド教授法に基づく道徳教育』を再構築する試み－オンライン授業提供・学校外教育体制・教育NPO法人連携・教職課程学生参画の4アプローチに基づいて」,『静岡大学教育実践総合センター』第31号，pp.41-54。
・酒井郷平・田中奈津子・大島安紀子・中村美智太郎（2020）「教員と教員養成系大学生を対象とした中学生の行動基準要因への認識に関する調査的研究－考え，議論する『モラル教育』を実践できる教員の育成を目指して」,『静岡大学教育実践総合センター』第30号，pp.28-38。
・中村美智太郎（2020）「情報環境における道徳的行為者の『責任』と『答責性』」,『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』第52号，pp.43-55。
・中村美智太郎（2019）「『遊戯』の領域と『忘我』－シラー『美的教育書簡』における美的差異の問題」,『唯物論』第93号，pp.84-98。
・中村美智太郎（2018）「連帯可能性としてのリスク・コミュニティへの視座－再帰的近代化と道徳のリスクの問題」,『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）』第69号，pp.149-161。
・中村美智太郎・鎌塚優子・竹内伸一編著（2022）『探究的な学び×ケースメソッド－教育イノベーターのための新しい授業チャレンジ』学事出版。
・武井敦史編著・中村美智太郎他共著（2021）『地場教育－此処から未来へ』静岡新聞社。
・藤井基貴・村越真・中村美智太郎・塩田真吾・満下健太・安永太地（2021）『自律的思考を促すスポーツ・インテグリティ教育－理論と実践の構築を目指して』静岡学術出版。
・中村美智太郎･鎌塚優子･竹内伸一･岡田加奈子編著（2018）『とことん考え話し合う道徳－ケースメソッド教育実践入門』，学事出版。

5．主要な社会活動業績

・学校図書教科書編集委員（「小学校・中学校道徳」）
・御前崎市スクラム運営委員会委員
・静岡大学教育学部附属島田中学校研究評議員
・文部科学省中央教育審議会専門委員　他

白　畑　知　彦

所　　属　静岡大学教育学研究科共同教科開発学専攻
職位・学位　教授　博士（文学）
博士課程分野　人文・社会学系教科学
担当科目　外国語教育論研究、教育プレゼンテーション論、
　　教科開発学セミナーⅠ, Ⅱ, Ⅲ
研究テーマ　言語理論・言語習得理論に基づく外国語教育学の研究

1．これまでの教育研究について

大学院生の頃より、ずっと第二言語習得の研究をしてきました。第二言語習得には次のような特色があります：(a)母語からの転移がある（そして、上級者になってもしつこく残るものと、そうでないものとがある)、(b)教室で教科書を使用しながら学習する場合であっても、体系的に習得が進んでいく（一方で個人差も生じる)、(c)特に成人学習者の場合、習得が不完全な状態で停滞してしまう場合が多い。このような現象は私にとってとても不思議で興味深い現象であり、理論的に説明したいと考えています。第二言語としての日本語習得研究にも興味があります。その他、習得研究成果の外国語教育への応用、外国語としての英語教授法、外国語学習論、児童英語教育論、外国語学習評価論、英語教育課程論などの領域にも興味を持って研究してきました。

2．博士課程における教育研究について

基本的にはこれまでの研究の方向性と変わりませんが、「外国語教育学における教科開発学とは？」というテーマを常に念頭に置きながら、学生を指導し、自らも研究をおこなっていきたいと考えています。

3．担当講義について

【教育プレゼンテーション論】

本講義は小南先生と二人で担当している科目です。学会発表でのプレゼンテーション技術だけではなく、教室での授業の工夫、人前で話をする際の態度や心構え、準備の仕方など考察していきます。

【外国語教育論研究】

ある教え方が「良い」と主張する場合、その教え方の何が良いのか、本当に効果があるのか、単にユニークな教え方に過ぎず効果は望めないのか、きちんと調べないといけません。そのためにも言語習得理論をしっかりと学習していきたいものです。

4．主な研究業績（2021年度）

著書：

1.『英語教師がおさえておきたい ことばの基礎的知識』大修館書店　2021年11月１日. 230ページ（単著）

論文：

1．The Effects of Three L2 Vocabulary Learning Methods Through Reading Activity. *BEYOND WORDS Vol.9* No.1, 49-67.　Kodama, K. & Shirahata, T.　May 2021 Graduate School, Widya Mandala Catholic University Surabaya. Indonesia.
2．「第二言語習得研究から英語教育への示唆」『日本英語学会Conference Handbook』pp.99–103.
3．The acquisition of subject wh-questions by Japanese learners of English. *Second Language, vol. 20*. The Japan Second Language Association (J-SLA). 2020. 3

口頭発表：

1．「これからの小学校での英語教育について」2021年５月22日　磐田市しきじ土曜クラブ（招待講演）
2．「最新の教授法研究等：文法項目別・習熟度別指導法の提案」中部地区英語教育学会シンポジウム「英語教育の半世紀を振り返りこれからの英語教育を考える」　2021年６月26日　ズーム開催
3．「小中高（大）の英語教育の接続・連携―何が必要でどのように可能か？」全国英語教育学会シンポジウム　2021年８月８日　ズーム開催
4．「中学校英語科の指導を考える～小中連携を考慮して～」英語教育協議会（ELEC）2021年８月12日（招待講演）　ズーム開催
5．「日本語母語話者の英語非対格動詞の過剰受動化現象」教科開発学会（愛知教育大学・静岡大学大学院共同教科開発学専攻）　岡村明夢・白畑知彦　2021年８月21日　ズーム開催
6．「公開特別シンポジウム　今、英語教育を考える―英語に関わる研究の視点から―」日本英語学会シンポジウム　2021年11月13日　（招待）ズーム開催
7．「英語教師がおさえておきたい ことばの基礎的知識」中部地区英語教育学会三重支部例会　2022年３月13日　（招待）ズーム開催

黒　川　みどり

所　　属　静岡大学教育学部社会科教育講座
職位・学位　教授　博士（文学）
博士課程分野　人文社会系教科学
担当科目　歴史教材論　教科開発学原論　教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ　日本近現代史、思想史、歴史教育、マイノリティ、アジア認識

1．これまでの教育研究について

静岡大学では、日本近現代史、教科内容指導論、日本文化論、人権教育論などの授業を担当してきました。日本近現代史、思想史を専門としています。大正デモクラシー研究から出発し、民本主義から出発し無産政党の指導者となった大山郁夫の思想、第一次世界大戦後の国民統合政策、さらには部落問題をレイシズムの枠組みのなかで捉え返す試みや、近現代の差別の諸相を描きだす研究などを行ってきました。近年は、丸山眞男や竹内好を中心にすえて戦後思想史、知識人論に向きあう一方、歴史教育のあり方についても研究を進めています。

2．博士課程における教育研究について

本博士課程においては、人権論、思想史について検討を進めています。また、高校日本史の教科書執筆などをとおして考えてきた、義務教育・後期中等教育から教員養成大学における歴史教育の問題などを考えていきたいと思います。

3．担当講義について

【歴史教材論】

歴史教育、社会科教育のありようを見据えながら、歴史の理解のために有用な歴史教材を提供できるように、歴史学の方法論についての理解を深め、歴史学の基礎的な力を身につけることをめざしていきます。当面は、受講者の関心をも鑑みながら、中学･高校の歴史教科書などの検討を行い、議論を深めていきたいと考えています。

4．主要な研究業績（2021年度）

1）『講座　近現代日本の部落問題』全3巻、朝治武・内田龍史と共編、解放出版社
2）『人間に光あれ　日本近代史のなかの水平社』、藤野豊と共著、総232頁、2022年３月、六花出版
3）「部落問題の「無化」を問う」―水平社百年を前にして―」 第１回「部落問題をめぐる意識の〝いま〟」2021年８月15日、第２回「同和教育への「人権」への流し込み」2021年９月１日、第３回「M･ラムザイヤー論文から考える」2021年９月15日、第４回「人権問題の原点に立ち返って」2021年10月１日 『解放新聞埼玉』）
4）「人種主義としての部落差別」『福音と世界』2022年３月、pp.12-17
5）〈座談会〉「近代部落史からの論点」 駒井忠之・黒川みどり・渡辺俊雄　コーディネーター；朝治武（2021年11月29日）『部落解放』2022年３月掲載　pp.30-47
6）映画　人権を考える「考えてみよう差別の歴史」前近代・近代　映学社　監修；寺木伸明・黒川みどり

5．主要な社会活動業績

1）韓国外国語大学校　日本研究所　国際シンポジウム 「日本の社会権力とサバルタン―差別の表象と実在―」 報告「近代社会と部落問題」 2021年５月29日
2）日本倫理学会第72回大会共通提題 「「おそれ」と差別」 報告「おそれ・穢れと差別の歴史的・思想史的・社会的分析―近代における部落差別―」 2021年10月３日
3）wamセミナー　天皇制を考える（６）「近代天皇制がつくってきた差別―水平社宣言から100年を機に考える―」 2022年２月11日　主催　アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」

坂　口　京　子

所　　属　静岡大学教育学部国語教育講座
職位・学位　教授・博士（教育学）
博士課程分野　人文社会系教科学
担当科目　国語教育論研究、教科開発学原論
研究テーマ　国語教育史、言語教育論、国語科授業研究、国語科教師教育

１．これまでの教育研究について

専門は国語教育史研究です。特に戦後新教育期における経験主義教育の摂取と実践的理解の過程に着目し、カリキュラムや授業構想について研究してきました。現在の国語・国語科教育に関する教材、指導法、カリキュラム開発に関する研究や、国語科教師教育研究にも取り組んでいます。ここ数年は、言語力や思考力（中でも選択力）の育成を視点として、国語教科書や先進的実践の調査・分析を行なっています。

２．博士課程における教育研究について

以上に述べた教育研究を継続し、現在あるいは今後の国語教育実践を相対化し得る視点を歴史研究から学びつつ、それを常に再構築していくことに取り組んでいきます。また、教育の現実を真摯に捉えようとする際、自ずと見えてくる新しい研究領域と研究方法を追究していきたいと考えています。

３．担当講義について

【国語教育論研究】

国語・国語科教育について、教育課程・教育内容・教育方法の３点とその関連をどう図っていくかを軸に考察していきます。わが国の戦後国語教育史を概観した上で、現在の実践例を取り上げてその価値を考察します。受講者の関心も鑑みながら、教育実践の複合性とそのデザインについて論じます。

【教科開発学原論】

担当者のこれまでの研究について教科開発学の立場から再考し、それをもとに具体的な議論を進めます。教育の現実の捉え、研究領域と研究方法の妥当性、論構築の論理性について論議しつつ、教科開発学の内実と方法を追究します。

４．主要な研究業績（2019～）

１）「イスマニング・シュタイナー学校における言語力育成の実際」『静岡大学教育実践総合センター紀要』31号、2021
２）分担執筆『ことばの授業づくりハンドブック　探究学習』浜本純逸監修、幸田国広編集、溪水社、2020.4
３）分担編集『新たな時代の学びを創る　中学校・高等学校国語科教育研究』全国大学国語教育学会、東洋館出版社、2019.9
４）公益財団法人教科書研究センター「授業における教科書の使い方に関する調査研究委員会」（プレ研究：2018～2019年度、本研究2020～2021年度）国語部会委員
５）「教師の選書を視点とした読書指導の改善」『早稲田大学国語教育研究』38号、早稲田大学国語教育学会、2019.3

５．主要な社会活動業績

１）浜松市教育研究会主催研修会　講演「深い学びにおける「教科の本質的な内容」と教師の「結びつける力」」（2021.8.3）
２）焼津市立黒石小学校校内研修会講師（2021）
３）裾野市教育委員会指定研究発表会講師：裾野市立富岡第二小学校「関わり合いの中で主体的に学ぶ子～学びをたのしむ～」（2019.11）
４）駿東郡長泉町立長泉小学校校内研修講師（2019～2021）

熊 倉 啓 之

所　　属　静岡大学教育学部数学教育講座
職位・学位　教授　理学修士
博士課程分野　自然系教科学
担当科目　数学教育論研究　教科開発学原論
研究テーマ　教材開発論，小・中・高接続カリキュラム論

1．これまでの教育研究について

静岡大学に着任して以来、算数・数学科教育法等担当教員として、数学教育に関する教材、指導法、カリキュラムの開発に関する研究を行っています。これまでに、数学を学ぶ意義を実感させる指導法、数学的思考力・表現力を育成するための教材開発、小・中・高の接続カリキュラム、フィンランドと日本の数学教育との国際比較について、研究を深めています。また、最近は、長年にわたって教育課題とされている「割合の活用力」に関する研究を行っています。

2．博士課程における教育研究について

本博士課程においては、これまでの教育研究で行ってきたことを基盤としながら、さらに、指導の対象である「数学」の本質や歴史を踏まえた上で、近年注目されている数学的リテラシーについて考察を加え、数学的リテラシーを育成するための指導の在り方についても追究していきたいと考えています。

3．担当講義について

【数学教育論研究】

本授業では、算数・数学科の指導内容について、１）小・中・高の算数・数学科のカリキュラム、２）数学的な思考力・表現力の育成に焦点を当てた教材・指導法、３）数学を学ぶ意義を実感させる教材・指導法、の３点を中心に分析・考察します。

4．主要な研究業績（2020.4～）

1）”Spatial reasoning skills about 2D representations of 3D geometrical shapes in grades 4 to 9”, Mathematics Education Research Journa, Splinger, Online, 05.2020, Taro Fujita & Yutaka Kondo & Hiroyuki Kumakura & Susumu Kunimune & Keith Jones
2）「海外の先行研究からみた日本の割合指導の特徴」静岡大学教育実践総合センター紀要，No.31, pp.117-126，2021.3，熊倉啓之・國宗進・松元新一郎
3）「算数科における空間図形の学習指導の改善－小学校６年生の立方体の見取図の理解」静岡大学教育実践総合センター紀要，No.31，pp.127-136，202103，竹内淳・熊倉啓之・國宗進・藤田太郎・近藤裕
4）「小学校教員養成段階における大学生の割合の理解に関する調査研究－中学生・高校生の調査結果との比較を通して」静岡大学教育実践総合センター紀要，No.31，pp.137-146，2021.3，松元新一郎・熊倉啓之・國宗進
5）「空間図形の理解に関する研究-小・中学生に対する投影的な見方に関する調査を通して-」日本数学教育学会誌，103巻９号，pp.2-13，熊倉啓之・近藤　裕・藤田太郎・宮脇真一・國宗 進.
6）「小学生の割合の理解に関する研究」静岡大学教育実践総合センター紀要，No.32，pp.127-134，熊倉啓之・國宗進・松元新一郎・早川健・近藤裕
7）「小学生の割合に関する理解を深める指導－第６学年「比」の単元における実践を通して－」静岡大学教育実践総合センター紀要，No.32，令和４年３月，pp.303-310，平等正基・熊倉啓之

5．主要な社会活動業績（2020.4～）

1）石川県教科指導リーダー養成・数学的活動の充実をめざす授業づくり研修講師（2020.9）
2）鳥取県専門研修（中学校数学）講師（2020.10）
3）新算数教育研究会静岡県支部令和２年度第４回学習会講師（2020.12）
4）日本数学教育学会第103回全国算数・数学教育研究（埼玉）大会講習会講師（2021.8）
5）石川県教科指導リーダー養成・数学的活動の充実をめざす授業づくり研修講師（2021.8）
6）静岡県教育研究会数学教育研究部第２回研究推進委員会（2021.10）

小　南　陽　亮

所　　属　静岡大学教育学部
職位・学位　教授　理学博士
博士課程分野　自然系教科学
担当科目　生物教育内容論研究、教科開発学実践論、教科開発学セミナー
研究テーマ　身近な自然を活用した生物教材と教育内容の発展

1．これまでの教育研究について

生物多様性の劣化は、気候変動と同様に、深刻な地球環境問題として国際的に認識されています。日本においても、生物多様性条約に基づいて、政府は生物多様性国家戦略、自治体は生物多様性地域戦略を策定し、その保全に取り組んでいます。その中で、生物多様性の意味、生物多様性を保全する理由についての教育が不可欠となり、生物多様性にふれる行動、生物多様性を守る行動、生物多様性を伝える行動を体感することが重要となっています。そのためには、理科などの各教科における環境教育を充実させ、児童生徒が生物多様性を含む環境を深く理解した上で環境を守る主体的な行動がとれるようになることが必要です。このようなことを背景として、長年にわたって続けてきた森林生態や生物間相互作用に関する基礎科学的な研究を活かし、生物多様性について学ぶことができる新たな教材な開発と教育内容の発展に資することを目的とした研究を行っています。

2．博士課程における教育研究について

生物多様性の内容を効果的に教育するための新たな教材や指導法を開発する研究のフィールドとして、生物多様性の学習に適した環境のひとつである里山を選びました。この研究では、学校教育において生物多様性を学習するための教材として里山の生物や環境がどのように利用可能であるかを解明し、里山を利用した生物多様性教育の教材を開発することを目指しています。これまでの研究では、次のようなことを明らかにしてきました。

1）里山において簡易な樹木センサスが作業量や方法の点では学校教育で実施可能なものであり、得られたデータを生徒自身が解析することで、生物多様性とは何か、生物多様性はなぜ劣化しているのか、生物多様性はなぜ保全する必要があるのかを学習することができることを示しました。
2）学校教育で観察の対象となってきた生物は植物と昆虫がほとんどでしたが、身近な環境に多様な種が生息しているという点では、鳥類も観察したい生物です。そこで、鳥類を確実に観察する方法として、秋冬季に校庭の樹木につく果実を採食する鳥類を観察することを検証し、中学校・高校の探究活動で観察できる可能性が高いことを示しました。また、その観察によって、生態系における相互作用網の一端を知ることができ、生物同士のむすびつきを学習するきっかけになりうることを提言しました。

3．主要な研究業績と活動（2021.4　～）

1）里山二次林における樹木分布データを活用した探究のモデル．教育実践総合センター研究紀要. 32: 227-233（2022.3）
2）浜松トップガン教育システム課外講座「森林の成長を分析する　～プロの研究者が集めた本物のデータを分析してみよう～」(2022.1-3)

郡　司　賀　透

所　　属　静岡大学学術院教育学領域
職位・学位　准教授・博士（教育学）
博士課程分野　自然系教科学
担当科目　理科教育論研究　教科開発学原論　教育フィールド調査論
研究テーマ　理科カリキュラム基礎論　理科カリキュラム史研究
　　理科カリキュラムにおける工業に関する教育内容・教材論

１．これまでの教育研究について

私がこれまで携わってきた研究の一つは、戦後日本の高等学校化学教科書における化学工業教材史です。関連して二つ目は、主として1950年代における日本の経済成長と教育の関係を、理科教育内容・教材論の水準で研究を進めておりその特質を明らかにしようとしています。三つ目が科学的探究及びエンジニアリングデザインプロセスを活用した理科授業・教材研究になります。

２．博士課程における教育研究について

教科開発学の視点から、専門領域である「理科」を基盤にしつつも、領域の枠に拘泥することなく、児童・生徒をとりまく環境を絶えず意識しながら、現代の学校教育に諸問題に対応する研究を進めています。理科の特定の教育内容・教材の歴史的変遷について、教育環境学的な背景に基づいて指導することが可能です。

３．担当講義について

「理科教育論研究」では、教科開発学の核心をなす理科カリキュラム開発について、理科の目的論・目標論、理科の学習内容構造、子どもの自然理解の実態、理科教授論及び、科学と社会との関連について包括的な理解を図るとともに、理科における教科開発力の育成を目指します。

「教育フィールド調査論」では、量的及び質的分析の基礎を学んだ後、受講者の研究テーマに即した分析手法について、議論を通して検討します。

４．主な研究業績（2017年4月～）

・郡司賀透 「理科教科書分析の現代的展開」 大高泉 『理科教育基礎論研究』 協同出版　2017年６月　pp.68-80
・郡司賀透 「初等理科カリキュラム構成とその動向」 大高泉・吉田武男 『初等理科教育』 ミネルヴァ書房　2018年７月　pp.31-38
・郡司賀透 『理科教育における工業的教材の意義と変遷』 風間書房　2019年２月　全252ページ
・郡司賀透・鬼丸颯都・梶山涼矢・井出祐介・高橋政宏 「中学校理科授業における生徒の自己統制感に関する実践研究」『静岡大学教育実践総合センター紀要』 2020年３月　30号　pp.254-261
・郡司賀透 「小学校理科のカリキュラム構成とその動向」 片平克弘・木下博義 『初等理科教育』 協同出版　2021年12月　pp.26-29
・郡司賀透 「日常生活と理科の関係」及び「地域性を活かした教材開発」 山本容子・松浦拓也　協同出版　2021年12月　pp.21-22及びpp.254-257

５．主な社会的活動（現在）

日本理科教育学会（評議員）、日本エネルギー環境教育学会（編集委員）、株式会社アイエイアイミニロボ事業推進室プログラミング教育アドバイザー等々

新　保　　淳

所　　属　静岡大学学術院教育学領域保健体育系列
職位・学位　教授　博士（教育学）
博士課程分野　創造系教科学
担当科目　体育教育論研究、教科開発学セミナー
研究テーマ　身体教育論、授業研究論、体育哲学

１．これまでの教育研究について

静岡大学に着任以来、体育学担当教員として、中でも身体教育に関連する問題領域において、哲学的及び社会学的視点から研究を行ってきました。具体的には、我々の身体を取り巻く自然・社会環境の変化が、身体教育のプロセスにある子どもにとってどのような影響があるのか。またそうした現状を受けて学校体育では、どのような理念のもとにどのような実践していくべきかについて、いくつかの視点の提示を試みました。最近では、これまでに明らかにした「理論知」を実践に生かすための授業カリキュラムの開発とその評価方法の創造に向けて、そのための新たな方法論を探求しつつ持続的に研究を行っています。

２．博士課程における教育研究について

共同教科開発学専攻にかかわりながら、また本専攻におけるカリキュラム内容の作成を行ってきたという立場から「教科開発学とは？」を問うとともに、この博士課程の「独自性」の探究に取り組んできました。結論から言えば、“これが「教科開発学」だ” とは、未だ確信をもって言い切ることができません。ただ私一人の思い込み以上に、本専攻の構成員全体が集う「教科開発学セミナー」Ⅰ～Ⅲにおける学生の発表内容とそれに対する教員からの質疑応答を通して、あるいは、博士論文の審査等を通して、「教科開発学」について、そしてまたこの博士課程の「独自性」について、さらに探求を深める必要があると思います。そのためにも、本専攻メンバーである教員と学生の風通しをさらに良くしていく必要があるでしょう。一方で私自身も、本専攻のイメージを固めたり壊したりしつつ、残された数年間を今後の博士課程のさらなる発展に向けて、教育研究ともに関わっていきたいと考えています。

３．担当講義について

【体育教育論研究】

「体育科」における不易を求めることによって、これまでの「体育科」の問題点を明らかにするとともに、今後の方向性について講義および討論を行っています。また、“21世紀における教育および保健体育科像”についても、現状の問題点と現代的課題の克服を目指して、「持続可能な発展」等々をキーワードにしつつ議論を深めたいと考えています。方法論的には、スポーツをする人の「思考」が「社会（環境）」との関係においてどのような影響をうけるのか、またこの関係を考察することによって、自らが主体的にスポーツに関わるためには、どのような「体育授業（環境）」を設定する必要があるのかについて、考えていきたいと思っています。

４．主要な研究業績（2020.3　～）

１）保健体育科における「思考力・判断力・表現力」の評価方法の研究－創作ダンス授業を事例として－，静岡大学教育実践センター紀要，令和２年３月，第29号，pp.93–106
（共著：山﨑朱音，新保　淳，柳伶奈，石貝孝洋）

２）技能系教科における「思考・判断・表現」の評価方法の研究：体育実践を事例として教科開発学論集，令和２年３月，第８号，pp.153–157
（共著：新保　淳，山崎朱音，鎌塚優子）

３）ＥＳＤの視点からみた体ほぐし運動の可能性，体育科教育，令和２年５月号

４）「身体的イメージ」実現に向けた自己展開力育成のための教科体育の展望，『身心文化学習論』，創文企画，令和３年８月，pp.96–103
（編著：樋口聡教授退職記念論集会編，新保淳他）

松　永　泰　弘

所　　属　静岡大学教育学部
職位・学位　教授　博士（工学）
博士課程分野　創造系教科学
担当科目　技術教育内容論　教科開発学セミナーⅠ
研究テーマ　動くおもちゃ開発と*United by Emotion, Unity in Diversity*

1．これまでの教育研究について

科学技術ものづくり教材の中でも、機械領域の教材開発を行う。おもな教材として、形状記憶合金・スターリングエンジンカー、受動歩行模型、機械式振子時計、*Automata*･*Marionette*を４つの柱とし、様々な動くものづくり教材を開発。動作原理を探究、新しい道具に挑戦し、ものづくりに熱中する子どもたちの姿、家族や友達に動作原理を説明し製作したものを自慢する子どもたちの姿、継続により、困難に立ち向かう子どもたちの姿が出現するような不思議や驚きを伴う教材開発。

2．博士課程における教育研究について

学習集団における多様性の統一*Unity in Diversity*について取り組む。子どもたちの意味世界に刺激を与え、想像・感情・知識が絡み合い、発達を促し、*WET/SET*に基づく動くおもちゃものづくり教材の開発を行う。授業実践を通して、教材の特徴、子どもの変容を明らかにする。動くおもちゃGiftsの選定とものづくり教材としての開発を行う。年齢に適した教材・道具の使用、喪失体験児童に及ぼす影響について検討する。現実事象と数学的抽象化を往還する数学的活動教材の開発を行う。

3．担当講義について

【技術教育内容論】

機械分野の技術に学びながら、教材の特徴、授業実践の評価について議論する。

4．主要な研究業績

・松永泰弘・河本昌範：機構部分に針金を使用したオートマタ教材の開発，静岡大学教育実践総合センター紀要，32，pp.143-150（2022）
・松永泰弘・安達美佑：斜面を円柱が転がり揺れながら移動する組立式模型教材の開発，日本産業技術教育学会誌，第63巻，第４号，pp.409-417（2021）
・松永泰弘・安達美佑：円柱が転がり揺れて動く段ボール製大型提示用教材の開発，日本産業技術教育学会誌，第63巻，第３号，pp.335-342（2021）
・松永泰弘・古田このみ：たわみ変形により歩行する４足受動歩行模型の材料と大きさに関する研究，日本産業技術教育学会誌，第63巻，第３号，pp.325-333（2021）
・松永泰弘・古田このみ：紙製４足受動歩行模型を用いた小学生対象の授業実践，日本産業技術教育学会誌，第63巻，第２号，pp.207-214（2021）
・松永泰弘・守屋太雅・松永元輝：高校数学における塩山を用いた数学的活動と授業実践，日本産業技術教育学会誌，第63巻，第２号，pp.229-237（2021）
・松永泰弘・安達美佑：ビー玉が転がり斜面を揺れながら移動する木のおもちゃの運動解析，日本産業技術教育学会誌，第63巻，第１号，pp.13-21（2021）
・Y. MATSUNAGA，K. FURUTA，M.ADACHI：Web support for make-play-inquiry activities during long -time closure of school because of COVID-19;'Unity in Diversity' in learning group by use of moving toys，ICTE2021 Conf. Proceedings，pp.171-179 (2021)
・K. FURUTA, Y. MATSUNAGA,：Influence of the Material and Size on the Walking Motion of the Quadrupedal Passive Walking Toy，ICTE2021 Conf. Proceedings，pp.123-129 (2021)
・M.ADACHI，Y. MATSUNAGA：Development of the Rocking Wooden Toy with a Marble/Glass-Ball Going Down a Slope as a Teaching Material，ICTE2021 Conf. Proceedings，pp.164-170 (2021)

5．主要な社会活動業績

1）科学技術高校、浜松工業高校SSH、こどもクリエイティブタウン「ま･あ･る」評価委員
2）科学研究費助成2021-2023、日教弘助成2022
3）フジテレビ「世界の何だコレ！？ミステリー」

紅　林　秀　治

所　　属　静岡大学学術院教育学領域　技術教育系列
職 位 ・ 学 位　教授　博士（学校教育学）
博士課程分野　創造系教科学
担 当 科 目　技術教育教材論研究
研 究 テ ー マ　技術教育　設計教育　教材開発論

１．これまでの教育研究について

静岡大学に着任して以来、技術科教育法等担当教員として、技術科教育に関する教材、指導法、カリキュラムの開発に関する研究を行っています。これまでに、技術を学ぶ意義を実感させる指導法、設計に関わる思考力やシステム概念の形成過程に関する研究を深めています。

２．博士課程における教育研究について

本博士課程においては、これまでの教育研究で行ってきたことを基盤としながら、さらに、普通教育としての技術教育の本質や歴史を踏まえた上で、技術リテラシーについて考察します。また、設計力を高めるための指導や教材の在り方についても追究していきたいと考えています。

３．担当講義について

【技術教育教材論研究】

本講義では、普通教育としての技術教育と専門教育としての技術教育の違いを整理してから、技術教育では欠かすことができない概念である設計について考察します。さらに、設計能力を高めるための教材や教育方法について検討します。検討にあたっては、実際に教材を設計したり製作したりします。

４．主要な研究業績（2019 .4　～）

(1) 金属パイプを利用した自立式ハンモック教材の開発，日本産業技術教育学会誌　第62巻第２号，2020年，pp.103-112，西ヶ谷浩史・紅林秀治
(2) エンジニアの視点を獲得するための工学設計の手法を取り入れた中学校技術・家庭科（技術分野）の学習，日本産業技術教育学会誌，第62巻，第３号，2020年，pp.267-275　西ヶ谷 浩史・紅林 秀治
(3) 技術科教育におけるプロジェクトマネジメントに基づくカリキュラムの提案，日本産業技術教育学会誌，第62巻，第４号，2020年，pp.315-322，室伏春樹・岡本駿・紅林 秀治
(4) ドライバ操作における手指動作の大学生と中学生の比較，日本産業技術教育学会誌，第63巻，第１号，2021年，pp.1-11，青木 麟太郎・紅林 秀治
(5) ドライバ操作時の押圧力測定装置の開発，教科開発学論集　第９号，2021年，pp.99-110，青木麟太郎・紅林秀治
(6) 全方向移動型倒立振子教材の開発，日本産業技術教育学会誌，第63巻，第３号，pp.297-305，2021年，石嶺 達騎・大村 基将・青木 麟太郎・山下 友矢・紅林 秀治
(7) エンジニアリング・デザインの考え方を取り入れた中学校技術科の授業実践，静岡大学教育実践総合センター紀要，32巻，pp.135-142，2022年，草野正義・西ヶ谷浩史・青木麟太郎・大村基正・鄭基浩・紅林秀治
(8) 小学校プログラミング教育のための立体LEDキューブ制御教材の開発，日本産業技術教育学会誌，第64巻第1号，pp.19-29，2022年，杉山優貴・大村基将・青木麟太郎・紅林秀治

５．主要な社会活動業績（2019.4～）

(1) 教育研究会（藤枝市，焼津市，島田市，掛川市，三島市）　講師
(2) 静岡県教職員組合　教育研究集会　技術科教育分科会　講師
(3) 静岡県総合教育センター主催研修　講師
(4) 藤枝市ロボコン教室　講師

杉　山　康　司

所　　属　静岡大学教育学部保健体育講座
職位・学位　教授　博士（スポーツ健康科学）
博士課程分野　創造系教科学
担当科目　教科開発学原論、体育･課外活動教材論研究
研究テーマ　運動生理学、体力科学、トレーニング科学

１．これまでの教育研究について

保健体育の教科専門である運動生理学をメインに体力科学的、スポーツ科学的な研究を行っています。特に人が行う各種運動およびスポーツについてエネルギー消費量の経済性や骨格筋活動について評価し、その結果を基に運動指導に向けたプログラムや指針について検討しています。対象者は乳幼児から高齢者まで幅広くテーマを持ちながら活動しております。

２．博士課程における教育研究について

これまで、保健体育の教科としてだけではなく生涯にわたるスポーツ教育に目を向けて研究を行ってきました。特に運動生理学は客観的データの取得を主とした自然科学系の分野であり、学校教育における教科教育のように授業そのものの方法について柔軟に知見を纏め上げていくフィールドとは異なっています。しかし、教科教育の背景には教科専門の知見を欠かすことはできません。博士課程では保健体育の教科専門と教科教育の一体化を目指した教育研究への挑戦が必要であると考えています。

３．担当講義について

【教科開発学原論】

さまざまな教科で教科専門と教科教育についてどのような連携があるのかなどを模索し、教科開発学専攻での学位の特色と人材育成に向けた討論をしたいと考えています。私の担当する時限では保健体育の授業現場において教師が理解しておかなければならない専門的な研究成果について紹介しながら、他教科との共通点や相違点、他教科の教師も知るべき保健体育の知識（初等、中等教育教員の立場で､）について考えてみたいと思います。

【体育･課外活動教材論研究】

教科開発学原論において一部紹介した内容を基に受講生の皆様が直面している研究課題と照らし合わせながら、さらに一歩深めた内容にしたいと思います。運動生理学やスポーツ科学という分野で得られてきた研究成果をいくつかのトピックスとの研究手法に」ついての共通点や相違点について意見を交わし、実際の研究データに触れながらの論文抄読から、常に学校教育に応用する立場で討論してみたいと思います。保健体育教科専門の一つである運動生理学分野からみた創造教科学を考えています。

主要な研究業績（2013.4　～）

「Relationships between physical fitness and body mass index in 11- and 12- year-old New Zealand and Japanese school children」: 教科開発学論集　2013　1 195-206, Sugiyama K and Michael J. Hamlin、保健体育教材としてのポスチュアウォーキングの可能性～エキスパートポスチュアウォーカーの筋活動およびビギナーが示す運動強度から～」ウォーキング研究, 2016, 20, 21-27, 杉山康司　他、「Blow Rifle: A Healthy New Sport」Sport Exerc Med Open J. 2017; 3(2): 46-52. Sugiyama K他、「ノルディックウォーキング、ランニングにするとどうなる？～ノルディックランニングの生理学的応答～」ウォーキング研究21, 2018, 17-25、杉山康司、他など

４．主要な社会活動業績

日本体力医学会会員　（評議員　平成14年10月～現在）日本スポーツ少年団指導育成部会部会員、静岡県教育委員会スポーツ推進審議会委員他

村　上　陽　子

所　　属　静岡大学教育学部家政教育講座
職位・学位　教授　博士（学術）
博士課程分野　創造系教科学
担当科目　家庭科教材論研究
研究テーマ　食文化、食品物性学、食品色彩学、家庭科におけるものづくり、教科連携

1．これまでの教育研究について

食品学・栄養学・食品衛生学・家庭科教育法等の担当教員として、食育や家庭科教育に関する教材開発、教科連携に関する研究を行っています。食品については、各種栄養素の成分組成や調理加工による変化、食品のもつ物理特性（硬さ、凝集性、付着性）とともに、これら物理特性が食嗜好性に及ぼす影響について研究しています。また、和菓子を中心として食品の色彩が食嗜好性に及ぼす影響について分析するとともに、経験的に行われてきた調製方法を理論的に分析するなど、我が国の食文化について科学的・文化的な視点から研究を行っています。最近では、小・中学校における給食指導や食に関する指導などについても研究を行っています。これら研究を通して得られた成果については教材化し、幼稚園をはじめ、小・中・高等学校において実践を行っています。教育分野においては、家庭科における食育、および、ものづくりの課題を明らかにしつつ、これからの家庭科における新しい教材を提案しています。

2．博士課程における教育研究について

食品における物理的特性や化学的特性、官能特性などを科学的手法・文化的手法を用いて検討していきます。また、家庭科における食品学や栄養学、食品衛生学の意義について、多様な視点から考察できる資質・能力の育成を行っていきたいと考えています。教科連携については、食育など生活に関わる現代的課題やものづくりを核として教科連携モデルを考案し、授業実践していきたいと考えています。

3．担当講義について

【家庭科教材論研究】

家庭科の指導内容について、①小・中・高等学校の家庭科の学習における課題、②家庭科教育に必要な視点、③家庭科の知識・技能の定着と多角的視点の育成を目指した教材・指導法について分析・考察し、新たな教材づくりを検討します。

4．主要な研究業績

【論文・著書】

1）小中高等学校の家庭科における発酵食品に関する教科書分析―日本酒・酒粕の学習状況に焦点を当てて―，日本家政学会誌，72(8)，529-542，鳥居優理香，村上陽子（2021）
2）色彩と食欲向上 ―栄養面での期待―，保健の科学，63(11)，773-777，村上陽子（2021）
3）和菓子の教材化 ―食文化継承のための教材開発と実践―，日本調理科学会誌，54(6)，280-283，村上陽子（2021）
4）米の種類が麹甘酒の糖化および食嗜好性に及ぼす影響，静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇），72，69-81，鈴木絢子，村上陽子（2022）
5）高等学校・家庭科におけるキャリア教育のあり方（第二報）―高校生と大学生における実態把握と課題―，静岡大学教育実践総合センター紀要，32，70-80，村上陽子，勝山郁美（2022）
6）村上陽子（2021）行事食と色，「別冊うたかま　伝え継ぐ日本の家庭料理　四季の行事食」，農山漁村文化協会，p.115
7）村上陽子(2022)和三盆糖,「糖質・甘味のおいしさ評価と健康・調理・加工」(山野善正監修),エヌティーエス，pp.223-236

5．主要な社会活動業績

1）静岡県教育研究会技術・家庭科教育研究部夏期研究大会　助言者，2021年８月５日（菊川市，web）
2）静岡県中学生創造ものづくり教育フェア（お弁当部門）審査委員長，2021年10月25日（静岡市立籠上中学校）
3）新聞報道：「おはぎ進化形：五感を刺激　若者にもアピール」，中国新聞朝刊15面（2021年11月23日）
4）附属静岡小学校共同研究者

伊　藤　文　彦

所　　属　静岡大学教育学部
職位・学位　教授　学術修士
博士課程分野　創造系教科学
担当科目　表現・鑑賞論　美術教材論研究　教科開発学セミナーⅠⅡⅢ
研究テーマ　美術・デザイン教育方法開発、デザインリテラシー教育論

１．これまでの教育研究について

美術教育の中でもデザイン分野を専門として、デザインの発想法を中心にデザインプロセス全般を対象に研究を行っています。また、創造系の教科の指導者として求められる表現力の研鑽のために、ビジュアルデザインを中心に公的な場面で様々なデザインワークを展開しています。

現代環境において、デザインの領域は多岐に渡っており、コミュニケーション、プロダクト、環境デザイン、イベント･キャンペーン等、現代の私たちの生活とは切り離せない深い関わりをもっています。しかしながらこれまでの美術教育では自己表現や感性などの伝統的な概念を重んじられてきたあまり、美術教育が社会への適合性といった点ついてはかならずしも有効な教育になりえていなかったことが問題点としてあげられます。こうした問題意識を背景に、より今日的役割を明確にした横断的な学問としてのデザイン教育を構想するための研究を行っています。

２．博士課程における教育研究について

本博士課程においては、これまで行ってきたデザインプロセスの構造化およびデザインリテラシー研究を基盤として美術・図画工作科教育の諸問題を明確化し、今後重要度が増してくる表現と鑑賞教育のバランスのとれた芸術教育を学校教育にいかに定着させるかという課題に取り組みたいと考えています。その際、これまで芸術における感性の問題としてブラックボックス化されてきた部分について、認知科学の知見を援用しながらモデル化することを通して、他の教科との接点を見出しながら、学際的な教科としての美術・デザイン教育を展望するという観点から博士課程での教育研究に関わっていきたいと考えています。

３．担当講義について

【表現・鑑賞論】

芸術を表現することとそれを鑑賞することは表裏一体の関係であり、常に同時発生的に進行する創造性豊かな思考過程である。この授業では、そういった表現と鑑賞の思考過程を芸術学と認知科学を融合させた学際的な観点で整理し、芸術教育のありかたについて考察するものである。

特に美術・デザインの「リテラシー」について、具体的な作品・製品・イベント等を鑑賞・理解の対象とし、ワークシート作業を含めた実践的な演習も含めながら理解を深める。

【美術教材論研究】

美術・デザイン活動及びその教育について、今日の問題状況や新たな展開について展望する。特に、美術・デザインのもつ特性とその教育の価値について、コミュニケーションやそのリテラシーといった情報概念を軸に考察し、それを応用した教材開発について探求する。

４．主要な研究業績（2021.4～）

1）「デザイン教育における地域連携プロジェクトの実践と考察３：ふじのくに茶の都ミュージアム『若者とお茶』ポスタープロジェクトを事例として」, 静岡大学教育実践総合センター紀要　32巻, 2022年３月, pp238-247
2）「デザイン思考で切り拓くカッコいい僻地」武井敦史編著『地場教育～此処から未来へ』所収, 静岡新聞社, 2021年７月, pp.146-pp.164
3）「静岡県立磐田南高等学校創立100周年記念」横断幕・ポスターデザイン, 静岡県立磐田南高等学校, 2021年10月-2022年11月

５．主要な社会活動業績（2021.4～）

1）下田中学校SID事業, 下田市教育委員会, 下田市, 2021年４月～2021年３月
2）静岡県地域との協働による高等学校教育改革推進事業運営指導委員, 静岡県教育委員会, 2021年４-2022年３月

長　谷　川　慎

所　　属　静岡大学教育学部音楽教育講座
職位・学位　教授　修士（音楽）
博士課程分野　創造系教科学
担当科目　表現・鑑賞論
研究テーマ　音楽教育学、日本音楽の指導法、和楽器(箏・三味線・胡弓)演奏法、地歌箏曲総論、地歌箏曲の楽器の変遷

1．これまでの教育研究について

地歌箏曲演奏家としての経験から音楽科教育の今日的課題の一つである「日本音楽の指導」に関して指導法、教材開発等を研究している。「体感する日本音楽」をモットーに学生指導を行い、伝統音楽の表現と鑑賞活動に取り組むことで、深奥な日本音楽の良さを体感し他者にその魅力を語れるような学生を育てることを目指している。

2．博士課程における教育研究について

博士課程においては、「表現・鑑賞論」の授業を伊藤文彦教員と分担で担当する。これまでの音楽科教育における日本音楽指導について俯瞰し、問題点を浮き彫りにしながら今後の指導のあり方について、学生諸君と考えていきたいと考えている。先人が育み伝えてきた音楽でありながら、自らの言葉として語れる教員が少ない現状を改善し、子どもたちにどのように指導するかを考えるのは教科教育に携わる人間の使命の一つである。教員と学生双方が経験を生かして日本学の指導、教材開発について考えていきたい。

3．担当講義について

【表現・鑑賞論】

芸術は存在そのものが教育であると言える。そして、芸術を表現することとそれを鑑賞することは表裏一体の関係であり、常に同時発生的に進行する創造性豊かな思考過程である。この授業では、そういった表現と鑑賞の思考過程を芸術学と認知科学を融合させた学際的な観点で整理し、芸術教育のありかたについて考察するものである。音楽学概論、音楽教育学概論、音楽鑑賞教育論の視点から教科開発学における音楽科教育を探究する。

4．主要な研究業績（2019.1～）

1）日本音楽の教育と研究をつなぐ会編「箏曲」『唱歌で学ぶ日本音楽』、音楽之友社、2019
2）齊藤忠彦／菅裕編著「和楽器の指導」『新版　中学校・高等学校教員養成課程　音楽科教育法』、教育芸術社、pp.190-191、2019
3）有本真紀、阪井恵、津田正之編著「II小学校音楽科の目標と内容　「A 表現」器楽分野　(2)指導のポイント　「和楽器」」『教員養成課程小学校音楽科教育法新版教員養成課程小学校音楽科教育法』、教育芸術社、pp.34-37、2019
4）本多佐保美編著「第Ⅴ章１箏（箏曲）の学習」『日本音楽を学校でどう教えるか』、開成出版、pp.44-47、2020
5）長谷川慎・志民一成・櫻井千晶「音楽授業における歌唱モデル構築のための伝統的な歌唱を稽古する子どもの歌い方の分析（２）」、静岡大学教育実践総合センター紀要、29/29 pp.100-107、2022

5．主要な社会活動業績（2017.10～）

1）静岡県総合教育センター主催音楽の授業づくり研修会講師「～口唱歌を用いた和楽器の指導～」（2017年10月）
2）日本芸術文化振興会あぜくらの集いにおける講演「三味線の響き～古態楽器の聴き比べ～」（2019年５月）
3）文化庁主催令和元年度伝統音楽指導者等研修会講師（2019年７～８月）
4）地歌箏曲研究会の開催「第３回古態の楽器による地歌の会」宮城道雄記念館（2022年３月）

Ⅷ. 諸　資　料

共同教科開発学専攻・授業カレンダー（2021年度）

表中の記号の説明・

※　：必修科目、基：基礎科目、応：応用科目
環：教育環境系分野科目，　人：人文社会系教科学分野科目
自：自然系教科学分野科目，創：創造系教科学分野科目

前期：愛知教育大学

	4月4日	4月10日	4月11日	4月17日	4月18日	4月24日	4月25日	5月1日	5月2日	5月3日	5月4日	5月5日	5月8日	5月9日	5月15日	5月16日	5月22日	5月23日	5月29日	5月30日	6月5日	6月6日	6月12日	6月13日	6月19日	6月20日	6月26日	6月27日	7月3日	7月4日	7月10日	7月11日	7月17日	7月18日	7月24日	7月25日	7月31日	8月1日	8月7日	8月8日	8月14日	8月15日	8月21日	8月22日	8月28日	8月29日
	日	土	日	土	日	土	日	土	日	月	火	水	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日
		Ａ週　基礎科目（６週）															Ｂ週　分野科目（開講８週）																			Ｃ週　補講および集中講義，セミナー										
1限～4限	合同ガイダンス（会場・静大）	※基・教科開発学原論①（愛知）	基・文化資源活用論①（愛知）	※基・教科開発学原論②（愛知）	基・文化資源活用論②（愛知）	※基・教科開発学原論③（静岡）		※基・教科開発学原論④（静岡）																								博士論文最終試験			オープンキャンパス（予定）	オープンキャンパス（予定）						応・教科開発学セミナーⅢ（会場・愛教大）			

前期：静岡大学

	4月4日	4月10日	4月11日	4月17日	4月18日	4月24日	4月25日	5月1日	5月2日	5月3日	5月4日	5月5日	5月8日	5月9日	5月15日	5月16日	5月22日	5月23日	5月29日	5月30日	6月5日	6月6日	6月12日	6月13日	6月19日	6月20日	6月26日	6月27日	7月3日	7月4日	7月10日	7月11日	7月17日	7月18日	7月24日	7月25日	7月31日	8月1日	8月7日	8月8日	8月14日	8月15日	8月21日	8月22日	8月28日	8月29日
	日	土	日	土	日	土	日	土	日	月	火	水	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日
		Ａ週　基礎科目（６週）															Ｂ週　分野科目（開講８週）																			Ｃ週　補講および集中講義，セミナー										
1限～4限	合同ガイダンス（会場・静大）				（基）教育フィールドワーク調査論（静岡）		（基）教育フィールドワーク調査論（静岡）										環・村越　人・黒川　自・郡司	創・杉山・紅林	創・新保	人・坂口	環・村越　人・白畑・黒川　自・郡司　創・伊藤・新保・村上	創・杉山・紅林	創・新保	人・坂口	創・村上	環・村越　人・白畑・黒川　創・伊藤・新保・村上	創・杉山・紅林		人・坂口	人・白畑・黒川　自・郡司　創・伊藤・村	創・杉山・紅林		人・坂口	環・村越　人・白畑　自・郡司　創・伊藤	博士論文最終試験										応・教科開発学セミナーⅢ（会場・愛教大）			

注・開講の原則
① 授業は原則として１日４コマで開講するそのため、１単位は２日、２単位は４日間の授業開講が必要である
② 基礎科目はＡ週またはＤ週で集中授業として開講するＣ週、Ｆ週で開講することも可能
③ 分野科目は原則としてＢ週とＥ週で開講する
開講する曜日は、土・日曜日及び祝日のいずれかとし、第１週目開始か、第２週目開始を選択する
④ Ｃ週とＦ週は補講期間であるが、基礎科目、あるいは分野科目の集中授業を置くこともできる
④ 教科開発学セミナーⅠおよびⅡはＦ週で開講し、セミナーⅢはＣ週で開講する

共同教科開発学専攻・授業カレンダー（2021年度）

表中の記号の説明・

※　：必修科目、基：基礎科目、応：応用科目
環：教育環境系分野科目，　人：人文社会系教科学分野科目
自：自然系教科学分野科目，創：創造系教科学分野科目

後期：愛知教育大学

	10月2日	10月3日	10月9日	10月10日	10月16日	10月17日	10月23日	10月24日	10月30日	10月31日	11月6日	11月7日	11月13日	11月14日	11月20日	11月21日	11月27日	11月28日	12月4日	12月5日	12月11日	12月12日	12月18日	12月19日	12月25日	12月26日	1月1日	1月2日	1月8日	1月9日	1月15日	1月16日	1月22日	1月23日	1月29日	1月30日	2月5日	2月6日	2月12日	2月13日	2月19日	2月20日
	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日
	D週　基礎科目（開講４週）								E週　分野科目（開講８週）																				F週　補講および集中講義，セミナー											
1限～4限	※基・教科開発学実践論①（合同）	※基・教科開発学実践論②（合同）	基・教育評価実証方法論①	基・教育評価実証方法論②	基・科学技術活用論①	基・科学技術活用論②					（希望日）入学試験（会場・静大）	（希望日）入学試験予備日															年末年始	年末年始			大学入学共通テスト	大学入学共通テスト		博士論文最終試験					※応・教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ（会場・静大）	※応・教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ（会場・静大）		

後期：静岡大学

	10月2日	10月3日	10月9日	10月10日	10月16日	10月17日	10月23日	10月24日	10月30日	10月31日	11月6日	11月7日	11月13日	11月14日	11月20日	11月21日	11月27日	11月28日	12月4日	12月5日	12月11日	12月12日	12月18日	12月19日	12月25日	12月26日	1月1日	1月2日	1月8日	1月9日	1月15日	1月16日	1月22日	1月23日	1月29日	1月30日	2月5日	2月6日	2月12日	2月13日	2月19日	2月20日
	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日
	D週　基礎科目（開講４週）								E週　分野科目（開講８週）																				F週　補講および集中講義，セミナー											
1限～4限					基・表現・鑑賞論①		基・表現・鑑賞論②		自・小南	自・熊倉		環・村山	（基）教育プレゼンテーション論（静岡）	自・熊倉		環・村山	自・小南	自・熊倉		環・村山	自・小南	自・熊倉		環・村山			年末年始	年末年始	（基）教育プレゼンテーション論（静岡）		大学入学共通テスト	大学入学共通テスト		博士論文最終試験					※応・教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ（会場・静大）	※応・教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ（会場・静大）		

令和元年度～令和3年度　共同教科開発学専攻・開設授業の履修状況（3年間）　その1

前期：A期間（4月～5月）　B期間（6月～7月）　C期間（7月～8月）
後期：D期間（10月）　　E期間（11月～1月）　F期間（1月～2月）

愛知教育大学・静岡大学 合同開講科目					令和元年度　集計		令和2年度　集計		令和3年度　集計	
共同専攻科目		授業科目名	単位	担当教員	曜日・時限・期間	受講者	曜日・時限・期間	受講者	曜日・時限・期間	受講者
基礎科目	必修科目	教科開発学原論	a 2	石川　恭 野平　慎二 中野　真志 高橋　美由紀 黒川　みどり 小南　陽亮 杉山　康司 村上　陽子	A期間 4/14(日)・ 4/21(日)・ 4/28(日)・ 5/6(月) ★遠隔	愛教大D1　7名 静岡大D1　4名	A期間 4/11(土)・ 4/18(土)・ 5/9(土)・ 5/17(月) ★遠隔	愛教大D1　4名 静岡大D1　5名 静岡大D2　1名	A期間 4/10(土)・ 4/17(土)・ 4/24(土)・ 5/1(土) ★遠隔	愛教大D1　4名 静岡大D1　4名 静岡大D2　1名
		教科開発学実践論	a 1	稲葉　みどり 倉本　哲男 小川　裕子 新保　　淳 鎌塚　優子	D期間 10/5(土)・ 10/6(日) ★遠隔	愛教大D2　1名 愛教大D1　6名 静岡大D1　5名	D期間 10/3(土)・ 10/4(日) ★遠隔	愛教大D1　4名 愛教大D2　1名 静岡大D1　5名 静岡大D2　1名	D期間 10/2(土)・ 10/3(日) ★遠隔	愛教大D1　4名 静岡大D1　4名 静岡大D2　1名
応用科目	必修科目	教科開発学セミナーⅠ	b 2	全教員	F期間 2/15(土)・ 2/16(日) ●静岡大	愛教大D1　5名 静岡大D2　1名 静岡大D1　7名	F期間 2/13(土)・ 2/14(日) ●愛教大	愛教大D1　4名 静岡大D1　4名 静岡大D2　1名	F期間 2/12(土)・ 2/13(日)	
		教科開発学セミナーⅡ	b 2	全教員	F期間 2/15(土)・ 2/16(日) ●静岡大	愛教大D3　1名 愛教大D2　4名 静岡大D3　2名 静岡大D2　7名	F期間 2/13(土)・ 2/14(日) ●愛教大	愛教大D2　5名 静岡大D2　3名 静岡大D3　1名	F期間 2/12(土)・ 2/13(日)	
	選択科目	教科開発学セミナーⅢ	b 2	全教員	C期間 8/25(日) ●愛教大	愛教大D3　2名 静岡大D3　2名 静岡大D2　1名	C期間 8/23(日) ●静岡大	愛教大D3　2名 静岡大D3　2名	C期間 8/22(日)	

令和元年度～令和3年度　共同教科開発学専攻・開設授業の履修状況（3年間）　その2

愛知教育大学開講科目					令和元年度　集計		令和2年度　集計		令和3年度　集計	
共同専攻科目		授業科目名	単位	担　当　教　員	曜日・時限・期間	受　講　者	曜日・時限・期間	受　講　者	曜日・時限・期間	受　講　者
基礎科目	選択科目	文化資源活用論	a 1	野地　恒有 伊藤　貴啓 丹藤　博文	A期間 4/27(土)・ 5/11(土)	愛教大D1　3名 静岡大D3　1名	A期間 4/12(日)・ 4/19(日)	静岡大D2　1名	A期間 4/11(日)・ 5/18(日)	
		科学技術活用論	a 1	岩山　勉 稲毛　正彦 飯島　康之	D期間 10/26(土)・ 10/27(日)	愛教大D1　3名 静岡大D1　2名	D期間 10/17(土)・ 10/18(日)	愛教大D1　2名 静岡大D1　2名 静岡大D2　1名	D期間 10/16(土)・ 10/17(日)	
		教育評価実証方法論	a 1	古田　真司 石田　靖彦	D期間 10/19(土)・ 10/20(日)	愛教大D3　2名 愛教大D2　1名 愛教大D1　6名 静岡大D2　1名 静岡大D1　2名	D期間 10/10(土)・ 10/11(日)	愛教大D3　1名	D期間 10/9(土)・ 10/10(日)	愛教大D1　4名 愛教大D2　2名 静岡大D1　3名 静岡大D2　1名 静岡大D3　1名
分野科目（選択科目）	教育環境学	遊び文化環境論研究	a 2	石川　恭	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D3　2名 愛教大D1　1名 静岡大D3　1名	E期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1　1名 静岡大D3　2名	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D2　2名 静岡大D1　1名 静岡大D2　1名
		教育経営臨床論研究	a 2	倉本　哲男	E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1　5名 愛教大D2　1名			E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1　5名 愛教大D2　1名
		学校適応論研究	a 2	石田　靖彦	E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1　2名	E期間 日曜日・ 隔週		E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1　1名 愛教大D2　1名 愛教大D3　1名 静岡大D1　1名 静岡大D3　1名
		教育哲学・思想論研究	a 2	野平　慎二	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1　4名 静岡大D2　1名 静岡大D1　1名	B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D3　1名	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D2　3名
		保育・幼児教育学研究	a 2	新井　美保子			E期間 日曜日 隔週	愛教大D1　1名 愛教大D2　1名 愛教大D3　1名	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1　1名 静岡大D1　1名
		教育方法・内容論研究	a 2	竹川　慎哉	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1　3名	E期間 日曜日・ 隔週		E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1　2名 静岡大D2　2名
		教授学習論研究	a 2	野崎　浩成					B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1　2名 静岡大D2　1名
		幼児教育・保育内容論	a 2	鈴木　裕子					E期間 日曜日・ 隔週	静岡大D1　1名
		ICT教育研究	a 2	梅田　恭子					E期間 日曜日・ 隔週	静岡大D1　1名
	人文社会系教科学	言語教育内容論研究	a 2	稲葉　みどり	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D3　1名 静岡大D1　1名	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1　1名 静岡大D3　1名	E期間 日曜日・ 隔週	
		民俗学教材論研究	a 2	野地　恒有	B期間 土曜日・ 隔週					
		地理学教材論研究	a 2	伊藤　貴啓	B期間 日曜日・ 隔週	静岡大D1　1名 静岡大D2　1名 静岡大D1　1名	B期間 土曜日・ 隔週		B期間 日曜日・ 隔週	
		国語科教育教材論研究	a 2	丹藤　博文	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1　1名	E期間 土曜日・ 隔週		E期間 日曜日・ 隔週	
		生活科教育内容論研究	a 2	中野　真志	E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1　1名 静岡大D3　1名	B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1　2名 静岡大D1　1名	E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1　1名 静岡大D2　1名
		外国語教育内容論研究	a 2	高橋　美由紀	B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1　2名	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D3　1名	B期間 土曜日・ 隔週	
	自然系教科学	数学教材論研究	a 2	飯島　康之	B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1　1名 静岡大D1　2名	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1　1名 愛教大D2　1名	B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1　1名
		物理教材論研究	a 2	岩山　勉	E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1　1名	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1　2名		
		理科教育内容論研究	a 2	稲毛　正彦	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1　1名	E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1　1名	E期間 日曜日・ 隔週	
		数学教育内容論研究	a 2	小谷　健司	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1　1名 静岡大D1　1名	E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1　1名	E期間 日曜日・ 隔週	
		理科教材開発論研究	a 2	大鹿　聖公					B期間 日曜日・ 隔週	

静岡大学開講科目					令和元年度　集計		令和2年度　集計		令和3年度　集計	
共同専攻科目		授業科目名	単位	担　当　教　員	曜日・時限・期間	受　講　者	曜日・時限・期間	受　講　者	曜日・時限・期間	受　講　者
基礎科目	選択科目	教育プログラム開発論	a 1	村山　功	A期間 5/12(土)・ 5/19(土)	愛教大D2　1名 愛教大D1　2名 静岡大D2　3名 静岡大D1　3名	A期間 4/26(日)・ 4/27(月) オンデマンド	愛教大D1　2名 愛教大D3　1名 静岡大D1　3名 静岡大D2　1名 静岡大D3　1名	A期間 5/8(土)・ 5/9(土)	愛教大D1　2名 静岡大D1　3名 静岡大D2　1名 静岡大D3　1名
		表現・鑑賞論	a 1	伊藤　文彦 北山　敦康・長谷川　慎	D期間 10/12(土)・ 10/26(土)	愛教大D1　2名 静岡大D2　3名	D期間		D期間	静岡大D1　1名
		教育フィールド調査論	a 1	村越　真	A期間 4/20(土)・ 5/4(土)	愛教大D3　1名 愛教大D1　1名 静岡大D1　4名	7月26日 8月2日 8月9日	愛教大D1　1名 愛教大D2　3名 愛教大D3　1名 静岡大D1　5名 静岡大D2　1名 静岡大D3　1名	A期間 4/18(日)・ 5/25(日)	静岡大D1　4名
		教育プレゼンテーション論	a 1	白畑　知彦 小南　陽亮	E期間 変形・ 11/25(日)・ 1/5(土)	愛教大D2　1名 静岡大D2　3名 静岡大D1　3名	E期間 変形・ 11/7(土)・ 1/9(土)	愛教大D2　2名 静岡大D1　4名	E期間 変形・ 11/13(土)・ 1/8(土)	愛教大D1　1名 愛教大D2　2名 愛教大D3　1名 静岡大D1　1名
分野科目（選択科目）	教育環境学	学校危機管理論研究	a 2	村越　真	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D3　1名 愛教大D2　1名 愛教大D1　1名 静岡大D1　1名	B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1　1名 静岡大D1　2名	B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1　2名 静岡大D2　2名
		教育工学論研究	a 2	村山　功	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1　1名 静岡大D1　3名			E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D2　1名 静岡大D1　3名 静岡大D2　3名
		身体運動指導論研究	a 2	吉田　和人	E期間 日曜日・ 隔週	静岡大D2　1名 静岡大D1　1名				
		養護実践教育学論研究	a 2	鎌塚　優子	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1　1名 静岡大D2　3名 静岡大D1　1名			E期間 日曜日・ 隔週	
		特別支援教育学研究	a 2	香野　毅	E期間 日曜日・ 隔週		E期間 土曜日・ 隔週		E期間 日曜日・ 隔週	
		情報教育研究	a 2	塩田　真吾		静岡大D1　1名				
	人文社会系教科学	外国語教育論研究	a 2	白畑　知彦	B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1　1名	B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1　1名 静岡大D3　1名	B期間 土曜日・ 隔週	
		歴史教材論研究	a 2	黒川　みどり	B期間 土曜日・ 隔週		B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D2　1名	B期間 土曜日・ 隔週	
		国語教育論研究	a 2	坂口　京子	B期間 日曜日・ 隔週		B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1　1名 愛教大D3　1名 静岡大D2　1名	E期間 日曜日・ 隔週	静岡大D1　1名
	自然系教科学	数学教育論研究	a 2	熊倉　啓之	E期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1　1名	E期間 土曜日・ 隔週		E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D2　1名
		生物教育内容論研究	a 2	小南　陽亮	E期間 土曜日・ 隔週	静岡大D2　1名	E期間 土曜日・ 隔週		E期間 土曜日・ 隔週	
		理科教育論研究	a 2	郡司　賀透	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D2　1名 愛教大D1　1名 静岡大D2　1名	B期間 土曜日・ 隔週		B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D2　1名 静岡大D1　1名 静岡大D2　1名
	創造系教科学	美術教材論研究	a 2	伊藤　文彦	B期間 土曜日・ 隔週		B期間 土曜日・ 隔週		B期間 土曜日・ 隔週	
		体育教育論研究	a 2	新保　淳	B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1　1名	B期間 日曜日・ 隔週	静岡大D1　1名 静岡大D2　1名	B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D3　1名 静岡大D1　2名
		技術教育内容論研究	a 2	松永　泰弘	B期間 日曜日・ 隔週		B期間 日曜日・ 隔週	静岡大D1　1名	B期間 日曜日・ 隔週	
		家政教育内容論研究	a 2	小川　裕子	E期間 日曜日・ 隔週		E期間 日曜日・ 隔週			
		技術教育教材論研究	a 2	紅林　秀治	B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1　1名	B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1　1名 愛教大D2　1名 静岡大D2　1名	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D2　1名 静岡大D1　1名
		体育・課外活動教材論研究	a 2	杉山　康司	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1　1名	B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D2　名	B期間 日曜日・ 隔週	静岡大D1　1名 静岡大D2　1名
		家庭科教材論研究	a 2	村上　陽子	B期間 土曜日・ 隔週		B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D2　1名	B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D3　1名

目　次

【　論　文　】

資質・能力の視点から見た,防災教育実践研究の動向 ……望　月　　大……1
　－東日本大震災以降の防災教育の授業実践論文を中心に－　村　越　　真

協働対話における母語使用の有効性について ……市　川　裕　理……15
　－エピソードの理解獲得と問題解決の側面から－

10 歳児・11 歳児の物語文の発達に見られる特徴 ……稲　葉　みどり……27
　－Frog Story の場合－

自閉症スペクトラム児に対する心理劇的アプローチの成果と課題 ……長　田　洋　一……37
　－通級指導教室で実践した 4 つの事例の総括－　稲　葉　みどり

電気抵抗の視覚的提示で合成抵抗の理解を促す授業の構想と実践 ……新鶴田　道　也……47
　－中学校理科「電流とその利用」単元における CNP 抵抗器の活用－　大久保　博　和
　岩　山　　勉

指揮を用いた音楽表現のパフォーマンス評価に関する一考察 ……河　合　紳　和……57
　－ルーブリックの作成とモデレーションを通して－　澤　田　育　子
　村　松　佑　哉
　菅　　龍之介

中学校保健体育科における「剣道」授業の課題と「かた」を使った
教材開発の意義 ……菊　本　智　之……69
　新　保　　淳

バレーボールにおける学習プログラムの開発と実践およびその学習効果 ……高　根　信　吾……81
　－状況判断に着目して－　新　保　　淳

【　研究ノート・資料　】

日本のプロジェクト型保育に関する一考察 ……名　倉　一　美……95

Effect of Imagery Training on Motor Imagery and Soccer Dribble Skills
among Novice Female Students ……百　瀬　容美子……103

【　付　録　】

愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科　共同教科開発学専攻紀要発行要項 ……111

『教科開発学論集』投稿要領 ……113

愛知教育大学・静岡大学教育学研究科
（後期３年博士課程）
共同教科開発学専攻　2021年度報告書
ROAD 第10号

印　刷：令和４年３月31日
発　行：国立大学法人愛知教育大学
　　国立大学法人静岡大学
編　集：愛知教育大学・静岡大学教育学研究科
　　ISSN 2187-7319

愛知教育大学・静岡大学教育学研究科（後期３年博士課程）共同教科開発学専攻　2021 年度報告書

[ROAD]

ROAD

第10号　　令和4年3月発行